
世界の漂流者 in ネギま

一条 櫂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の漂流者 in ネギま

【Nコード】

N7288Y

【作者名】

一条 櫂

【あらすじ】

平凡とはちよつと違う生活の中、父の遺品から異能と呼ばれている力を目覚めさせ、それ以後は様々な世界を見て渡り歩き、常に戦い続けて来た少年（？）の物語。

多くの世界を見て、感じ、その世界で幾つもの結末を迎え入れた行き着いたのは、『魔法先生ネギま！』の世界。

転生モノとはちよつと異なる二次創作小説です。

最強モノやアンチ、原作ブレイクetcを含みます

プロローグ 『牢獄の終わり』（前書き）

と言う事で、形になり始めたところでプロローグを投下してみました。

まだ此処では名も出ていなければ、転生モノの様に神様などが出てくる描写もなく、色々吹っ飛んでますが……

それはさておき（まで）、随分寒くなりましたね。

プロローグ 『牢獄の終わり』

「ぐっ……！」

展開された何十何百と言う術式陣に自身の生命力を随時、魔力・法力・霊力・妖力の四つへ変換させて供給を行う。
身体中に痛みが走る。

打ち付けたような、押し潰されるような、斬り付けられたような、刺し貫かれたような、引き裂かれたような。
痛覚に痛みを伝えてくる。

幾度と繰り返し感じた痛みであっても、やはり痛いものは痛いものだ。

「ッ

！！」

声にならない叫びを上げる。

まだまだ、術の発動までは遠い。

未だに十分の一にも満たない、展開済みの術式陣を、更に重ねること十度。

描き、重ね、織り交ぜ、示し、伝い、流し……

『世界』そのものを、塗り替える。

『世界』と言うものを、書き換える。

この世界が、果てなく続くようにと願いを込めながら。
百十四度と繰り返し返された、この牢獄の世界を。
百十四度目の、『世界昇華』を。

たった数年、もしくは数十年しか続かないであろう、『物語の世界』

を、『ひとつの世界』として、造り変える。

「チツ……」

背中が急に軽くなる事に対し、舌打ちする。

重心を両足から左足のみに変えて、重心を保つ。

背中の右側の翼が一枚、崩れ落ちた。

それに続くように、左側の翼も一枚、崩れ落ちる。

急激な力の消耗に、受けられる恩恵が途絶していく。

また一枚、また一枚と、七対十四枚の翼は、崩れ落ちていく。

額から生える、歪こわな二本の角も、

頭部にある獣の耳も、十本の尾も、尖とった犬歯も、

自分に宿る力が、還元されていく。

「コアバス核翼……!!」

足りなくなりつつある生命力を、異なる力で補う。

三十二対六十四枚と、余った一枚の、翼とも言い難い、硝子の破片とも言えるそれを展開する。

けれどやはり、一枚一枚明滅してその形を失っていく。

決定的に、力が足りない。

「あああああああああああつ!!!!」

蒼い左眼も、紅い右眼も、顔を覆う白と黒の文様も、次第にその色を失っていくのが分かる。

どれだけの力を持っても、

それがどれほど、世界樹や神と言える存在達に匹敵するものであつ

ても、

戦うだけの力では、本当の意味で世界を変えるなんてのは、無理なこと。

だから、その世界樹や神に請う。

自身を見て、信じてくれる、世界樹や神々に願う。

声が交わせるのなら、またか、と呆れながら言っただろうか。けれど、今だけは

これが、この牢獄^{せかい}の終わりであって欲しい。

そう、願いたい。

「術式展開……っ！」

『世界昇華』の術式を展開し終え、続け様に違う術式を展開する。世界と世界の狭間に存在する『次元の狭間』へ到達する為の召喚術式『断界門』。

術式を展開し、詠唱文を捧げ、展開を進めていく。

「はぁ……はぁっ……まだ、だ……」

息が苦しい、視界が霞む。

音も遠く、手足の感覚すら失い始めてきた。けれど止まる事は許されない。

止まっではいけない。

立ち止まる事だけは、許されていない。

「ひら、け……だんか、い……もん……」

ちゃんと言葉に出来ているかは分からない。

でも、空間の歪みが生じる事で、世界の扉が開いた事を、霞んで見えなくなりはじめた視界が捉えた。

「導け……」

吸い寄せられるように、世界の扉へと向かう。

足を踏み入れ、『世界昇華』の術式が作動し、世界が歪んだのを確認する。

また、ひとつの世界での『生』を終え、違う世界を目指す。
今度ばかりは、この牢獄の世界から、抜け出せるように、と

プロローグ 『牢獄の終わり』（後書き）

短編として以前投稿した『世界の漂流者』のその後です。
とは言っても、主人公の時系列では、その後と言っても故郷に別れを告げてから、主人公の体感時間で約千百年間かかっていますので、かなりアレですが……。

兎も角、原作にちゃっちゃんと関わっていききたいですね。
それではまた次回？

プロローグ・2 『世界と、出会いと、故郷の夢』（前書き）

とりあえずプロローグ第二話投稿。

行き着いた場所は、ネギま！の世界。

メインヒロインとか決まっていますが、始まりの場所からある程度定まっているような気がしている。

一応、主人公は原作と言うものを知らない設定です。

プロローグ・2 『世界と、出会いと、故郷の夢』

いつもと変わらない時間が流れていく。

いつもと変わらない別離が訪れる。

いつもと変わらない戦争がある。

過去も、未来も。

ずっとずっと、起こった事も起きる事も、同じで。

この千六百年間、ずっと変わらない時間だけが流れていった。

ただ違うのは、別々の世界で、そこで仲間になった者達、取り巻く環境、時間の流れ……

そう言ったものだけが、違っていて。

けれど、そこには絶対争いがあり、例え無くても、火種はあつて。自分がいて、争いが起きて、命の奪い合いになり、世界はひとつの歴史に幕を閉じ、自分はそこから居なくなる。

それは多分、ずっと変わらない事で。

戦う以外の意味を探して、世界を彷徨い、気が付けば結局、戦う事しか出来なくて。

ただ、望まれるがままに、力を奮い、先導し、勝利をもぎ取り、違う世界を目指すだけ。

ずっと変わらない。

きつと永遠に。

死すら失った自分の、罪であり、罰であるように。

ただ永遠に、永久に、続いていく、血の臭いしか漂わない……人生。

瞼の向こうが、光で明るい。

目を見開けば、やっぱり太陽の光が差して、少し眩しい。

「うう、は……」

知らない天井、なんてありきたりな言葉が、そのまんま現状に当て嵌まるのが、若干悲しい。

建築様式は、極東の島国……なんて言うとな怒られるかもしれないが、日本らしい木造建築の天井。

まあ、自分も一応は日本生まれの日本人なんだから、自分の国を卑下するようなことはしたくない。

……そんな事言っても、千六百年も生きて、色んな世界を見て回っていると、そんな事もどうでもよくなってしまう。

「いやいや、その前にここがどこだか確認しないと」

まだ少しボーっとしている頭を覚醒させるように、軽く頭を振る。バサバサ、と長い前髪が鼻や頬をくすぐる。

視界はいつもどおり、左半分だけ。

右半分……右眼に手を当てれば、いつもと変わらない眼帯がある。後ろ髪を掻き上げ、どれだけ長いかを確かめている。

いつもと変わらない、無駄に長い髪だ。

「やっぱり、日本……だよな……」

自身を確かめる過程で部屋を見渡すと、やはり日本だ。
畳や襖なんて、特にそう。

日本の存在する世界ではなくても、近い建築様式をする世界はいくつもあるけど、大抵の場合は日本だ。

この世界の暦が、西暦である、と言った方がいいのだろう。

「……うん、西暦って言えば、しっくりくる」

そんな感じで頷きながら、とりあえず自分が寝ていたらしい布団から抜け出して、襖を開ける。

「おお……」

つい感嘆の声が漏れる。

砂庭式枯山水……で合ってると思うが、立派な庭園ですこと。

……いや、そうじゃなくて……いや、確かに立派ではあるが。

兎に角、縁側とか、日本庭園とか、正に日本らしいと言っか何と言っか。

しかし、見た感じでは建物の中では中枢から少しずれるくらいの位地だろうか。

周囲の通路が多い事から、多分間違っではないと思う。
とりあえず、周囲の人の気配を探ってみる。

「……人の気配が多い……」

人の気配は確かにあった。

すぐ近くに一人、少し離れた所には十数人、それよりも離れると、

四方向に合計六十人くらい？

寺か神社か、何かなのだろうか。
それに……

「……結界？」

広範囲の結界が張られている事に気付く。

結界……それも、東洋独特の術式のもの。

神道か、陰陽術か……多分、その辺りだとはおぼろげではあるものの、分かった。

寺か神社か、と言う推測はどうやらあながち間違っちゃいないようだ。

由緒ある家系などでは、拠点などに結界を張るものだ。

魔除けや妖除けと言ったものを。

「そうか……逆に考えれば、“そういうもの”がある世界なのか……」

そう判断する。

未だに覚醒しきっていない頭は、今より僅かに前の記憶を呼び覚ますのに酷使し、思い出してみる。

「っ……」

ノイズがかかったように、やはりおぼろげにしか思い出せない。

けれど、三百年もの間、たった数年間の世界を何度も何度も繰り返し返していたのは思い出せた。

抜け出せない牢獄の世界。

戦乱の世を走り続けるしかなかった、あの世界。

「……とにかく、抜け出せたんだな、俺は……」

その事に安堵する。

あの世界は、本当に厄介だった。

ひとつの世界が物語としての結末を迎え、その世界から去ると、気が付けば似て非なる世界に墮とされる。

そんな世界を何十回も繰り返し、今、やっと俺は抜け出せたのだと自覚する。

「ははっ……」

乾いた笑いが漏れる。

「そつか。やっと、終わったんだな……」

味方だった者が敵になり、敵だった者が味方となる。

それを繰り返さなければいけない世界だったから、正直、狂ってしまいそうだった。

……いや、もう既に、狂っているのだろうけれど。

「あ、目を覚まされたのですね」

不意に声がかかる。

声の聴こえた右方向を見ると、水の入った桶とタオルを持った、巫女装束の少女。

……なぜ、巫女？

いや、神社とかなら別におかしくはないか。

「えっと、俺は、一体……？」
「ああ、少し待っていてくださいね。今、長様を呼んで参りますから」

巫女装束の少女はそう言うと、サッサと小走りに走り去る。

……と思いきや、咄嗟に止まってこちらを向くと戻ってきて、俺が寝ていた部屋に入って桶を置くと、また走り去っていった。

「……待てって言われたし、とりあえず待ってみるか。状況も把握できていないし」

軽く捻りを利かせて右向け右。

目指すは寝ていた部屋。

歩きだして、入って、適当に座るだけ。

なんだが……

「……おかしい」

ふとそんな言葉が漏れた。

いや、うん、気付かなかった方がおかしい。

「……はあ……」

自分の手を見て、身体を見て、そして重い溜め息。

「やっちまったなあ……」

どうやら、身体が縮んでいる。

多分、俺がまだ人間だった頃の……六歳くらい。

そりゃ、あの巫女装束の少女が俺より背が高いはずだ。

だが……うむ。

「タイムドロップか……これまた厄介だ」

可能性としては、有り得無くは無い。

覚醒しきった頭で、思い出せる最新の記憶を呼び起こせば、世界から離れる際に、神さん方の力を借りて世界の構造を変化させたのだ。世界昇華、とでも言えればいいのだろう。

世界の構造そのものを変化させ、“世界としての寿命”を延ばす。ただそれだけの事。

勿論、難しいと言つか、まず可能な事ではない。

世界と言うのは、世界樹と呼ばれる最上位の存在や、神々などの神格ある存在、そして生命の想念などで成り立っているものだ。

ただ、それが可能だったのは、自分と言う個人が、多くの神々との契約状態にあった事や、世界樹と言う世界の始祖と良き隣人であった事が第一に挙げられる。

そして、その世界が、真の意味で、ただ想念^{おもい}だけで形作られた、短命の世界であった事が理由だ。

その構造を世界樹や神々の力を借りて、神の管理する世界として変換し、崩壊を招かせず、常に正常の状態に保つと言うだけ。

三つ目の理由として、自分が『神の力』を使えた事。

これは、故郷の世界で『異能』と呼ばれる、神が人間達に悪戯に与えた力があつたからだ。

世界生誕の『創造』と『破壊』の二つの異能を持つてして生まれたのだから、ある意味生まれながらにして人間じゃなかった、とも言えるのだろうが。

勿論、それ自体も特殊過ぎる条件下での事だから、出来る事自体がおかしい。

それでも出来てしまうのは、生きてきた中で『力』と言うものに渴望し、手に入れてきたから……になるんだろうか。

そして、その反動が、現在^{いま}。
知識上、五大元力と呼ばれている、氣力、魔力、法力、靈力、妖力の五つに併せ、

多種多様の種族の力や異質な能力を使えば使うほど、自分の身体は時間を遡る。

そうは言っても、身体年齢は十八の頃から止まってしまっていて、身体と言う時間を逆行出来るのも経験上では六歳の頃まで。

そう考えると、『俺』は自身の許容量の限界まで、『力』を使ってしまったのだろう。

意味は異なるが、『異形』と呼ばれる世界のはみ出し者達に与えられた、呪いのようなものだ。

種と言う枠に収まらなくなった者達……『異形』の者は、“本来の自分”の許容量を遥かに超える力を使うと、身体の時を遡る。

例えば、自分で言うなら、異能を持った人間、と言う許容量しかない。

勿論、多少なりと氣や魔力はあっただろうが、それも計算しても、たったそれだけでしかない。

その異能を持った人間と言う『個体』の枠から外れ、『異形』になる事で、それ以上の力を使う事が出来る。

とは言っても、過去に会った事のある同じ『異形』は、たった六人しか会った事が無い為、実際にはどういう条件下で引き起こされる現象なのかは定かではないが……

推論でしかないが、人間と言う枠の中に、『異能』や『種族の力』などの先天性能力や、『魔力付与』などによる恩恵、高位の存在との契約などで、加算された分が、その個人の力になる。

だが、『異形』と言う種族は、力を使おうと思えば、“自分の方から世界へ干渉出来る”、世界樹や神などの存在に近い、イリーガル

な種族。

老いることなく、死ぬこともなし。

勿論、消滅と言う形で『死』を得られるが、魂の輪廻に再び戻る事は出来ない。

これは肉体も魂も、在らぬものとなるからであるが……まあそれはさておき。

本来の自分の許容量と、加算された許容量までは、『異形』としてのキャパシティだ。

しかし、『異形』はそれ以上の力を引き出す事の出来る異質な種族であり、『異形』としてのキャパシティさえも超える力を容易に使用出来てしまう。

敢えて言うなら『異形』とは、“不自由であり自由ではない”種族、と言った感じだろうか。

ただでさえ、本来のキャパシティより超える力を使うだけで、“代償”を支払う必要性があるのに、異形としてのキャパシティさえも超えれば、その代償は遥かに大きくなる。

自分の場合では、本来のキャパを超えれば、その分だけ『感情』を代償として支払う。

力を使えば使うほど、感情のない存在へとなっていく、と言う事だ。無論、ある程度時間が経てばそれも回復する。

そして、異形のキャパを超えた場合では、その分だけ『時間』と『力』を代償として支払う。

時間は既に言った様に、肉体的な時間を逆行する。

六歳から十八歳までの十二年間の時間を、超えた分だけ支払う。

力は、言うまでも無いが、魔力などの五大元力や、異能の力、取り込んだ異種族の能力など、“発現し、情報を改変する力”全て。

「……となると、今の状態で使えるのは大して“深く”はないか」

拘束具の解放が出来ても、取り込んだ種の力は使えないし、後天的な力も殆ど使えないだろう。

良くて、魔法や魔術、あとは氣術関連。

“ 身体的時間の回復 ” を待てば、順次戻ってくるだろうが……。

無論、『異形』は“ 不自由であり自由でない ” とは言え、どんな種族から迫害を受けるに等しい、神さえも敵視するイリーガルな存在なのだが……。

そんな思考の海を漂っていると、氣配を探る必要もないほど、誰かが近くに来ているのを感じた。
七人、か。

「やあ、目を覚ましたんだね」

縁側の廊下から顔を見せて、膝に手をつきながらそう言ったのは眼鏡のおっさん。

おっさん、誰？……なんて言葉は流石に失礼である為、口には出さなかったが。

「貴方は？」

六歳と言う身形を使い、首を傾げながら、見上げる。

……ちょっと、鳥肌が立った気がした。

「私かい？ 私は近衛詠春。この神社の神主……と言っても、分からないだろうね」

六歳の子供と言う、見たままの人間だと思っている、と見てもいいのだろうか。

こっちの見解じゃ、もう丸わかりだって言うのに。

……今の俺じゃ破れそうにはないが、かなり上位の結界に、この近衛詠春と言った奴は、多分戦士か何か。

身のこなしとかは正に前衛系の典型と言ってもいい。

血の臭いがしないのは、現役から離れたからか？

「君の名前を聞かせて貰えるかな？」

「戒人……」

敢えて名だけを名乗る。

こつ言う取り入り方は経験上の常套手段、とでも言った所か。

「苗字は？」

「……」

姓に関しては答えない。

どちらにしろ、長年名乗ってきた姓ではあるが、忌み名に近い。本来なら、姓も名も、違うんだから。

「……そうか。じゃあ戒人君。質問するけど、どうして君は庭に倒れていたんだい？」

「どうしてと言われても、自分には何も……」

分からない、と言うのは別に嘘ではない。

この世界に渡った時の記憶がない。

気を失っていたのであれば、記憶が無くて当然だろう。

「うーん……どうしたものかな」

近衛詠春はそう言って顎に手を当てて僅かに首を傾げ、あさつての方向を見る。

しかし注意は、“こちら”に向いたまま。

多分、俺がこの世界に来た時に何かあったのだろう。

……いやまあ、庭に倒れていたと言う時点で、それがあったと言う事実はあるのだが。

その事を含めながら、また違う注意を向けている。

憶測でしかないが、この世界に来た時、俺は“堕ちてきた”と言う可能性。

つまり、結界内に進入した際、何か反応したのであれば、“そっち”関係の存在だと言う事が確定する。

詳しくは分からないが、神社などで張る結界と言えば、魔除けかそこらだろう。

それに反応したのならば、俺は“そういうもの”と言う事になる。加えて言えば、元力……特に、魔力や妖力の類が知られたら、人間だろうが妖魔の類だろうが、そう言った関係者、又は当人である事も分かってしまう。

全く、厄介な所に堕ちてきたようだ……。

「あの、自分はどれくらい寝ていたのですか？」

なるべく丁寧な口調で、けれど、歳不相応の口調で尋ねる。

俺の言葉に反応するように僅かにこちらに向けている注意……いや、敵意に近いものが鋭くなる。

やはり、ただの神社などではないらしい。

それも浅い関係ではなく、深く結び合ったもの。

「君が庭に倒れていたのを発見したのは三日前の早朝だったよ」

と、六歳程度には分からないであろう言葉で答えてくる。

「と言う事は三日も寝ていたんですね」

近衛詠春の向こうに見える庭園の草木の種や色、澄んだ空気と気温の低さ、僅かな日の傾きから、今が春頃である事を感じ取りながら、俺はそう答える。

そして、決定的な言葉を添える。

それは起きた時から僅かに感じていた違和感。

身体的時間の逆行ではなく、身体が熱を持っているような感覚。

俺は確かに、落下、と言う意味で落ちてきたんだろう。

落下時のダメージで傷を負っているはずだ。

結界の効果範囲からしても、それなりの高さから。

けれど三日も寝ていたなら、速度が劣っていても大抵の傷なら治るはず。

「なら、“傷”は“治っていてもおかしくない”か……」

すると、やはり敵意の色が明確に見えてくる。

近衛詠春だけじゃなく、傍に控える巫女達からも、だ。

「……すみません、少し疲れました。休んでも構わないでしょうか？」

そう告げると、敵意は収めずに近衛詠春は言った。

「うん、しっかり休みなさい。次起きた時には色々話を聞かせてもらうけどいいかな？」

「はい」

俺は軽く頭を下げ、布団に入る。
そして、言い忘れていたように……

「ああ、“監視”は付けてくださっても構いません。貴方がたが自分を警戒しているのは、痛いほどに分かりましたから」

俺の言葉に反応を見せない近衛詠春は、それだけ苦難の道を歩んだのが分かったが、付き人の巫女達は動揺を隠し切れなかったようだ。
“そういう関係者”であるなら、もう少し鍛えた方が良いんじゃないだろうか？

そんな事も思うが、今はどうでもいい。

……疲れたのは本場で、身体が睡眠を欲しがっているのが、良く分かったから。

布団に入り、瞼を閉じれば、すぐに意識はまどろみの中へと落ちていった。

『力』なんてモノが、欲しかったわけではない。
ただただ自分は、平凡とは言えなくても、普通に暮らしたかっただけだった。

世界各国に支社を置く大企業・北条グループの御曹司なんて言われて、それは平凡とは言えないだろう。

けれど、それは兎も角、一人の“人”として、普通に暮らしていきたかった。

例えば自分が、研究材料や実験対象で、偽りの記憶を植えつけられた者であっても、自分は、与えられた生活が好きだった。

息子に声すらかけない父親に、流星は俺の子だ、って言うて欲しくて、色々学んだし、運動だつてできる様になった。

認められたかった。

家族として。

そして、父は再婚し、義母と義妹が家族に加わり、それからまた、一層幸せを望んだ。

金銭とかそう言うのは無しにして、ただ“家族”と言うものに憧れていたのかもしれない。

父・蒼矢、義母・亜夜、義妹・刹那。

父は忙しく、幼少の頃は義妹の刹那と共に、義母の家の雪村流剣術を学び、ある意味、趣味の様なものだったし、

義母は義理の息子になる自分に対して、初めて愛を注いでくれた人だった。

義妹に至っては、年齢は同じになるが、兄妹と言う関係になり、かけがえのない存在になっていった。

けれど、そこに父は居らず。

最早、父が、親として子へ愛を注ぐ、なんていうものを、忘れていくしかほかになかった。

だから、なのだろうか。

アメリカへと長い留学をする事に、何の抵抗もなく、ただ言われるがままに留学した。

自分は八歳の頃から、四年を掛けて大学を卒業し、義妹は六年掛けて卒業した。

二人とも卒業した事から、一度は故郷へ帰るという選択肢を得たが、結局それから四年間はアメリカで過ごしていた。

十年経ったある日、父の弟……叔父から一報が入る。

父と義母の事故死。

自分は父の死に対し動じることはなかったが、愛情をくれた義母の死にはさすがに同様した。

義妹に至っては、泣き崩れるほどのショックで、兄妹二人で帰郷した。

葬儀や相続、後継者など、様々な問題がありつつも、全て自分で執り行い、叔父に「成人するまで」と言う条件をつけて北条グループの社長代理まで任せたのは、今思えばかなりバカらしいものだ。叔父は白鳳学園の学園長でもあって、北条と言う家系では第二の権力者。

人柄も良いし、信用はできる人だった。

だから、『俺』は妹と二人、白鳳学園の高等科三年として、二年間と言う猶予を貰い、飛び級して大学を卒業した身でありながら、高校生活をする事になった。

あの時は流石に父親と言う者に対し、呆れ返ったものだった。

北条本家の邸宅が、白鳳島まるまる学園都市のほぼ中央部にあったのは仕方ないことだが、明け渡して学生寮にするなんて、全くふざけたものだ。

帰るべき実家が学生寮になる。

父に文句を言っただけでやりたかったが、亡き者に口などなく。

承諾せざるを得ず、一応寮長として自宅を守ったが……まあ、悪くはない生活だった。

……けれど、そこから『ちょっと違う平凡な日常生活』からは一転してしまった。

父の遺品。

小さな木箱。

その中に入っていた、大きな黒い眼帯。

それが、全てを変えてしまった。

きっと、それに気付かなくても、同じ事になっていたかもしれないだろう。

『故郷の世界』に存在した、独特な能力。

『異能』。

ただその言葉の意味だけでは、特異な能力に過ぎない。けれど、その力は大きなものだった。

神が、文字通り“悪戯”に、人に与えた『神の力』。

不完全とはいえ、神族の力だ。

様々な制限こそあれど、その制限の外では大きな……いや、大きすぎる力だった。

『創造』 『破壊』 『蒼血』 『紅血』 『白烙印』 『黒烙印』。

本来ならば一つ、稀有なケースであつても二つまで。

後にそう知り、本来ならばもう途絶えたはずの異能を持った、自分。

それが、“戦争”の始まりでもあつた。

プロローグ・2 『世界と、出会いと、故郷の夢』（後書き）

と言う事で始まりは関西呪術協会本拠地から。

ある意味メインヒロインは木乃香や刹那辺りになるんでしょうか？

ちなみにですが、今回は前半や後半は、戒人の夢の様なものとなっています。

補足として

戒人の知る刹那、ネギま！の刹那が、名前に被っている点について。

これは元々、昔に創作で書いていた『故郷の世界』でのヒロインの名前が被ってしまったているだけですので、特にこれといって関係ありません。

ブログ・3 『過去と、養子入りと、鍛練と』（前書き）

ブログ・3、投稿。

主人公が最強？ まだまだ先の話だぜ（なに

何故か流されて養子入りさせられてしまう戒人君。

プロローグ・3 『過去と、養子入りと、鍛練と』

古い記憶の夢から覚めれば、今自身が居る『現実』に意識が戻る。

「……過去の夢なんて、いつ以来だろうな」

そう呟き、障子の向こうに映る影を見る。

多分、監視役を担った者だろう。

「本当に、出られたんだな」

再度、ここがあの“牢獄”と言ってもいい世界とは違う世界である事を確認して、身体を起こす。

「……これは、現実だな」

自分の幼い身体を確認して、溜め息を漏らす。
こっちだけは、夢であって欲しかった。

「起きられましたか？」

不意に、障子の向こうの影が動き、声をかけてくる。

呟いた声が聞こえたのだろう。

「はい」

「では、少々お待ち下さい」

答えると、そう言われ、どうするまでもなくただ待つことだけを決める。

どちらにせよ、警戒されているのでは下手に動くことは出来ない。

「どうなるのかな、俺……」

今の自分では、戦う事は出来ても、それなりの実力者が居れば負ける事は確定的だ。

特に、“ココ”じゃ、相手の戦力はあるし、あの近衛詠春はかなりの実力者だろう。

……まあ、血の臭いが薄れている分、戦場を離れて数年は経っているのだろうが……。

状況も分からない状態で、いきなり対立するなんて選択肢を頭に入れている分、自分自身どうかと思ってしまうが。

「戒人君、いいかな？」

「はい、どうぞ」

近付いて来ていた足音が止むと同時に、声がかかる。

近衛詠春だ。

サツと障子が開き、近衛詠春と数名の付き人、そして二人の少女が入ってくる。

身体を起こしたままで、まだ布団の中だった事から、布団から出ようか、と考えて身体を動かすが……

「ああ、そのままで構わないよ」

と、近衛詠春に言われて、布団から出る事をやめて落ち着く。

「二度目になるけど、私は近衛詠春。そして……この子達は初めてだね。木乃香、刹那、挨拶しなさい」

「えと、近衛木乃香言います」

「桜咲刹那です……」

行き成り何だ？、と言う疑問が湧くが、兎も角先に名乗った少女の姓に、多分近衛詠春の娘だろう、と言う結論が出る。

「……戒人、です」

少々戸惑いながらもこちらも名を名乗る。

やはり、姓だけは伏せたまま。

「何故、この子達を？」

「二人は君の第一発見者だからね。話が早いだろう？」

敵視した相手の所に、弱みになる存在を連れてくるのはただ危険なだけ。

それでも連れてきたのは、何かしら理由があつての事か？

「はぁ……」

溜め息ではなく、相槌の言葉が出る。

「自分では此処に居る事さえも分かっていないので、それは助かりますが……」

「うん、そうだろうね。木乃香と刹那の話では、空から落ちてきたらしいから」

……ああ、本当に落ちてきたんだ。

「戒人はんは、ケガはもう大丈夫なん？」

そう言ったのは、近衛木乃香と名乗った少女。

落ちてきた、と言う現場を見たと言った。

なら、擬音で言うなら、グシャリ、と言う現場も見たと思う。

だからこそ、心配する眼差し……なのだろうか。

純粋な子供だから、あれで死んだとかは考えにないのか。

ただ、服が甚平になっている事から、汚れていたから着替えさせた……と言うか、させられたのだろうか……うむ……

本気と書いてマジとかガチとか読むレベルに、血塗れだったに違いない。

「もう大丈夫だよ」

若干歳相応な口調になりながら、その上僅かに笑ってみせる所は、自分の身体に対して年齢を無意識的に合わせてしまおうと言う、悪い癖。

「それで、近衛詠春殿……自分に聞きたい事とは、何でしょうか？」

近衛詠春に向き直り、そう訊ねる。

そこで、もう必要ないと見たのか、二人の少女を退室させる。

確認の為に連れてきたようだが、ここまであつさりだと……何故連れてきたのがよく分からない。

「ええ、そうですね。ひとつは、何故落ちてきたのか。

そして、本山の結界にかかりながらも、そのまま結界内に入った事について。

最後に、君は一体何ものなのか……」

言い終えて、僅かに瞑っていた瞼を開き、こちらに視線を向ける。

そこには、前の様な明確な敵意はない。
そして、何がそこにあるのか、分からなくなった。

「……」

ジツと見てみるが、やはり分からない。

同時に、何から話せばいいのか、何を話せばいいのか、こっちは考えあぐねる。

…… 本当に、厄介な場所に“堕ちてきた”らしい。

逆に、保護や協力などが得られれば、それはこの上ない事。

だけど、それは紙一重。

利益にならなければ、確実に保護や協力などと言う形はあり得ないし、元々、こういう人間達は外部を嫌う性質がある。

魔法使い然り、魔術師然り、呪術師然り……つまりは、秘匿性のあるものは、可能な限り入れない事を重視する。

無論、それは秘匿性があれば、ではあるが……。

なら、ここで取るべき行動はひとつ。

自分も、相手と同じ、“そういう関係”の者であると言う事。

勿論、問題がない訳じゃない。

東洋独特、それも神社のような、そう言った組織か何かであるなら、海外…… 異国のものになるであろう術式は逆に警戒される可能性もある。

それでも、自分も同じ関係者である事を知らせるのは、下手に警戒されない為。

無関係者では最早筋が通らないのは分かりきっている。
たった三日で、大きく破損したはずの肉体が、元通り。

人差し指を立てて、ただ一言、唱えるだけ。

「グロウ
……灯」

指先に灯りが生まれたその瞬間、巫女達が敵意を剥き出しにしたのが分かる。

「なるほど。それは分かりましたが、戒人君が一体何者なのか、答えてはくれないのかな？」

このおっさん……やり難い相手だ。

「……見てのとおり、子供」

「うん、それで？」

……。

「……はあ」

ため息が出た。

「何者か、と言われても、どう答えればいいのかわかりません。……ただ、言うのであれば」

そこで一息つき、

「ただ、この“世界”に流れ着いた、“漂流者”ですよ……」

魔法使いか魔術師とでも言えば良かっただろうか。

けれど、明確な答えではない。

敢えて言うなら、漂流者。

そう思って、そう告げる。

多分、自分を表すのなら、漂流者とか、遍在者とか、そう言う言葉が似合う。

流されるままに世界へ辿り着き、けれどそこにはいない。

何処にでも居て、何処にも居ない。

多分きつと、自分はそんな存在。

「……近衛詠春殿。貴方を信用して、貴方だけとお話したい」

そう告げると、逡巡した後、近衛詠春は巫女達を下がらせた。

「これでいいかな？」

「ありがとうございます。……では、」

それからたつぷり一時間かけて自分の事を話した。

異世界に住んでいた事、何かの拍子でこの世界へ流れ着いた事、気がつけば此処で寝かされていた事。

自分が魔法や魔術を使う、力を持った者である事。

言わずに済むところは、はぐらかす。

けれど、やはりやり難い相手で。

「それが全部、という訳では無さそうだね？」

そう言われるのも、ある意味仕方のない事で。

「……結界に引っかかった、けれどそれを抜けた。その理由は多分、自分が人間ではないから……じゃないでしょうか？」

もう少しだけ詳しく話して、その後に期待する事にした。

……で。

どうして自分は今、抱かれているんだろうか。

近衛詠春は、とりあえずは保護と言う形で自分をこの、“関西呪術協会”の本山と言う、この場所で一時的に身柄を保障してくれる事になった。

自分が話したのは、自分が生まれ、真実を知り、目的を果たすまでの五百年間を要約した話。

その上、その話を信じさせるために、自分の力を封じる　　と言っても、今では大した力もないが　『廻無の鉄』と言う眼帯を外し、解放できる所まで見せた。

正直、そこまで話せば、自分が異質過ぎる存在である上、排除すべき敵のはず。

それがどうして、保護と言う形でこの場で生活させる事になったのか。

いやいやいやいや、それはまだいい。

逆に良すぎるくらいで怖いのだが、それはこっちとしても正直ありがたい事だ。

だが、しかしな？

「ああ、かわええわあ……」
「うぐっ……！」

自分は今、近衛木乃葉と言う、京美人と言う言葉が似合う女性に、後ろから抱かれ、膝の上に居る状態になっていた。

「あはは。戒人君、気に入られたね」

いや、近衛詠春、アンタは笑っている場合じゃないだろう！？

「あ、あの、近衛詠春殿、これは……！」

「あゝん！ 逃げへんでもええやんか」

「いや、あの……」

力は大して強くない為、振りほどけないほどじゃない。

無理に振りほどけないほどじゃない……んだけど、何か振りほどくのは罪悪感がある！

「なんで……なんでこうなった……」

それから二週間ほど。

正確には、最初の三日と、目覚めた後の二度寝に一日を併せれば十

八日ほど経った現在^{いま}。

「……………はあ」

日課になりつつある溜め息が出て、布団から出る。

「本当に、何でもこうなったのか……………」

部屋を見渡すと、最初に見た部屋よりは全然違う部屋。

八畳ほどの部屋だが、正に純和風と言える室内は、自分に割り当てられた一室。

「流された俺が悪いのは、分かるんだけどさ……………」

正直、泣きたくなる。

今なら枯れた涙も流せるんじゃないだろうか、と思うくらいに。

「戒人様、お目覚めになりましたか？」

「……………あ、はい。起きてます」

巫女の一人が障子を開けて、礼儀正しく頭を下げ、ゆっくりと部屋に入ってくる。

なんと言つか、もう、正直……………いや、ぶっちゃけ、思い出したくない。

だけど……………」

『なあなあ、戒人君、ウチの子にならん？』

『……へ？』

『あなたも良いわよね？』

『はは……そうだね。木乃葉が気に入ったのなら、それも良いかもしれないね』

『いや、あの……？』

『戒人君は家族が居ないのでしょう？　ほんとにウチ、息子が欲しかったんよ』

『えっと……？』

『戒人君なら問題ないだろうし、私は構わないよ。戒人君もどうだろうか？』

『いや、ちよつと、まっ……』

『あゝ、ホンマかわええわ』

『うっ……く、首がつ！？』

あの時の事を思い出して、溜め息をつく。

「本当に、なんでこうなっただろ……」

「何か仰いましたか？」

「あ、いえ、何でもないです」

しかし……本当に、なんで流されたんだろう……。

自己嫌悪に陥るとかそう言うレベルじゃない。

今じゃ大した力もない、それなりの魔法使いより上程度の自分とは言え、千六百年間生きていた自分が、こつもあつさり流されるのは、本当に泣けてくる。

それだけ、あの近衛木乃葉と言う女性が、無慈悲にも優しすぎたと言つのはあるとしても……。

「それでは、失礼致しました」

布団を持ち上げた巫女さんは頭を下げ、部屋から去っていく。

「……ああ……」

本当にどうして……いや、もう何言っても仕方がない。
だが、だが……

「だからって、本当に養子にするなよ……」

異世界の人間で、更に言えば“人間だった”奴で、
この世界では疎まれているらしい吸血鬼とかの側面を持っていたり、
他にも狗族などの側面があったりと、

本当に厄介で複雑な奴……それに、異世界から来たんだから、戸籍
なんて当然あるはずもない。
それなのに……

“俺”は、近衛と言う姓を与えられ、父・詠春、母・木乃葉と言う
両親を持つ、子供となった。

あの日の翌日、一日中どうして流されたのかと自問自答しまくって
いたところ、

朝食を「家族だから」と共にし、妹になる木乃香と、その守護役で
木乃香と同年代の刹那と再度挨拶を交わし、

その日は母となった木乃葉に一日中遊ばれ(?)、昼食、夕食の後、
風呂になると母・木乃葉と一緒に入ろうなどと言い出し……

まあ……結果的には、父・詠春と一緒に入る事で何とか逃げ切った
んだけど……

「あゝあゝ……」

……それ以上は、思い出したら何か本当に自己嫌悪しか出てこない。
どうして自分は流されたんだ、本当に……。

何とかこの家……と言えはいいのかよく分からないが、兎に角、近衛家での生活はさすがに慣れてきた。

勿論、母上　これでも母になった為で、家柄上そう呼ぶ事になっている　だけは苦手だ。

生活には慣れ、六歳である木乃香・刹那の両名と同じ歳であるとして、自分も容姿としては六歳である為、六歳として過ごし始めた。兎に角、生活する中で分かる事は、自分も所謂“魔法関係者”である事から父上からいろんなことを聞かされた。

敵視した相手に、何故息子として扱えるのか、と言う疑問はありありだったが、もうそれも考える事を止めている。

まあ、東西に分かれている大組織……西はここ、関西呪術協会の長は木乃葉の父にあたり、

東の麻帆良、関東魔法協会は一応自分の祖父にあたるというのだから、何かもう近衛って言う家系が恐ろしく見える。

もつと深い裏事情こそ知らないものの、時折父上の話に出てくる“大戦”の話から、“紅き翼”や“魔法世界”、“連合”“帝国”など、気にかかるものは色々あったが。

「……近衛戒人、か……」

偽名を使う事は幾度とあったが、姓名を与えられた事は少なかった。今回で五年度目だと記憶している。

偽名の方は、もう何度使ったかは、数えれば正確な数さえも思い出

せるだろうが、思い出すほどでもない。

そんな時、ぺたぺたと素足で廊下を歩く音が耳に入る。
僅かだが、足音を殺すもう一人の気配。
またか、と思いながら、小さく息を吐く。
溜め息ではなく、ただ一息ついただけ。
サッと障子が開けられ……

「戒人兄い、せつちゃんと三人で遊ばへん？」

そう言ったのは妹になった木乃香で、その隣には刹那がいる。

……“刹那”、ねえ……。

何度聞いても、少し気が重くなる名前である。

「ああ、いいよ。今日は何するんだ？」

「そつやな。せつちゃんは何がええ？」

「う、ウチは何でもええけど……」

養子に迎えられた二日後から、新しい世界で、新しい日常になった風景が、今日もまたやってくる。

こんな日々が、いつまで続くのだろうか？

どうしてこんなに平和なのだろうか、と思う中、このまま続いて欲しい、とも思いながら、

やはり、“俺”はどこまでも、平和と言うのが似合わないヤツなんだな、と再確認してしまう。

近衛家……関西呪術協会の本山では、多くの者が出入りしているのが分かる。

言うまでもなく、関西の東洋魔術を基礎とする組織の者達……つまりは関西呪術協会に連なる組織だ。

経験則だが、こういう“協会”って言うのは色々問題を抱えている事が多い。

寧ろ、抱えていない、なんてのはまずあり得ないと言ってもいいだろう。

特に関西呪術協会なんて、組織の集まる、巨大な組織。

そりゃあ問題だって抱える。

六歳の身形とは言え、千六百年もの間養い続けた知識は伊達じゃない。

……いや、伊達でもあるが。

俺は元々記憶力は良い方だった。

けれどそれは、僅かに一般より高い程度。

別に天才ではなく、ただ記憶力が少しいいだけ。

勉強だって、元々好きでやっていたわけじゃない。

でも、それが必要だった事もあるし、戦って勝つ為には色々覚える必要があった。

戦闘もそう。

基礎運動能力を身に付け、戦い方を覚え、数多の力もひとつひとつ時間を掛けて覚えたものだ。

初めて使った魔法は、『魔法の矢』。

この世界で言う、西洋魔術の『魔法の射手』と似た魔法。

まあ、西洋魔術とか東洋魔術とか、俺の知識上ではどちらも『魔法』でしかないが……まあそれはさておき。

何が言いたかったかというと、ただ“知識”の上で、組織って言うのは問題を抱えているものである事を知っているだけ。

それくらい、そこらの人でも分かる事だ。

完全な一枚岩になることは、殆どない。

組織の集まる巨大な組織であれば、なおさら。

関西呪術協会は大きく分けて、長である近衛詠春を筆頭とした穏便派と、多分幾つかの組織がくっ付いている過激派の二つに別れる。

長年、日本と言う一つの体系を守る関西と、外から入って来た関東の争いが絶えず、それをどう対処するか、と言う事で派閥ができている。

それ以前からあったのだろうが、そこまでは俺の知った所ではない。

正直、だからなんだ？、と言うところなのだが……。

「……なあ、詠春。……お前の家は一体、どうなってるんだ……？」

「いやあ、鶴子さんも素子さんも、元気だなあ……」

養子になってからは「父上」と呼んでいた近衛詠春を下の名で呼ぶ。

「母上みたいな人は、もう嫌だぜ……」

「まあそれだけ戒人君が好かれてるって事じゃないかな？」

それでいいのか、アンタは。

そんな台詞が浮かぶが、引っ込めておく。

俺が養子になってからは、父上は俺を下の名前で呼び捨てで呼ぶが、どうにも二人きりになるとそれは変わってしまう。

異世界で戦い続けた『異形』と、この世界の“魔法世界”と呼ばれ

る地で起きた“大戦”を戦い抜けた『英雄の一人』。
そう言う立ち位置になる。

俺は記憶の一部を見せる事で半ば無理矢理納得させたと言う立場だが、追体験するようにいくつかの記憶を見てもらったから、その後はいつも以上に老けてみえゲフンゲフン。

「母上は母上だからと割り切るけど、詠春の従妹は……何と云うか、おぞましいな」

「そこまで言うかい？」

「母上と同類なんて、俺には耐えられん……」

「あはは……」

苦笑する父上の表情に、若干同情に近い感情が混ざっているのが感じられたお陰で、こっちは頂垂れる一方だ。

青山鶴子と青山素子。

近衛詠春は婿入りで、旧姓は青山。

その従妹に当たるのが、青山鶴子と青山素子の二人。

養子をとったと言う報が出回ったらしく、二人揃って関西呪術協会の総本山へやってきた。

それからは、まともそうに見え、父上から聞いていたように腕の立つ二人だと聞いていたから、どんな女性なのやらと思っていた。

でも、本質とまでは言わないものの、母上に似た傾向の持ち主で。

……特に、鶴子さんが。

……

……

……

いや、思い出すのはやめよう。

まだ素子さんがまともで、救いの手を差し伸べてくれた事だけは、

記憶に留めて置く事にする。

「……ああ、そうだ」

「どうしたんだい？」

「父上、少し“鍛練”の相手になってももらえませんか？」

そう言うのと、僅かに父上の表情が変化したのが分かった。

「自分は自分の剣術を、父上は父上の神鳴流で戦って欲しいのです」

「……それは、どういう意味かな？」

「ただの鍛練ですよ。今の自分が、どこまで戦えるのか知りたいのです」

そして、

「それと、出来れば刹那を立ち合わせてください。彼女には剣の素質があり、素養さえあれば一線級にはなります」

「……未来的には刹那を戦わせると？」

「父上が木乃香の護衛につけるくらいですし、聞いた話では、鶴子さんが連れてきた烏族とのハーフの子らしいじゃないですか」

「そこまで分かるものかい？」

「それはまあ、同族意識に近いものを感じただけですが」

真意を確かめるように父上は俺を見る。

逡巡するかのようにほんの僅か、視線をずらした後……

「戒人は良い子ですね」

なんて言ってきて

「やめる馬鹿耳が腐る」

なんて反応してしまう所、俺は結構素直じゃない。

容姿がどうか、力がどうか、実際には大きな問題。

けれど、そんなものに拘っている余裕はいつかなくなる。

刹那と言うあの子に対し、僅かに同族意識を感じた。

でもその程度で、自分がとやかく言う心算はないし、更に言えば俺の方が圧倒的に性質が悪いだろう。

人間と烏族のハーフ、と言えるだけマシにも思えるくらいだ。

あの子もいつかは、神鳴流剣士になっていく。

今の俺ではあまり感じられないが、東洋最大の魔力を持つらしい木乃香の護衛をするなら、強くなって守って欲しいと思う。

ただ戦うだけの力では、守る事は出来ないが、守りたいと言う強い意志があるなら、戦う力は守る力になる。

要は気持ちの持ち様で、ただの詭弁だろう。

だが、守れなかったときの悲しみや絶望なら、俺は良く知っている。

「いいでしょう。木刀でいいかい？」

「いえ、真剣で」

ニヤリ、と口の端を歪めてしまったのは、久しぶりと言うほどでもないが、結局は“戦い”を望む自分が居るのは、やはり俺らしいと思った。

あの翌日の早朝。

桜の木が一本植えられている庭に、俺は来ていた。

開けた庭は広大で、多少は大技になっても被害は地面が若干決れるくらいで済むだろうと一人頷く。

服装は白い着物の上に浅葱の袴。

父上曰く、神鳴流剣士の正装らしい。

腰には黒い鞘に収まった、黒い柄の日本刀。

日本刀とは言っても、六十六センチの小太刀。

帯電刀・来電。

今の自分が使える、武器であり、数少ない力のひとつ。

千五百年と言う、自分の生きてきた時間の大半を共に過ごした刀。

「おはよう。早いね」

「戒人様、おはようございます」

そう言っただけだったのは父上と刹那だった。

父上は同じく浅葱の袴で、刹那はいつもと変わらず赤い袴。

ただ、父上は腰に愛刀・夕風を携えている。

刹那は木刀なのは、やはりいつもの事。

「それが戒人の刀かな？」

そう言った父上の視線の先は、やはり俺が腰に差している刀。

「その通りです。父上もこの刀、見覚えがあるでしょう？」

記憶を見せた中では、俺がこの刀を振っている場面もある。

「一本で使うと言う事は、“雷の方”かな？」

「ええ」

そう頷いて見せて、右手で黒い柄を掴み、抜刀する。

黒い鞘、黒い柄、そして黒い刀身。

父上が“雷の方”と言ったのは、これと全く同じ姿形をした刀がもう一本あるからだ。

帯電刀・来電は、二振りでひとつ。

その片割れは風生刀・風切と言うのだが、今の俺ではそのどちらか片方を“召喚”するのがやっと。

名のとおり、帯電刀・来電は雷を、風生刀・風切は風を操る力を持った、いわば妖刀。

正確な呼称で言えば、雷を操る異能と、風を操る異能を宿した、異能力と呼ばれる代物で、神器や宝具と呼ばれる、神代のものや英雄達の所有物と同列に位置する武器。

同列とは言っても、能力的には最低ランクになるのだろうか……。

「さあ父上、抜いてください」

俺が言うと、父上も夕風を抜く。

長く細い刀身は、日本刀らしい美しさのある刀。

「勝敗はどうするんだい？」

「そこは俺と父上が決めた方が早いと思います」

そうだね、と言うところ、今この総本山では見て勝敗が分かるほどの実力者は居ない事が分かる。

元々分かってたからの提案ではあるが。

「あの、長様。これは……?」

「刹那君は良く見ていなさい。これから起きる事は試合ですが、限りなく死合に近いものだ、剣士同士の実戦なのだと思います」

「え…… あ、は、はい!…… でも、戒人様は大丈夫なのですか?」

そんな刹那の言葉に、父上は苦笑する。

「まあ、見ていれば分かるさ」

俺はそう言って、足元にあった小石を高く蹴り上げる。

カッ

五メートルほど飛び上がり……

……そして、落ちる。

コトン

「ふっ !」

瞬動術で瞬時に間合いを詰めて、己の右手にある得物を左下から右上へと振り上げる。

「ッ!」

それを受け流した父上だが、その表情には驚愕の色が見えた。

父上は、本当の俺を知らない。
ざっと150年分くらいは記憶を視ているし、瞬動を使う俺をその記憶の中で視ている。
けれど、500年の時間を話し、たった150年の記憶を見ただけ。1600年間の時間を、全て知っている訳ではない。
無論、父上は自分の扱う“雪村流剣術”を知っているし、その特徴だつてその眼で視ている。
そして何より、今の俺は弱い。
でも

技術まで失った訳じゃない。

「これはさすがに驚きましたよ?」

「驚くのは早いですよ、父上?」

技後硬直でもするかのように止まった、刀を振り上げた俺と受け流して防御した父上。

その体勢のままだったが、刃を返して振り下ろす。

それに気付いて受け流して防ぐ父上は、その後間合いを取った。

「今が**無鞘閃**ですか?」

「ええ、そうです」

互いに体勢を立て直して言葉を交わす。
無鞘閃。

雪村流剣術の基礎と言える技術。

その刀身を見せず、鞘に乗せて滑らすように振り抜く居合いを、鞘なしで高速に振り抜く。

氣が魔力のどちらかで刀身と腕部だけを強化して振り抜く。

硬度や威力を上げるのではない。

ただ速度を、剣速を早くする為の技術。

特に、“雪村納刀流剣術”と呼ばれる、雪村流の一派は常に扱う技術だ。

その後は互いの刀がぶつかりあい、幾度となく剣戟が少し冷たい朝に響く。

「ハッ！」

「ふっ！」

さすがに、強い。

そして、今の俺は弱い。

そう感じる。

この背丈じゃ刀も碌に振れない。

「くっ……！」

目の前に来た刀を、慌てて防ぐ。

考え事に耽ってちゃ、流石にまずい。

そう考えるや否や、父上が柄を捻った所を見て咄嗟に身体を伏せた。

「斬岩剣！」

鋭く風を切る音と共に発せられた声。

身体を伏せると同時に振り抜かれた刀が頭上を通り抜ける。だが、相手が強いと言っただけで、怖気付く訳にもいかない。

「りっかせん六花閃！」

起き上がりと共に来電を振り上げる。

最下段から上段へと縦に一閃。

体格差があるが故に避けるのは容易かったが、こちらの斬撃はリーチが短い。

身体能力も落ちている分、いつもより来電が重く感じているし。

無論、刀身の長さにも関係する。

一度互いの剣技を放てば、その後は荒れる。

「氷迎爪ひようめづめ！」

「斬鉄閃！」

幾度となくぶつかり合う。

神鳴流には驚かされる。

さっきの斬岩剣も、今見た斬鉄閃も、単純かつ効果的な技。

氣による強化……そして技量。

衰えた？ そんな甘いものじゃない。

父上の眼光は、戦場を潜り抜けた者の眼だ。

……何か、今思いついても胃が痛くなるとか言ってたのは、多分話に出てくる『千の呪文の男』サウザンドマスターの所為らしいけど。

それはさておき。

俺の剣術は、雪村納刀流剣術。

本来は異能としての力が弱かった雪村家が、自分の一族の氷の異能を上手く用いた接近戦闘術。

技を真似る事は出来るが、氷の異能を用いた完全な再現は出来ない、いわば贋作。

完成された剣術と、未完成の剣術。

どちらが上かなど、分かりきっている。

「行きますよ、父上」

僅かに口の端を歪めて言う。

「はは……次で最後にしようか」

夕風を構え直すところを見ると、流石に歳で長いこと戦えないのだろう。

……老いは怖いな、老いは。

けれど、今の自分で父上についていけているのは、ただの錯覚。本当に殺し合いになれば、広範囲の奥義が放たれるんだろうが……。

「啼け、来電……」

氣を己の得物に流し、その力を発現させる。

帯電刀・来電は、雷を操る異能を宿した、異能刀。

異能『雷迎』^{らいよう}を所有する一族の、“人格”と“力”が宿る、妖刀。

……まあ、人格は今の状態じゃ目覚めさせる事は出来ないが……。

氣を流し、通し、循環させ、核玉^{かくぎよく}を目覚めさせる。

パリッ、と刀身が放電を始める。

「戒人、それはいけない」

それに気付くや否や、父上は言った。

「心配は要りませんよ。……今の俺じゃ、大した威力や出力はありません」

「む……そうかい？」

「ええ。尤も、今の状態でも全ての氣を注いで、広域殲滅系統の奥義を使えば、色々と吹っ飛ぶ可能性はありますが」

「……それは、勘弁してほしいな」

「大丈夫です。今は、対人用のを使いますので」

「戒人……父親を殺す気かい？」

「サムライマスターの父上なら、大丈夫かと思いますが？」

終始苦笑のままの表情で固まる父上。

まあ、無理もない。

俺の記憶の、重要な部分はいくつか見てもらっているし、雪村流と異能力を使った奥義もいくつか見ている。

無論、それは今より総合的な氣や魔力が遥かに上だった時のものだが。

トッ、と地を蹴る。

足には魔力を込めた、瞬動で。

来電には氣を流して力を発現させた状態で。

氷の異能が使えないからこそ、他の異能で代用した技。

「……雷迎衝！」

「百烈桜花斬！」

え、ちよつ。

そんな奥義使うなんて、父上が非情だ！

雷迎衝は良くて中の下なのに！！

放たれた雷撃は父上の神鳴流の奥義らしい技に相殺されて、ただの斬撃になる。

慌てて周囲に氣と魔力を拡散させて、簡易的な防壁として利用する。

「ぶぺっ！！？」

けどそんなじゃ防げる訳もなく、無様な声を上げて吹っ飛ばされた。

プロローグ・3 『過去と、養子入りと、鍛練と』（後書き）

試合を見ていた刹那が置いてけぼりな今回。

あと二、三回ほど話を入れたら、多分、きつと、原作開始までは入るかもしれない。

でももう少し序章は続けた方がいいかなあ、なんて思ってたかもしれない。

幼少時代としては、木乃香や刹那に深く関わらせていきたいかも？

補足

名前だけ出てきた鶴子と素子の出番はないと思う。

余談。

前回は書いたけど本当に寒いですね。

昨日の今日で見事に風邪を引きました。

プロローグ・4 『人と、人間と、戦場の臭い』

目が覚めると、ここ最近で見慣れた天井が最初に視界に入った。

前の記憶を思い出せば、父上を一発ぶん殴りたい気持ちに駆られる。

「ああ……吹っ飛ばされたんだっけ」

何とも情けないものである。

……。

本当に情けないものである。
再び思い出して、そう思う。

「あ、起きられましたか？」

声がかかって、その声が発せられた方を見る。

「刹那か……」

コクン、と頷いてみせる刹那。

「どれくらい寝てた？」

「一時間くらい、です」

時間を聞くと、すぐに帰ってくる。

「大丈夫ですか？」

と聞かれれば

「まあ、大丈夫じゃないのか？」

と返して。

……気まずい空気が流れる。

いや、たった六歳の子供でこんな気まずい空気とか、初めてで困る。

「ち、父上は何か言っていたか？」

「え？ えっと……いずれ私も戦う事になるから、修行は惜しまぬ様にと……」

「……ん。そつか」

俺はそう言っつて、つい刹那の頭を撫でる。

変に強気じゃない所は、“あいつ”に似てるなあ。

「刹那は、木乃香の事が好きか？」

「へっ!？」

「あ、いや、変な意味じゃなくてね？」

と言っつて通じるかどうかはさておき。

「うん。このちゃんは好き」

……“は”と申したか、刹那よ。

「なら、出来るだけ早く打ち明ける事だ」

「っ……」

「一線を引いてるから、隙が出来てしまう」

「どう、して……」

「ただの“同族意識”だよ。俺も、似たようなものだから」

そう言つてやると、刹那がキョトンとした顔をする。

「刹那は“人間”じゃないかもしれない。けど、刹那は“人”だろう？」

それはただの、俺の価値観に過ぎないだろう。

でも俺は、“人間”と“人”を分ける。

人間は、人間族。

人は、人。

俗に言う“人の心”を持つているなら、それは人と同じ。

身体的特徴や、種族としての力とか、そんなのはどうでもいい。

要は“人の心”があれば、それは“人”だって事。

それを理解するのは、六歳じゃ難しいかもしれないけれど。

「否定されるのが、拒絶されるのが、怖いのは分かるけど」

そうやって、一線を引いているから、遠慮が出来る。

まだ短い間とは言え、木乃香が刹那をどう思っているのかは分かっているつもり。

つもりと言っただけで、それは俺が見て感じただけのことではあるけど、きっと、木乃香は友達として刹那を見ている。

ただの護衛とかじゃなく、対等の友人として。

母親が母親なだけあって、子も子だ。

人間と鳥族のハーフとか、そんなのはどうでもいいだろう。だから、母上も父上も、刹那をこの家に呼んだのだろう。

「刹那は、刹那だろう?」

まあ、俺は否定される側の存在だから、苦笑するしかないけど。

「本当に木乃香が好きなら、守り抜いてやれ。俺は養子として近衛の姓を貰ったけど、言ってしまうえば、俺は刹那と同じだからな」

そう、同じ。

「それでも怖いのなら、自信がつくまでは隠したままでもいい。けど、いつかは話してやれ」

撫でたままだった手を止めて引くと、刹那は顔をあげる。

「……でも、ウチは怖い……」

「ん……まあそうだな。じゃあ……」

そう言つて、俺は眼帯に手を持っていく。

「この眼帯、どうして着けてるか分かる?」

「えっと……分からないです」

「ちょっとだけ、見せてあげる」

極めて、優しく微笑んで、眼帯を外す。

笑顔とか、似合わないことやってるなあ、なんて思うが、今はおいとく。

目を瞑り、眼帯を取り払う。

「っ……」

刹那が息を呑んだのが分かる。

けれど、それはただ、右頬から額にかけて描かれている、白と黒の『烙印』を見ただけ。

瞼を開けば、また刹那が息を呑んだ。

「眼、が……」

「紅いだろう？ 俺の右眼は」

刹那がコクリと頷く。

「左眼も、黒から蒼になってるだろ？」

また再び頷く。

眼帯『廻無の鉄』は、俺の拘束具。

強すぎる力を封じる為に必要なもの。

今の状態じゃ、“強すぎる力”なんて大層なものは無いに等しいけれど。

「俺も、“人間”じゃないからな」

解放状態を更に深くすると、額の左右が熱くなる。

「お、鬼っ……！」

刹那が僅かに後ずさってそう言った。

「そう……鬼の角」

僅かに隆起し、額を僅かに破って見せたのは、小さな突起物……角。血こそ出ていないけれど、額を破ったから意外と痛みがある。

「分かったかな？」

と言うと、コクコクと慌てて首肯する刹那が地味に可愛く思えた。
眼帯を着け直して笑いかける。

「ほら、もう行きな」

俺はそう刹那に言つて、身体を寝かせて布団を被った。

次に目を覚ましたのは、13時過ぎの事。

流石に寝過ぎたのか、若干身体が重く、そして長い黒髪は寝癖がついている。

身体は縮んでも髪の長さは殆ど変わらないよなあ。

そんな事を考えてしまうのは、こうして身体が縮んだ時にはいつも思う事だ。

立っていても後ろ髪が地面についてしまうのだから、一体どれだけ長いんだって言うね。

元の身長に戻っても、身長169cmで後ろ髪が膝辺りまであるんだから、何とも言えない。

どう言う事か、変な加護があるのか、髪は切ろうと思うと全く切れない。

昔、相轉移系統の魔法で無理矢理切ろうとして、結果としては切れずに終わり、背中に傷がついたくらい。

まあだから、いつもは低い位置で束ねている。

本当に邪魔になる時はリボンで巻いて纏めて、それを服の中に入れたり、首に巻きつけたりなど、よくしている。

その髪も母・木乃葉に気に入られ、毎日弄られるのが日課になりつつあるのは、やめて欲しい所ではある。

屋敷を適当にぶらついていると、庭の一角で木乃香と刹那の姿を発見した。

「……あ？」

二人を見て間抜けな声をあげてしまう。

刹那がその背から小さな白い羽を出し、ピコピコと動かしているのを木乃香が見て喜んでいる。

「……き、昨日の今日とかそういうレベルじゃねえよ」

刹那お前、悩んでたんじゃないのか、それ。

そう思っつてつい膝と手を床につけそうになる。

「あ、戒人兄い！ 見て見て、せっちゃんの羽、天使さまみたいや！」

こっちに気付いた木乃香が俺を呼ぶが、軽く手を振って答えるのが精一杯だった。

本当に、悩んでいたんだろうか。

そんな事を考えてしまう。

で。

「おい、こんな奥まで来て大丈夫か？」

木乃香に連れられて、屋敷裏の森に入って少し奥の所にあるという、川を目指していた。

半ば強引ではあったものの、まあ兎に角、俺は保護者に近い感覚で、刹那は護衛として。

と言う建前こそあるが、木乃香は兄と友人を連れて……と言う事になっっているのだろう。

「だいじょーぶや〜」

軽く、柔らかい言葉で先導する木乃香に対し、苦笑せざるを得ない。

「でもまあ、良かったな。刹那」

そう言ってやると

「はい！」

刹那は満面の笑みで答えた。

川辺まで来ると、そこから木乃香は刹那と遊び出し、最初こそ俺も混ざっていたが、今は木陰で腰を下ろしている。

本心を言えば、あの二人にどう混ざって遊べばいいのか分からない。子供の扱いができるが、自分も子供として遊ぶのは、精神的に若干抵抗があった。

……まあ、1600年で摩耗した老人ですからね。

なんて自嘲気味に言っつて、自分で落ち込む。

「……何してんだ、俺」

本当に。

「あんまり深い所に行くなよー」

「分かつとる」

一応注意はするのだが、相変わらずの声で返事がくる。にしても、本当に心配だな。

それから一時間ぐらい経ち、その間何度も注意する事になったのは、木乃香が危なっかしい所為だった。

刹那はあれでしっかりしているが、木乃香の事になるとちょっと甘い部分があったりする。

そんな結論を出しても、まだ一月も共に暮らしていない今では、早すぎる結論だろうか？

どちらにせよ、木乃香は両親が両親だし、刹那も一緒に暮らし、特に神鳴流師範代のあの二人も居るから、変に歪む事はないだろう。

「……変に干渉するのは、やめておきたいんだけどな」

そう呟きながら、空を仰ぐ。

12年の時間。

それが俺に与えられた猶予にも思える。

『身体的時間』の逆行は、同じく時間の進行で元に戻るのは経験則として知っている。

だから、自分の元の姿に戻るまでの12年間。

自分に与えられた時間は、それだけ。

「逆に言えば、12年の間に何も起きないで欲しいけど」

……ま、無理だろう。

東洋最大の魔力を持った令嬢。

東西の協会の諍いや、過激派の動き。

父上曰く、木乃香と刹那は祖父の居る麻帆良学園へ行く事になる。

それはまだ六年も先の事だ。

過激派から遠ざけると言う意味を持ち、麻帆良学園の学園長であり、関東魔法協会の長でもある、祖父を頼つての事。

それまではここ、総本山で生活し、家族と言う時間を過ごす。

「……ん？」

今更気付く。

真の意味で、俺を近衛家に迎え入れた理由は何だ？

ただ、「息子が欲しかった」と言う理由では、どう考えてもおかしい。

俺自身、刹那と同様に護衛として迎え入れられたと言うのが最大の理由だと思っていた。

けれど、麻帆良に……こう言っただけは悪いが、封ずるのなら、関東魔法協会が守護する事になる。

無論、生徒個人を守る事はできないだろうが、それでも十分な防壁になるはず。

じゃあ、なんで俺が必要だったんだ？

分らない。

第一、敵視した俺を迎え入れる事自体が不思議だったんだ。尤もらしい、守護の役目と言う理由が用意されたが、それは刹那が居る。

無論、一人のみと言う制約なんてないし、何人付けてもいいくらいだろう。

しかし得体の知れない俺を側に付けるのは、ただの危険行為。

「…………おおう」

急に寒気がした。変な予感がした。

何か、これ以上考えたら嫌な結果にしか辿り着かない。

万が一その時が来たら、父上を本気で斬り付けよう。

その頃には大分“力”も回復しているだろうし、多分余裕。

……………そうでもないか。

いや、その時にはもっと父上も衰えているはずだ。

……………フツ、余裕だな。

今の俺の顔は、結構な悪人の表情になってると思う。そう感じられる。

随分、柔らかくなったものだな、俺も。

一月も経っていないと言うのに…………。

少だけ自分の変化に気付いて、悪人のニヤリ顔をしている自分がおかしくて少し笑う。
その時だった

「ッ……！」

念の為周囲に張っていた結界が人の気配に反応した。
ここは本山の結界の外で、だから結界を張っていた。
本山の人間なら、反応はしないはず。
それなのに、誰かが結界内に入ってきて来て、結界はそれに反応した。

何故？

そんな思考が頭の中を支配する。

俺はすぐに立ち上がり、気配を忍ばせていた巫女に話しかける。

「誰かが結界内に入ってきた。本山に行つて援軍を呼べ」
「はっ」

そこそこの実力者であろう巫女が音も立てずに森を駆け抜けていく。
隠れていた巫女はどうせ父上が付けた護衛だろう。

随分前から……と言うか、本山の結界を出たときから付いて来ていたのには気付いていた。

全く、父上も護衛を付けるなら俺に言っておいて欲しい。

「木乃香、刹那。そろそろ帰るぞー」
「えー、もうちょっとええやんかー」

不満たらたと言った声をあげる木乃香に、我儚な、と一瞬思うが、やはりそこは、あの母上にしてこの子あり、なんだろうか。

「また今度一緒に来よう。次は目一杯遊んでやるから」

そう言うのと、渋々ながらも笑顔を見せて頷いてくれる。

「……でも、ちょっと遅かったかなあ」

がさがさ、と草木の擦れる音と共に出てきたのは、いかにもな人物達。

服装は着物……いや、和服と言うだけで、どちらかと言えば戦闘用の軽装服。

数は七。

呪術師……それも、呪符使いだろうか。

「どちらさまですか？」

木乃香と刹那を庇う様に男たちの前に出て、最初の一言はこっちが貰う。

「おやおや、戒人様ではないですか。こんな所で遇うとは、奇異な事もある」

そう言ったのは初老の男。
見覚えのある顔だ。

「貴方は……確か愛媛の呪術会の……」

「おおっ、覚えておいででしたか。あの時は一目見ただけでしたが」

仰々しいモーションでまさに偶然を装う。

「こんな所で、と言うのはこちらの台詞です。総本山の裏手で遇うなんて、白々しいですよ」

目付きを鋭くして言い放てば、流石に相手も鋭くなる。

本当に“こんな所”で遇うとはね。

一体何をする心算なのやら。

「それで、木乃香でも誘拐しに来ましたか？」

「なっ……」

どうせそのくらいだ、と思って言っていると、相手は表情を強くする。

驚きの声をあげたのは刹那だ。

「はぁ……」

動きが早かったと言う事に対して、それを読めなかった自分に、そして運悪く、成り行きとは言え“俺”の家族を狙った相手に、

本当に溜め息が出る。

「刹那、木乃香を任せる」

「え……はい！」

「ちょ、戒人兄い？」

「本山に向かって走れ。いいな？」

両手を左腰に添え、左手は鞘を握る様に、右手は柄を掴む様に。

「来い、来電」

その名を呼んで、右手を振り抜き、抜刀状態で自分の愛刀を召喚する。

「さて、アンタ等は義理とは言え俺の妹を攫おうとした。

死ぬ覚悟は、あるんだよな？」

ニヒルな微笑みと共に、雷を振るう。

「雷迎招来」

放電音と共に雷を呼び、切っ先から雷を放つ。

悲鳴を他所に軽く地を蹴り、瞬動で男達の中央に入る。

「ハッ！」

一振りで呪符使いらしい男を肩から斜めに斬り裂き、振り返り様に一閃。

肉の焼けた臭いが鼻につく。

斬った瞬間に放電し、肉を焼いている。

「し、式神……！」

「指光」

こちらに対応しようとした呪符使いの符に向けて、左手の指先から雷を放って符を焦がす。

「つまらんな、貴様等」

意識は既に目前の戦いへ。

ただ冷徹になって、殺す選択を選ぶ。

（雪村流雷迎式……らいかせんしゅうせん雷華穿衝斬）

身を捻りながら来電を振るい、周囲の男達目掛けて雷撃を放つ。
そして視界は全て、光に包まれた。

「こ、これは……」

雷光で目が眩んだまま一分ほど経った頃、誰か声が耳に届いた。
轟音のお陰で耳も若干遠い。

「戒人、君がやったのかい？」

声にそう聞かれ、父上であると判断する。

やはり強化も防壁もなしで使うにはデメリットが大きかったなあ、
なんて思いながら、久方ぶりに感じる、肉の焼けた臭いと血の臭い
の漂う空気を吸う。

戦場の臭いだ。

「俺がやりましたよ。木乃香を狙った、過激派だったようなので」

視界が戻り、聴覚も正常に機能し始め、そう言う。

「なっ……」

父上の顔には驚愕の色が宿る。

「でも……当分はもう大丈夫でしょう。

誰一人帰ってこず、総本山から通達もなければ、どうなったのかは誰も知らない。

なのに刺客は帰ってこなければ、警戒するには充分だ」

そう言い放ち、来電に付着した血を放電しながら振るう事で完全に掃い、鞘に収めて来電を消す。

「とは言え、これから何度も木乃香が狙われる事になる。可能な限り、早めに対処した方がいいですよ」

身体が重いを感じながらも、努めて冷静に言う。

視界には焼けた木々が入ることから、かなりの氣を込めてしまったようだった。

制御がし難い。

この身体でもう一度鍛練し直す必要がある。

「いや、助かったよ。……戒人、大丈夫かい？」

「……ちよつと、大丈夫じゃないかも」

ああ、また氣を失うんだ、俺。

そんな事を考えながら、この世界に来て、二度目に、意識を手放した。

プロローグ・5 『知識と、力と、逃走劇』（前書き）

オリジナル設定に独自解釈わお

今回はいわゆる説明回？ 説明にもなっていないけど

そういえば書き忘れてたけど、『氣』に関してですが、旧字体『氣』で表記しています。

プロローグ・5 『知識と、力と、逃走劇』

この世界に来てから知った事って言うのは、結構少ない。

関西呪術協会や関東魔法協会の争いだったり、麻帆良学園とか世界樹とか……。

言ってしまうえば、裏社会……もしくは、裏の世界と言ったことだけ。それを知れたのは関西呪術協会の総本山に自分が居て、近衛夫妻の養子になった上、俺自身元々魔法やら何やらには詳しい事からであるが……。

まあ、余り深い所までは何も知らない。

父上である詠春は、自身の事を話したし、記憶も多少なりと見てもらった為、色々を知っているが、他から見れば自分など六歳の男児と言っただけだ。

無論、父上の信頼する一部の実力派巫女さん方は俺がそれなりに戦える事を知っているから、多少突飛な事があっても動いてくれる。数日前、木乃香が狙われた時のように。

あの時の事はあれ以来動きがないからさておき……

やはり一番驚いたのは、“魔法世界”と呼ばれる異界が存在している事だろうか。

無論、俺は何もかもを知っている訳じゃない為、未知なものと言うのはそれこそいくらでもある。

ただ魔法世界に関してはかなりの驚きがあった。

『世界』と言うのは、『存在』と言う概念上、最上位に位置する存在だ。

まあ、『世界』とは島や大陸、海……つまり星、そして宇宙など。簡単に言うなら『宇宙』そのものが、ひとつの『世界』だ。

勿論、コミュニティや社会、そう言った関係上の世界とは別としてだ。

更に言うなら、大抵の『世界』は“四つの世界”がセットになっている事が多い。

人間など実体イデアの存在する世界。

悪魔や天使、精霊などが存在する精神アストラルの存在する三つの世界。

どうしてそんな四つの世界の関係があるのかは俺自身良くは知らないし、知らなくても良いようなもの。

勿論、例外だつて存在するし、そう言う例外は大抵、魔界とか天界とか……言い方を変えれば、天国とか地獄とか、そう言う世界と関わりのない世界なんてのは多く在る。

けれど、俺は知らない。

それ以外の世界と関係を持つ世界なんて、俺は知らない。

だからこそ驚いた。

興味が湧いた。

知識欲……とでも言えいいのだろうか。

機会があれば、調べてみたい所だ。

ただ、人間の世界や、他の三つの世界など、四つの世界の関係性については、言うまでも無い。

魂の輪廻転生が大きく関わる為だが……まあ、魔法や魔術など、そう言った類が存在する世界の場合では良く見られる関係性だ。

所謂、聖書や神話と言った伝承や信仰の中であつたり、悪魔召喚や

精霊召喚など魔法や魔術で存在したり、と言った場合。

精霊は基本的に人間などの実体の世界でも有り触れた存在だが、精霊には精霊の世界が存在している。

この世界では詳しい事は分からないが、上位の精霊などを召喚する場合、精霊の世界から召喚するのが基本的と言える。

悪魔の場合では基本的に悪魔の存在する世界から召喚するのが当た

り前だし、悪魔や天使と言った存在は精霊より上の階位の存在だから、人間などの実体の世界では“存在としての階位は高すぎてしまう”。

つまりは悪魔や天使そのものを『本体』のまま人間の世界に居ると歪みが生まれて物理法則を捻じ曲げてしまったり、天変地異などが発生する。

生きた災害だ。

だからこそ悪魔や天使の召喚は『分身』を召喚する術式が流布していたりするのだが……まあもうこれ以上はどうでもいいだろう。

詰まる所、何が言いたいかって言うと、“魔法世界”と言う俺の知識上知らない世界と密接な関係を持っていると言う事が不思議でないだけである。

とりあえずは、それ以前に色々問題点を改善しなければならない。だからそっちに従事する。

やらなければいけない事は、“力”の制御。

今のこの幼い身体では、大した力が使えない事に加え、氣や魔力を始めとした、“力”全般に関して色々障害が出てくる。

言うなれば、子供には子供の、大人には大人の、“やり方”がある。父上との手合わせの時、違和感を感じた為で、再び鍛練して感覚をつかまなければならぬ。

そして現在、俺は一人で本山の裏の森……あの西洋魔術師達を殺した場所で、氣と魔力の循環を行っていた。

今の状態で使えるのは、氣を使った戦い方や魔法や魔術と言った類。魔法・魔術と言ってもこの世界じゃ区別がないらしいが……まあ、どっちにせよそれを使っても大した魔法・魔術の行使は出来ない。他の力で言えば、俺が初めて知った力である『異能』が使える。とは言っても、六つの異能のどれもが“実戦向けではない”。

『創造』や『破壊』の異能は、異能の中でも最上位の力だが、それ故にいくつもの制限がつく。

神が“本当に、悪戯に”与えた力とは言え、大雑把かと思えば、意外としつかりしていたりするからだ。

『創造』『破壊』は対人には向かない。

ひとつの物質を創りだしたり、壊したりするだけでも、それを知らなくてはいけない。

火や水と言った属性ではないが、元素……つまりは化学を知る必要がある。

複雑な物体を創る、または破壊する場合であっても、その構造を知らなければならぬ。

慣れてしまえばそれを無意識的に創造したり破壊したりする事も出来るが……まあかなりの制限がある、とだけ言っておこう。

生物に対して使っても、単純の様に見えて複雑な人間などには、実用的では無いのだ。

『蒼血』『紅血』の異能は、どちらかと言えば実戦向けの異能ではある。

天使や悪魔そのものの力を呼び起こす異能であるが、その反動はかなり大きく、そして何より“暴走”を引き起こす要因になる。

元々相容れぬ二つの反存在が、同時に体内を巡る“血”として存在しているのだから、危険等と言っ言葉では収まりきらない。

天使や悪魔そのものの力、と言っても、天使・悪魔は基本的に純粋な魔力を糧としているから、扱うのは容易だ。

魔法や魔術とは異なり、その魔力を具現化・形象化して相手にぶつけると言っだけの戦い方になるが、魔力の制御が出来れば問題ないけれど、それは使えば使うほど、二つは混じり合ってしまう。

俺の魔力と混じり合うと言う形で、本来ならば混じり合わない二つの血……魔力が混ざってしまうと言う結果を生む。

完全に一つになった時、分離する形で、魔力の暴走を引き起こし、自我を失い、俺の中で一番大きい破壊衝動を表に出す。

つまりは、この異能を使えば使うほど、自分の周囲に危険を齎してしまう。

これがあるからこそ、俺は、ひとつの世界に留まる事はないのだが……。

白と黒の『烙印』の異能については、ただの束縛でしかない。

『蒼血』『紅血』の異能を制御する為の、人工異能で、ただ力の封印、解除を補助するだけの力しかない。

だからこそ、とでも言えればいいのだろう。

今だからこそ、氣と魔力だけが頼り。

俺自身がいくら傷付こうが構わないが、俺を敢えて養子としてくれた近衛夫妻には……まあ流されたただだが、借りはある。

なら、俺は父上の思う通りに動こう。

父上の事だから、“俺”を武器にする事はないだろうが、出来る限りの事はしてやろうと思う。

「ふう……」

息を吐いて、意識を集中する。

そう言えば、父上に少し聞いた事があるが……氣と魔力の合一だったか。

『咸卦法』とか言う技術があるらしいが……

「ま、俺には無理だな」

言うまでも無い事ではあるが。

「魔力臨界と術式同化だけでもどうにかなるだろうし」

魔力臨界は肉体の内側で魔力の暴走を自的に引き起こすもの。そこらの氣や魔力の付与強化と比べれば、天と地の差がある戦闘技術。

今は使えない悲しみが残るが……兎に角、異能の過度な使用による暴走と違う所は、理性を保っていられる事。

かなり重宝する強化技術だ。

使い過ぎると結局は理性も保っていらなくなるが……。

術式同化は謂わば魔力のブースターと言っている。

簡単に言えば体内で魔法や魔術を使って、発動時に放出される魔力と取りこむ自然の魔力を、肉体に宿す技術。

下手に言えば暴発して木端微塵、なんて事は有り得くないというのが、意外と恐ろしい所。

事実、過去に一度だけ修行中に暴発して上半身と下半身がお別れを告げた事もある。

……あれは、痛かったなあ。

「……気にかかるのは、その性質だよな」

やはり、咸卦法の性質が気になる。

ただそう言う技法があると言う事を聞いただけで、想像もつかないいや、想像できない事は無いが、実物を見ない事には分からないだけだ。

氣と魔力と言う、実体・精神の二極に分かれる氣と魔力を同化させる事ができたのなら、それは氣や魔力の根本である生命力に戻る事ではないだろうか？

生命力そのものをぶつける事が可能なら、その出力はかなり高いと想像はできる。

無論、それはただの想像だけではあるが。

ちなみに、氣は体力を、魔力は精神力を消耗する為、二極に分かれるが、氣も魔力も、その中で更に実体・精神の二つの側面を持ち、基本的には氣を使った術は精神性質アストラルの部分イデアを、魔法や魔術などでは魔力の実体性質イデアの部分イデアを使って使われている。

氣に関しては強化などで実体性質イデアの部分を使うが、魔力は精神性質アストラルを全く使用しない。

つまりは使わない魔力、として存在してしまうが、この精神性質の魔力は、天使や悪魔、精霊などの精神生命と言う存在そのものを構成するものであり、天使や悪魔、上位の精霊などが人間が住む実体の世界に本体のまま来る事が出来ないのは、この精神性質の魔力が薄い為で……

……まあ、どうでもいい事だ。

「何はともあれ、咸卦法が生命力そのものを再構成して扱う技法なら、恐ろしい以外の何ものでもないな」

そう言いながらも、自分の体内の氣と魔力を上手く循環させる。

無意識的にも循環はできている。

伊達に1600年も生きていない。

狂わないのは、人間じゃないから、なのかね。

なんて一瞬考えてしまう。

正氣を保てる保てないとか言う以前に、俺は元々狂っているのだから。

「ああもう、今更自分が何者かなんて、どうでもいい事だろうに」

1600年経って尚、考えてしまうこと。
いや、1600年も経っているからこそ、考えてしまうこと。

自分は、何の為に存在しているのだろうか？

それに答えは出ていない。

早くて一年、長くても十数年しか、ひとつの世界には留まらない。
だからと言って、“何も無いあの世界”に留まるのも嫌で。

結局は、いつまでも独りなのに、孤独が嫌いどころかの世界へふらふらと放浪する。

漂流者とか、偏在者とか、本当にそんな言葉が似合うと、自分自身
そう思ってしまう。

「俺は俺なのにな」

そう呟いてから、意識を切り替える。

「この世界にない魔法を使うのは目立ち過ぎる」

この世界の魔法はありきたりな体系をしている。

精霊使役の西洋魔術は、扱い易い。

変に学ぶ必要はない。

いつも通りにやればいい。

資料が少ないからどうしようもないが、始動キーとやらは必要なの
か。

むしろ、魔力活性の為に始動キーがあるならば、はたしてそれは本
当に必要なのか？

そんなもの、唱えて見れば分かること。

世界には、その世界に合った魔法体系が存在するが、基本的に慣れ

てしまえばどんなものも扱える。

無論、根本的な違いがあれば、ほぼ確実に無理ではあるが。

「……って俺、この世界の魔法何も知らないじゃん」

とりあえず何か使ってみよう、と考えたものの、何も知らないというのをすぐに思い出す。

「ま、いいか」

全然良くないが、当分は来電と剣術でどうにかするしかない。しかし、何とかなるだろう。

雪村流剣術は、故郷の世界で、義母から教わった剣術だが、色々アレンジが利く。

元々、氷の異能を持った雪村家が、異能としての力の弱さから、試行錯誤の末に生み出した剣術だ。

雪村流の基礎である、抜刀状態から予備動作無く高速で振るう『無鞘閃』も、氷の異能と氣を使って放つもの。

『帯電刀・来電』に宿る雷の異能『雷迎』を用いて、それを行なっているだけであり、初速自体は本来のものよりも早くなっている。

まあ、雪村流は抜刀流と納刀流と言う二つの流派が一応存在するが、大して違いはない。

強いて挙げるなら、抜刀流は抜刀状態で戦うのを基本とし、納刀流は納刀状態で戦うのを基本としている。

無論、基本的な戦い方が違うだけで、技や奥義に関しては大きな違いはない。

更に言えば、『雷迎式』は来電の雷の異能を用いたバリエーションでしかない。

本来氷の異能を使って繰り出す技や奥義を、雷の異能を用いているだけに過ぎず、来電の対の刀である『風生刀・風切』の場合なら、風の異能『風花』に合わせればいい。

ただ、俺自身が持つ異能じゃ攻撃性が低い為、異能力である来電や風切に頼らなければならぬが、召喚・退喚が自由な二振りなら特に問題は無い。

兎も角、総本山が家である、と言うのは素晴らしいくらいの隠れ蓑だ。

それ故に色々やれること、やれないことがある。

情報収集に関しては、父上に聞けばある程度は聞けるし、情報面はまあ良い方だろう。

「……今日はこの辺にするか」

この場所にまだ血の臭いが残るのを感じながら、帰路についた。

一週間ほどかけて色々試した所、日に日に使える氣や魔力は増えていつている。

増えると言うよりは、戻る、と言った方がいいのかもしれない。これなら幾分か早く、戦闘に関しても支障が出ない程度には戻ってくるだろう。

「……ん。良好良好」

掌を握っては開きと、何度も繰り返しながら言う。

もう血の臭いが殆どしなくなつたこの川辺は、色々と変化を齎した。刹那は神鳴流剣術を習う為に何度も師範代の所へ行ったりしているし、父上は父上で過激派の対処を色々行なっている。

木乃香は裏の事に関して色々気付き始めている。

父上の意向の為、そう言う事は色々隠してはいるものの、ばれるのは時間の問題だろう。

家が家だ。それも仕方無い事だろう。

「随分、この場所にも慣れたものだ……」

そう呟き、何故自分はこんな所に居るのだろう、と思う。

衣食住、そして近衛家の人間と言う保障を得ている借りは、日に日に大きくなっていく。

いつかは返せるのだろうか？

そんな思いもある。

「この“世界”は、何の為に俺を呼び込んだんだろうな」

俺が世界へ行くのは、何かしらの“意味”がある。

こう言うのも馬鹿らしいが、世界を救う事や、壊す事、またはそれに準じる何かを排除する事。

ひとりの者の為に動いたり、世界樹の意思に従って世の中を変えていく事もある。

この世界にあると言う世界樹がどんなものかはまだ知らないが、可能性としては否定できない。

なんと言うか、全くどうして、俺はこんな存在になっちゃったの

だろう。

自分の意思がないようなものだ。

勿論、最終的な結末は俺が決める。

何が正しくて、何が悪いのか。

善悪など差して問題ではなく、結果的にどうなるか。

「とりあえず、魔法世界とやらには行って見たいとは思っただけだなあ」

予想としては、位相を同化させて固定している、その名の通り魔法の世界。

「できれば、こっちの魔法組織に関する情報をいくらか見て回っておきたい所だけだ」

やる事が多い。

「戒人く〜ん」

「げっ……」

「む〜。日々逃げる速さが増しとるなあ」

近衛家の日常は、色々気疲れすることもおおい。

「戒人様、大人しく捕まってください！」

「本殿近くはダメかつ」

一日に二、三回ほど起きる、母上が筆頭で行なわれる俺の捕獲作戦とかは特にそう。

「二班は西から、三班は東から追い詰めましょう。我々一班は正面から！」

「「「「はい！」「」「」」」

日に日にエスカレートする捕獲作戦は、巫女達を巻き込んで行なわれている。

「戒人兄い、ちょっとこっちきて」

「わ、悪い……すごく嫌な予感がするから、また後でな」

「……お母様の作戦も上手く行かへんようになったな」

「……（やっぱ母上の差し金かつ）」

木乃香まで使って、どうしても捕まえないらしく、時には父上も差し金になっていたりする。

「はぁ、はあっ」

「み、見つけました！ 一斑へ通達、東大路から北へ戒人様が逃走中！」

「くそっ……」

酷い時には、神鳴流の剣士さんまで使って、捕獲を企む時もある。

「斬岩剣！」

「殺す気か!？」

「竹箒です」

「それでも死ぬわっ」

氣で強化した長物なら、普通に死ねるレベルで、神鳴流剣士の中でも良い腕を持ったのが数人送り込まれてくる日もある。

「は!」

「ちょっ!？」

「防がれた!？」

曲がり角で行き成り格闘戦になって応戦するとか、どんな危険な屋敷だ?、と訊いてやりたい。

まあ、お陰様で逃走速度は上がったような気がしないでもない。

この身体で氣と魔力の制御に関しては、慣れる慣れない以前に、上手く扱わなければ母上に捕まり、恐ろしいほどに愛でられる(?)ので、氣がつけば上達している。

「こ、今回は逃げ切れたか……」

「発見!」

「っ!？　今回はどんだけ動員してんだ、母上は……」

最近は百人単位で捕まえに来るもんだから、一日中逃げ回る日もあったりなかったり。

「な、なんでこんな所まで……」

「もう逃げられませんかよ、戒人様」

「俺を捕まえたいのか、殺したいのか分からんわ!」

「……別に、一撃与えたいと思っている訳では」

「殺す気ですね分かります!？」

何回も参加した女性の神鳴流剣士には、いつしか一撃でも良いから与えたい相手にされていたり。

と言うか、そんな事したら母上と父上が黙っていませんよ、と言ってやりたい。

癪だが、神鳴流の技に関しては何度も見る羽目になり、どうすれば潰せるのか、どうやれば避けられるのかなどを身をもって知る事になった。

氣の流れを注視していれば、何とかなる！

まあ、そんな旨い話などあるはずもなく、元々氣の流れなんて濃度が濃くなきゃ通常じゃ見れないし、似ているものだってあるのを知った。

数度見た程度じゃ分かるはずもなく。

「……なんで俺の部屋に居るんですか、母上？」

「久しぶりに戒人君と一緒に寝よう思ってた」

「出てけ！」

本当に一日中、気疲れする毎日である。

「すう……」

最近良く来るようになった川辺で、ゆっくりと息を吸う。

意識を集中させて、氣を放出して自分を覆うように張り巡らせる。

「……………」

その氣の外に、もう一枚膜を張るように魔力を張り巡らせる。

障壁とは違う、簡易的な障壁を張る為の修行……と言った所だろうか。

衝撃を和らげる程度でしかない障壁だが、出力を上げて高密度に張れば、機関銃の銃弾くらいなら防げる。

無論、狙撃銃なんかじゃ簡単に貫通してしまうが、打撃戦闘などではかなり有効的な障壁だ。

それもまた、無論で、衝撃力の強い打撃なんかじゃ、簡単に破られてしまうけれど。

「はあっ……………」

肺に留めた空気を一気に吐いて、張り巡らせた氣と魔力を拡散させる。

それを繰り返すこと五度、氣と魔力の残量が充分に減った所で、軽く身体を動かす。

「……やっぱり、実際に戦ってみないと、どれだけやれるのかは分からないな」

六歳の子供が言うのもどうかと思う台詞だが、一応1600年生きているんだから、誰かに聞かれない限りはおかしいものではない。

……と、思う。

「集え火精9柱、我は射手になりてそを放つ、《火精の9矢》」

大き目の岩に対し、自分の知る火の精霊を使役した《魔法の矢》を放つ。

込める魔力は少なく、小さな火の矢が岩に命中する。

「ん。特に問題なし」

この世界でも自分の知る魔法が正常に作用する事を確認してから、再び言葉を紡ぐ。

「来たれ炎精、光の精。常世の全ての闇を照らす神託の火焰。光の炎、其は絶望を纏いし必然の焰……」

ズキッと走った、頭の痛みに顔を顰める。

「……《白き焰》」

岩に向けた手から光が放たれ、岩を爆散させた。

「……………」

魔法は中級の中でも火力の高い、上位の魔法を選んだ。

威力は極小規模。

それを詠唱し、行使するだけで頭痛がした。

何故？、とは思う。

けれど、多分それは、この世界の制約に近いものがあるんだと理解できた。

「始動キー……………だっけ？」

魔力活性の為に唱える、個人の魔力活性用の発音。

それがあれば、多少は変わるんだろうか？

……まあ、慣れれば問題は無さそうだが。

思考を他所に、氣を身体中に循環させる。

僅かに肉體強化を施し、軽く右脚で震脚を踏みながら、右手で下からの掌底を突き出す。

そこから左膝蹴りと左の拳を振り上げ、そしてその脚で震脚と同時に左肘を出す。

型としては中国拳法とかそんな感じ。

勿論、それを重視した戦闘はしない。

弱点はどんな戦い方にもあるからで、基本的には自由に戦っているところが多い。

「接近戦なんて大して重要じゃないんだけどなあ」

やっておいて損は無い。

それが俺の教訓。

更に氣の強化を強めて、身体を動かし、また更に氣の出力をあげる。徐々に徐々に慣らしていき、大体の継続時間を計る。

魔力は魔力付与の魔法で強化し、やはり同様に出力をあげながら身体を動かす。

そうすること二時間ほど。

「こんな所、かな」

若干息が上がっているものの、接近戦闘に関しては、あと半年もすれば充分な動きが出来るまで回復するだろう。

「……せめて、あと八年」

なんて呟くが、14歳の身体の身長は確か160を越えた辺りで、体格には差して問題は無くなり、魔力なども充分に使えるほどになる。

けれど、あと八年。

あと八年である。

「……永いなあ」

1600年生きたやつが言う台詞ではないのだが、ひとつの世界に留まれるのは早くて数年から遅くても十数年。

世界のひとつひとつで見れば、やはり一分一秒が大切な時間でそれも結局、これからまだ何千年と生きるかもしれない自分にとって、あつという間の時間なのかもしれないけれど

「ま、色々楽しみはあるしな」

そう呟きながら、帰路につく。

プロローグ・5 『知識と、力と、逃走劇』（後書き）

次回で序章と言う準備期間が終わり、次々回より本編へと入ってきます。

ちよつとした時系列の変化や、戒人がいる事で原作とは違う道を進みますが、一応は原作に近い形で動かせていくつもりです。

プロローグ・6 『戦いと、呆れと、躍動と』

近衛家……関西呪術協会の総本山での生活は、特にこれと言った問題は無い。

六ヶ月ほど過ぎたが、問題と言う問題は起きていない。

無論、それは“表向き”は、であるが。

一日の予定と言うのは、ここ二ヶ月ほどは大した変化はなく、午前中は鍛練をして、昼を過ぎれば木乃香や母上に振り回され、夕方になるとまた鍛練をし、夜になればまた木乃香や母上に振り回されて過ごす。

近衛家の養子に迎えられてからは、毎日そんな状態が続いている。

ここ二ヶ月ほど、と言ったのは、関西呪術協会の立場を“得た”からで、父上の命令に従って仕事をこなす。

ただ、その立場を得たのは、あくまで俺の意思だった。

父上は『君が此処に居る間は、戦って欲しくはない』と言うが、それは流石にできない相談だった。

『戦うことが、自分の存在価値』

それが、俺がこの1600年の間に出した答えだったから。

そしてそれは、“結末”を得る為には必要なこと。

どうせ全ての力が戻るまで、俺はこの世界から出る事は叶わない。

俺が“世界”を移動する事ができるのは、条件が必要だ。

ひとつは、生命力の濃い場所で、己の力を最大限に利用して、世界

と世界の間に存在する『次元の狭間』へ到達する為、『断界門』の術式を発動させること。

もうひとつは、例え力が及ばずとも、『世界の結末』を迎える事でひとつの物語を終えることで、世界の修正力を使い、『断界門』を召喚する。

この二つのどちらかの条件を経て、結果的に同じ『断界門』を召喚する事でその世界での“生”を終える。

物語の終わりは、極論を言うなら、世界の救済が破滅と言った所だろうか。

無論、それだけが“終わり”ではない。

他の例で言えば……例えば、特定の人物の願いを叶える事や、誰かを殺す事など。

戦争の終結であつたり、国と国の平和条約を結ばせる事であつたり、様々な“終わり”で、物語は結末を迎える事になる。

けれど、どれも決まっていることではない。

勿論、俺自身、何をすればいいのかは分からない。

全ては、世界の望むがままに。

まあ、裏の世界である魔法関係の、それも日本の関西呪術協会と言う大きな組織に所属する事で、“結末”が少しでも特定できれば、と思ったまでのこと。

勿論、戦いを望んでいるのは確実にあるし、現在使える力を実戦経験を積んで安定させたいという思惑もあった。

だから、俺は現在、^{いま}こうして夜の闇を走り抜けている。

「……七、八、九……全部で十四人が……」

森の中を駆け、気配の数を数える。

右手に持つ愛刀の来電に氣を流し、宿された雷の異能『雷迎』を発動させて、雷を纏わせる。

雷光で位置がばれるが、最初っからばれているものを隠そうとは思ってはいない。

「ッ！」

後方、右に僅か五度逸れた場所に向けて、来電を振るう。

刀の軌跡に沿うように雷が放たれて、追手の一人に当たり、僅かな悲鳴の後、それ以降追ってくる気配は一つ減った。

「……式神か」

人間とは異なる気配が周囲に増えた事を察知して、走る速度を上げる。

いくつかの人間の気配が遠くなったのは、多分ついてこれなくなっただからだろう。

しつこく追ってくる式神に瞬動で近付き、毎回のことの様に電気を帯びた刀で一閃。

離れるようにまた走り続け、着実に数を減らす。

だが、違う人の気配が十数、増えたのを感じた。

その気配とは別に、式神や召喚された妖魔の気配も混じる。

「よくこんな戦力があるな……」

そんな事を呟きながら、視線を動かさず、ただ目的地へと向かう。
相手は四国最大の過激派組織。

数が居ても、仕方の無いことで、それなりの術者も居る事だろう。

「……あと、6 kmと言った所か」

そこまで行けば、この戦いは終わる。

ただ敵を釣り、あとは他力本願と言う簡単な作戦で、相手の戦力を削ぎ取る目的だ。

追手は実力のある術者ばかり。

その全てを殺す事ができれば、当分は沈静化する。

「……安易に魔法は使えないしな……」

足の止めることなく、独り言を呟く。

近付いて来ていた使役された妖魔を切り伏せ、ただ走る。

例えこの世界の魔法が使えたとしても、東洋魔術ばかりの西日本では目立つ上、関西呪術協会の一員と言う事もあって、使う機会はま
ずない。

俺個人の問題の上に、組織としての問題もあって使えないでいる。

「はあっ！」

突如上から降ってきた巨大な蜘蛛の式神を両断する。

そして視線を目の前に戻すと、そこは火の海。

符術だろう。

それに目もくれず、火の中へと突っ込む。

高密度で氣と魔力を放出し、簡単な障壁を張るが、熱は遮断しきれ
ない為、熱いと言えば熱い。

けれど燃えることなく、突破する。

「もうそろそろか」

すぐ近くに民家があるというのに、ここまで派手に動いてくるのは、それだけ“消しておきたい”と思っているからだろう。そりゃそうだろう。

相手の本山まで行って、挑発してそこからの逃走戦だ。相手からすれば呪術協会の長の息子。

充分な手札になる。

捕縛すれば交渉・脅迫。

殺害でも、充分なダメージが与えられる。

しかし、捕まるつもりはないし、死ぬなんてありえない話だ。

森を抜けて、目的地へ達する。

そこには、黒装束がそれぞれ呪符を構えたり、呪文を口にしている。

「やれ！」

そう声を大きくあげると、黒装束たちの術が放たれ、ほぼ一瞬で森を焼いた。

殆どはそれで死滅しただろう。

だが、突破してきた敵を切り伏せ、殲滅戦に入る。

取り逃がした敵は追撃し、誰一人帰すことなく殺しきる。

そして、過激派の鎮静化は叶った。

この世界に来てから、また“過去の夢”をよく見るようになった。
前に居た……いや、囚われていた『牢獄の世界』でも、同じ様なものだった。

最初の数年間はよく過去の夢を見ていた。

何回かその“牢獄”を繰り返す事で、見ることもなくなったけれど、この世界に来て、力の大半を失い、また夢を見る。

故郷の世界の夢に、初めて行った異世界の夢。

父に敗北し、二百年の時間を封印されていた時の夢や、愛した少女を失い、憤怒と憎悪の果てに、初めて世界を滅ぼした時の夢。

他にも多くの夢を見た。

寝起きは、いつも気分がいいものではなかった。

けれど、時には不思議と良い気分が目覚める時もある。

それは……そう、今日の様に。

「……なんで木乃香が此処に……」

左手にある温もりを感じながら、スヤスヤと眠る木乃香に視線を向けながら、溜め息混じりにそう呟く。

木乃香が居たり、母上が居たりすると、不思議と過去の夢を見て、苛まれる事はなかった。

多分、家族というものに飢えているから、なのだろうか。
大切なものが近くに居ると、それだけで安心できる。

だからと言って、添い寝されるのもどうかと思うんだ。

「おい木乃香。勝手に他人の布団に入り込むな」

そう言いながら、軽く指を弾き、木乃香の額に直撃させる。

「っ~~~~!!.....ひ、ひどいやん」

すぐさま木乃香は起きて、額を押さえながら、目尻に涙を溜めてそう言った。

「ひどくない。ほら、さっさと自分の部屋に帰りなさい」

布団から押し出しながらそう言って、自分も布団から出て、服を着替える。

「.....いや、出てけよ」

「別にええやんか」

「いや、良くないだろ」

未だに動く気配のない木乃香に対してそう言って、出て行ったところで着替えを始めた。

朝食を終えると、日課となっている鍛練をしに、いつもの川辺に行く。

着くとすぐに人除けの結界と遮音結界を張って、いつもの様に氣と魔力の循環から始める。

この世界にはない魔法を威力を抑えて何度も使い、その感触を確かめる。

いつもと変わらない日常。

それがいつまで続くのかは分からない。

けれど、いつまでもこうしている訳にもいかない。

「……過激派は鎮静化してるし、旅にでも出てみようか」

そんな事を呟きながら、今日もまた、午前中は鍛練につき込んだ。気や魔力の制御も充分になってきたし、そろそろ動き始めた方がいいだろうか。

ブローグ・6 『戦いと、呆れと、躍動と』 (後書き)

ちよつとあれだけど、とりあえず序章は終わり？
兎も角次回からは一気に時間がとびます

第一話 『時は流れ往き、麻帆良学園へ』

この世界に来てからの八年。

色んな事があつたなあ、と今更ながら思う。

基本的には……まあ、思い出したく無い事ばかりだけど。

近衛家で暮らし始めて最初の一年は、隠れながら鍛練を続けるだけの一年になった。

日常には大きな変化はないと言っていていいだろう。

俺は拾われ、養子となり、そこで過ごした。

勿論、呪符使いの件こそあつたものの、大きな変化はなかった。

楽しみとしてあつたのは、父上や時々総本山に任務で訪れる顔見知りになった神鳴流剣士との手合わせ。

神鳴流剣士の女性二人と、男性一人は、最初こそ六歳だのなんだのと侮っていたようだが、鍛練　　と言うか、母上が行なう俺の捕獲作戦　　で興味を持たれ、正式な手合わせの方が少なかった気がしないでもない。

二年目になると、刹那は一時的に木乃香の護衛から離れ、神鳴流剣術を学ぶ為に、青山姉妹と共に暮らし始めた。

小学生になった木乃香の護衛の役割は俺が担い、俺も通う事になったのは言うまでもない。

その間も最初の一年との違いは、刹那が居ない、学校へ通う、と言う二点だけだった。

力の回復に関しては、魔法・魔術の行使がかなり改善された事が一番大きい。

三年目には、刹那が総本山に帰って来た為、俺は転校と言う形で小学生と言う身分から離脱した。

正直、ああいう場所はどつ過ごせばいいのか分からないから、苦手だった。

人として成長した中・高ならまだしも、小学校、と言うのはやはり疲れるもので、成績なども適当に外しながら、中の上辺りを保つのも、意外と苦労したからで、どうしても嫌だったため、父上と母上に直談判してどうにか小学生と言う身分から離れる事が出来た。

お陰で、母上に俺の記憶を見せる事も止む無しだったのは、今でも少し、後悔している。

何故なら、より一層スキンシップが濃くなったからだ。

可哀想だとか、そう言う同情は要らないが、母上の場合にはちよつと違つていて、二年目には落ち着いていた捕獲計画も、以前より増して激しくなり、神鳴流の剣士方が主力部隊になったのは、本当に嘆かわしいと覚えている。

四年経つと、俺は近衛家から出て、世界各国を見て回つた。

特に、紛争や抗争などが起こる国々を渡つた。

その間に、いくつか問題も見えてきて、態々介入する事もあつて、命のやり取りに身を投じるのが当たり前になっていた。

戦う事に対し、生きるという実感を得ていた自分にとって、ある意味充実した生活と言えるのが、あまりにも狂つていると自分自身そう思つてしまう。

力の回復は、一年目の時とはかなり変わつて、異能や取り込んだ種族の能力なども上手く利用できるレベルまで回復し、かなり自由になったと言つていいだろう。

五年目の夏には、一度だけだが実家……総本山へ帰つた。

母上に一日中付き纏われたのは、一年以上も家から離れていた為、仕方の無い事だと思う事にしたのは、記憶に新しい所である。

木乃香は木乃香で、母上と同じ様に付き纏ってきたし、多分、この世界に来て一番疲れた日だった様に思う。

刹那とは一度手合わせしたが、九歳と言う若さ（幼さ？）であればどの腕とは、正直に驚いた。

滞在期間は一週間で、またすぐに家を出た。

六年目と七年目は、結局各国を巡る旅だった。

五年目の夏に一度帰るまでは父上の権力を借りての旅が続いたが、それ以降は自分一人でも自由に見て回れるくらいにはなった。

所謂顔パスのようなものだろうか。

色んな団体さんとはお世話になったりお世話したりと、まあ結局は魔法組織間の抗争などに巻き込まれてちよつと有名になってしまった程度。

色々と憎まれていたりするんだろうが、負の連鎖って言うのは終わる事のないものである以上、誰かが背負わなければならないものと、そんな考えを持っている。

物事の善悪など、人の見方で変わるのだから仕方が無い。

西洋魔術師などがよく口にする『立派な魔法使い』^{マギステル・マギ}の定義には、ほとんど呆れたものだ。

魔法に関しては、この世界の魔法を知る事で、俺が元々知っていた魔法を使わなくとも充分なくらいは習得してきた。

例えば《魔法の射手》。

これは良い。

方向性を変えたり、使い方を少し考えるだけでも色々使いようがある。

精霊の数を変えれば、元々使っていた《魔法の矢》同様に初歩的な攻撃魔法であっても、大魔法と比べても遜色ない威力が得られるのは言わずもがなで、集束と連弾の使い方を考えるだけでも充分に使える。

集束し放ったり、それを打撃に乗せたり、連弾で弾幕を張る。

けれど、それだけではつまらないというもの。

連弾の方向性を僅かに制御する事で、波状攻撃もできるようで、一ヶ月かけて使い慣らしたのは良い思い出である。

初歩的な魔法に時間をかけてその有効性を高めたのは、初めてのことだった。

まあ、八年と言う時間が意外と長く感じたのは、多分『戦い』と言うものが少なかったからなのだろう。

いつもは戦う事ばかりで、平和な日常なんてものはなかったと言ってもいい。

無論、『戦い』そのものが何もなかったわけではない。

総本山で生活していた頃には、裏で動いていた過激派の捕縛や処分をする事もあったし、俺個人を狙った襲撃も何回もあった。

妖魔の類の処理をしなければいけない時もあったし、今からじゃ三年ほど前の事になるが、この世界に来てから五年目、総本山に帰ったときには、過激派の呪符使いの集団が召喚しまくった数百体の妖魔を処理するのには骨が折れた。

世界各国を見て回っていたときも、やはり裏で動いている魔法組織とぶつかる事もあれば、逆に手を貸す事もあった。

戦っていた時のことを思い出すと、その部分だけどこか時間の流れが早く感じる。

そして現在……朝、六時半。

電車で揺られて、駅に着き、そして降りる。

「ふう……」

長旅で疲れたままの軽く動かして、一息。

改札を通って駅を出れば、異国に見間違える街がそこにある。

「麻帆良学園都市、ね……」

新幹線で東京まで行き、電車を乗り継ぐこと数度。

俺は、麻帆良学園に来ていた。

まさか東の本拠地に行く事になるとは。

まあ、いつかはここに来る事になるのは分かっていた。
だが……

「……チッ」

つい舌打ちしてしまう。

そう……事の発端は、今から二週間ほど前の事……

10月8日。

父上からの連絡があり、二年半ぶりに実家へ帰る事になった。

実家に着いた当初こそは祝いムードがあり、二年半前に帰って来た
時と同じ様な雰囲気があった。

けれど、そこに木乃香と刹那の姿は無い。

二人は麻帆良学園女子中等部へ通っている為だった。

「はあ、はあっ……くそ……母上、本当に加減がなくなってきたな」

身長も随分伸びた　　と言うより、戻った？　　俺は、髪を束ねなくても地面に着くことなく、下ろした状態でも普通に生活できるようになった。いた。

その身長は160と少し。

身体的な時間も、あと三、四年もすれば完全に戻るくらいで、力の制御に関しては大部分が戻ったと言ってもいい頃だった。

「で、父上。今回俺を呼び戻した理由は何ですか？」

呪術師や呪符使い、神鳴流剣士などの追手から逃げ続け、やっと落ち着いた所で父上の話をやっと聞ける状態になった。

「うん。実は、お義父さんから麻帆良に来ないかって言う提案があったね。戒人、麻帆良学園に通ってみないか？」

「断る」

「えっ……いや、即答だねえ。ほら、少し考えてみたらどうか？　麻帆良学園だと色々経験積めるし」

「断る」

早い話が、麻帆良学園に行ってみないか、と言う話で。

「東からの親書？　その返答にこっちからも出して、それで俺が行く事になったと」

「そういうこと。それに併せて、お義父さんが戒人の編入先を用意してくれてね」

「……使者として。そして息子、孫として。更に言うなら、木乃香の護衛強化？」

「ははは。話が早いね」

簡単に言えば、東から親書が届いたから、その返答として俺が使者となつて麻帆良に向かい、そのまま麻帆良に住み着いてはどうか、と言つた話であつた。

そして結局の所、これまで色々世話をかけた借りがあつた為、断る事もできずにこうして麻帆良の地へ訪れたのである。

学園都市、と言えば故郷の白鳳学園都市を思い出すが、まあ規模を比べれば麻帆良の方が小さい。

けれど、学園都市と言う雰囲気は、結構好きだったりする。

故郷の世界は、もっと大規模な学園都市があつたし、六年ほどそこで暮らした。

だからだろう。

懐かしく感じてしまうのは。

でも、この麻帆良学園に通う通わない、住む住まないは話が別である。

「……でも断れなかつたんだから、仕方ないよなあ……」

項垂れそうになりながらも、あの妖怪の許へと向かう。

妖怪……近衛近右衛門。

あれは本当に妖怪だと思う。

と言うか、あの妖怪の娘が母上なら、きっと母上は祖母似なんだろう。

そうだと信じたい。

「それにしても、視線が痛い」

周囲には、登校中らしき女子生徒の姿。

確かこの辺りは女子校エリアだったと記憶している。

勿論、地図上でそう知っているだけで、麻帆良の深部は女子校エリアになっていて、男がいるのが珍しいのだろう。

だが、あのジジイの居る学園長室が女子校エリアにあるのだから仕方無いことである。

「……あんのエロジジイが」

過去に何度か会った事があり、その都度麻帆良には訪れていたから、ある程度は知っているし、学園長室が何処にあるのかも知っている。十数分ほど歩くと、ジジイの居る女子中等部の校舎が見えてくる。

此処に来るのは、以前請けた依頼からして、実に三年ぶりぐらいだろうか。

今思えば、此処に来るのも案外久しぶりに思えてきた。

この世界ではまだ八年しか過ごしておらず、その中で三年だと言うのだから、久しぶり、と言う言葉は間違っていないと思う。

「親書なのに、本部じゃなくてもいいのか？」

そんな事を呟くが、まあどうせあのジジイの事だ、と割り切る事にする。

そんな時だった。

「おや、戒人君じゃないか。久しぶり。無事到着したようだね」

久しぶりに聞く声の主を探して、周囲を見渡す。

「上だよ、上」

そう言われて、建物を見上げると、二階の窓から見下ろすおっさん……もとい、眼鏡の……って言ったら父上と同じか。まあ、知っている顔がひとつ。

とは言っても、三年ほど前に一度、二年前にも一度、合計二度だけ会った事のある人物。

「ああ、高畑さん。お久しぶりです」

「ちょっと待っててくれるかい？ 今、そっちに行くよ」

そう言って、顔を引つ込めた。

少し待っていると、すぐにやってきて、軽く手を上げた。

「本当に久しぶりだね」

「ええ。かれこれ三年ぶりですかね」

「ははは。敬語は止してくれ。いつも通りの言葉と呼び方で構わないよ」

その言葉で俺はすぐに社交辞令の笑みから、すぐに嫌そうな顔に変える事にする。

「ははは……いきなりそんな表情されてもなあ」

「いや、だって仕方ないよ。父上が態々呼び戻してまで親書を届けるなんて言っし」

「それは災難だねえ」

答えた時の僅かな表情の変化を見つける。

「タカミチ……まさか、ジジイは何か企んでないだろうな？」

「どうだろう？　僕は知らないけれど」

……この返し方、絶対何か企んでる。

「まあいいや。案内してくれー」

「ははっ。分かったよ。ついて来て」

「りょーかい」

タカミチの後を付いて歩く中、タカミチと会った頃の事を少しだけ思い出す。

三年前に会ったのは、たまたま麻帆良の近くに来た為、顔を出した時に会い、学園長室でちよつとばかり会話した程度。

二度目に会った時には、たまたまパキスタンに居た時、“出張中”と言う事で紛争地域に裏側……魔法関係で赴いていたタカミチに偶然遇った。

あの時は一ヶ月ほど一緒に行動していた事もあり、歳の離れた友人とでも言えればいいだろうか？

まあ、一回り以上離れているけど。

しかし、魔法世界への出張が多いと聞いていたけど、案外世界中飛び回ってるんだなあ、と今更思う。

「学園長、戒人君が到着しました」

「おおっ、そうか。入ってよいぞー」

ドア越しにタカミチが言うと、ドアの向こうからは妖怪もといジジ

イ……ではなく、祖父の声が。

ドアを開けてタカミチが先に入り、遅れて俺も続く。

「久しぶりじゃの〜」

「黙れ妖怪」

「ふおっ!？」

視界に入った“それ”に対しての挨拶は、綺麗に決まった気がした。

「ほら、親書」

カード投げの要領で軽く投げ、祖父が受け取った所でこっちから話を切り出す。

「この使者の件、どうして俺を使っただ？」

ちなみに、祖父に対しての口調には容赦など一切無い。

この祖父さんは、ぶっちゃけ、嫌いである。

勿論、本当に嫌いなら一切の関係を断ち切るし、どうしても無理だと思ったら、多分殺ってる。

そう言うところを考えると、そこまで嫌ってはいないのだと、自分で分かってしまうから哀しい所である。

悪いやつではない。

けれど、良いやつでもない。

まあ、そんなところだろうか。

「なんじゃ、婿殿から聞いておらんのか？」

「……なにをだ？」

やはり、何か企みがあったのか。

「えっ？ 本当に聞いていないのかい？」

「……だから、なにを」

タカミチはタカミチで驚いている。

「ふおっふおっふおっ。なるほどのう。戒人君が素直に来てくれるとは思っておらなんだからの。」

婿殿は婿殿で、色々考えた結果なんじやろう」

「麻帆良学園の中等部に編入する件か？」

「なんじゃ、聞いておったのか」

「その話か。一応父上からは聞いている」

「そうかそうか。じゃあ問題ないの。高畑君、案内してやってくれ」
「はい」

タカミチに手招きされ、学園長室を出る。

その時、変な違和感を感じた。

「……ちよつと待て。案内？」

「そうじゃが？」

「今からじゃ男子中等部に行くのは時間がかかるだろう？」

そう。

ここから男子中等部には行くのには、三十分ぐらいかかるはず。

中央部である女子校エリアから出て、内郭部にある男子校エリアに行くにはちよつとばかり時間がかかる。

「ふおっふおっふおっ！ そうか、編入の話だけを聞いておったんじゃない」

「……何が可笑しい？」

「媚殿もえげつない事をするのお」

「……はつきり言え、妖怪ジジイ」

「いやなに、戒人君はこの女子中等部に通ってもらつ事になつてからの。」

案内するのは、高畑君の担当するクラスの教室じゃから、すぐそこなんじゃよ」

その言葉を聞いて、多分数秒は固まっていた気がする。

「はあっ！！！？」

自分でも驚くぐらい、でかい声が出た気がした。

第一話 『時は流れ往き、麻帆良学園へ』（後書き）

時期としては二年の秋ですので、ネギ君の登場はまだもうちょっと先です

（ 、 、 ）

第二話 『女子中等部の男子生徒』

「おい妖怪ジジイ、今なんつつた？」

信じられない事を聞いて、つい再び聞いてしまう。

「じゃから、高畑君のクラスに……」

「おいまでジジイ。タカミチは広域指導員だろうが」

そう。

二年前に遇った時は麻帆良で広域指導員をして働いていると聞いている。

それがなんで教師なんてやっている？

「つーか、それ以前に、なんで、俺が、女子中等部に通わにゃならんのだ」

「もう決まった事じゃ。一度引き受けた依頼は破棄させんぞ？」

「いやおかしいだろうがっ！」

「例外ではあるがのう」

「ははは。確かに女子中等部に戒人君が編入なんて、例外どころではありませんけどね」

……こ、このジジイ……。

「ふざけてんのか？ いやいや、ふざけてるんだろ？ じゃねえとその頭輪切りにすんぞ？」

「なに、ふざけてはおらぬ。戒人君には木乃香の護衛をしてもわらねばならぬからのう」

……成る程。だが、それで「はいそうですか」って理解する事は出来ない。

「なら別に此処に通う必要性はないだろうが」

俺が言っているのは、超正論である。

別に同じ所へ通わずとも、麻帆良学園内なら学園結界があるはずだし、第一、通う必要性などどこにもない。

男子中等部でも長距離瞬動ですぐにここまで来れるし、転移魔法符でも何でも使えば本当にすぐの距離だ。

それに、基本的に安全な学園内なら、魔法関係者ならタカミチが居るだろうし、他にも腕の立つヤツは居るはず。

それがダメでも、近くで待機していればいい話だ。

「戒人君はまだ14歳じゃろ？　なら、まだ義務教育の範囲内じゃ」

しかし、ジジイも正論を言ってくる。

肉体的な年齢じゃ、14歳を過ぎたばかり。

戸籍上でも、つい一ヶ月ほど前に誕生日が来たばかりだ。

「だがな、絶対におかしいだろ？　女子校に男子が通うとか馬鹿なのか？」

「馬鹿じゃよ？」

……開き直りやがった……。

「何、二月には教育実習生が着任する予定になっているからの。戒人君にはそのサポートも頼みたいんじゃないよ」

……どう言つ事だ？

「教育実習生だと？」

「それはその時が来たらじゃが、今は兎に角、木乃香の護衛としてついてやってくれんか？」

話を切り替えてすぐに戻すとか、何考えてんだこいつは……。

「まあ、それも兼ねて、と言つやつじゃ。儂ら魔法関係者にも戦力は必要じゃしな」

少しずつ話が逸れていつているような気がする。

「……じゃあ聞くが、俺が女子中等部なんかに通うとして、そこに関東魔法協会の何の利益がある？」

結局は、そこが重要。

「うむ。尤もな質問じゃな。

ひとつは、木乃香の護衛。これは言うまでもないことじゃろつて。ひとつは、二月に着任する教育実習生のサポート。こう言つのもあれじゃが、人員不足なんじゃ。

今の内に学生生活に慣れてもらつて、高畑君が外れた後、その教育実習生のサポートを頼みたい。勿論、魔法使いとしての修行の一環としてじゃ。

ひとつは、先程も言ったのじゃが、人員不足ゆえ、学園の警備などにも当たってもらいたい。

あくまで依頼じゃから、報酬はキッチリ出るぞい。

そして最後に、戒人君が編入する3-Aの生徒全員を監視してもらいたい」

「……………は？」

色々不明な点がありすぎて、理解に苦しんだ。

「木乃香の護衛に関しては、特に何も言わない。

人員不足も報酬がある依頼として請け負う事も出来る。まあ別に金が必要訳じゃない分、多少多目に貰えれば構わない」

「多目には貰うんじゃない……」

「祖父と孫とは言え、これは依頼だからな。

着任する教師に関しては、魔法使いの修行なら、何故俺に頼む必要がある？ 俺は連合やらが掲げるような『立派な魔法使い』マギステル・マギじゃない」

「善悪、正邪を分かって欲しいんじゃないよ。麻帆良の魔法先生も魔法生徒も、偏った思考を持った者ばかりじゃからの」

「……………いや、アンタがそれを言っちゃいかんだろ」

あくまで関東魔法協会を束ねる理事長として、その発言はどうかと思う。

ジジイのような力のある者が変えようとしなければ、変わらない価値観なのだろうが。

「ま、連合の教育の賜物、と言った所か」

「今じゃ仮とは言え西に所属する戒人君が言ったら戦争ものじゃぞ……………」

「分かってて言ってるんだけど？」

「じゃから性質が悪いんじゃない」

「……………まあそれはさておき。……………3 - Aの監視するのは、どうして

だ？」

やはり、一番気になったのは“そこ”。

「うむ。訳有りの生徒が在席しておるクラスじゃからな、危険に巻き込まれぬ様にして欲しいんじや」

「訳有り？ 魔法関係者が身内……もしくはその者自体が。更に言うなら、素質か」

「話が早くて助かるのう。ま、そういうことじゃ」

「それに関しては、別口で報酬出せ」

「ふおっ！？」

「……なに、ただの冗談だ」

「……本気に聞こえましたよ」

「何だタカミチ、まだ居たのか」

「ずっと居ましたよ」

「そうか」

それはさておき。

「まあまたいつか、“西の長”と“学園長”にはキツイ一撃でもお見舞いするとして」

「ふおっ！？」

祖父さん、その驚き方はちょっとイライラするんでやめてください。

「……ただ、どうするつもりだ？ 男を女子校の生徒にするなんざ、本当に馬鹿げてる」

「それについては、問題ないぞ」

「あり過ぎだろうが」

「学園長の力、と言っやつじゃ」

「職権乱用か」

「権力とは使う為にあるんじゃない」

「ひでえ大人だな」

ええ、本当に。

「兎に角、俺は東の下につけばいいって事か？」

「そうしてくれるならありがたいんじゃないが、あくまで西の使者じゃ。変に束縛などはせぬから、大丈夫じゃよ」

「ん。それなら助かる」

「放課後にもう一度学園長室に来てくれるかの？ 住居などに関して、話しておかねばいかんからの」

「りよーかい」

「うむ。『魔導師』^{グル}の協力を得られるとは、心強いのが」

「……その二つ名、やめてくれ」

そして

3 - Aの教室に向かう途中、タカミチに「本当にこれでいいのか？」と何度聞いた事が。

「学園長の決めた事だしね」

と言う答えが返ってくるもんだから、こちらとしては溜め息をつくしかない。

最早既に今更なことなのだが、本当にどうかしている。

女子校に男子が通う。

共学になったばかりの女子校に、男子が少ないとか、そういうのじゃない。

統合とかもなく、ただ、現役な女子校に男子が通う。

今度会った時は、魔法でもぶっ放そう。

そんな考えは、まあ草案として頭の隅に置いておくでしょう。

あの妖怪は、本当に何を考えてるのか分からないからな。
分かりたくないだけかもしれないけれど。

「制服……は無いもんな」

「制服なら、男子中等部の制服を用意できるけど、明日からじゃないとね」

俺の呟いた言葉にタカミチがそう返してくる。

「まあ、別に良いけどさ。どうせ黒一色だろ？」

「ははは。戒人君はいつも黒い服着てるからねえ」

現在の俺の服装。

黒のジーンズに、黒のシャツ、そしてその上に黒のロングコート。
まさに黒一色である。

「黒は落ち着くからな」

と言つのが理由のひとつ。

黒色は好きな色とも言えはいいだろう。

白い色以外のどんな色を混ぜても、最終的には黒くなる。

黒は闇。闇は良い。

同じく深い夜を好む。

ただ、落ち着くだけと言う理由ではあるが、黒と言う色は自分の好む色。

「その所為で、昔は不審者に間違われていたね」

「その話はしないでくれ……」

二年前、その時俺は不審者扱いされて追い回されていた時、タカミチに遇った。

まあ、紛争地域で、それも魔法組織が動いている中で、黒単色の人物が居たら、どう見ても不審者でしかないのは理解している。

「けど、アクセサリー類は外した方が良いと思うよ」

タカミチの指摘で、指に嵌めている指輪に視線が落ちる。

右手には人差し指、薬指に、左手には親指、中指、小指に、両手併せて合計五個の指輪がある。

……確かに、これは外した方が良い。

ネックレスやブレスレットは隠れるから良いとして、ピアスとかも外した方が良いだろう。

「以前貰った腕輪と似たようなものかい？」

タカミチはそう言って軽く左袖を捲くり、左腕に嵌めている、銀細工の腕輪を見せる。

これまた二年前に遇った時、礼として贈った腕輪だった。

「ああ、まだ使ってるのか、それ」

「そりゃあね。こんな増幅器^{ブースター}を貰ったら、使わない事はないよ。

それはそうと、やっぱり付けているアクセサリーは全部増幅器な

のかい？」

タカミチに贈った腕輪は、魔力を取り込んで蓄積する『魔導石』と言う性質を持たせた、翡翠^{ジェイド}を散りばめた装飾の腕輪。時間と共にかなりの力の回復が出来たお陰で、“召喚”出来るものが増えた為、重要度の低かった腕輪をくれてやったのだ。

「その魔力増幅器とは少し違う。こっちのはもっと純粋なものだ」

「そうなのかい？」

「まあ、ブースターにも発動体にもならないのは、増幅器や発動体とは決定的に違うけど」

「それはそれとして、特にその耳は、どうにかした方が良くかもね」

そう指摘されて、確かに、と頷いてしまう。

五つの指輪、二つの腕輪、一つのネックレス。

そして、七つのピアス。

計十四個の装飾具。

左耳に七つも付けているから、かなり目立つというか、どこの変態だって言う話。

自分でもそう思う。

まあ、ピアスホールを開けてつけてはおらず、魔力結合でただ繋ぎとめていると言う事だけが救いだろうか？

ピアスホールなんて開けても治癒能力ですぐに塞がるもんだから……

「これは……もう長い付き合いになるからな」

そう言つて、つい懐かしい気持ちになる。

初めて行った異世界で、契約を結んだ神々から与えられた装飾具だ。初めて“神”と言う存在に出会い、契約した証。

まだ人間だった頃……当時はまだ、本当に18歳の頃の事だから、

かれこれ1600年前の事だと言っても良い。
異能力の来電や風切より、付き合いの長い品物だ。

「今となつちや、純粹すぎて、ただの装飾品でしかないけどな」

大半の力が戻った今では、あまり必要性もないかもしれない。

「外さなきゃダメか？」

「え？ ん、そうだね。出来れば外して欲しいかな？」
「そうか」

そう言われると分かっていたから、ひとつひとつ外していく。
十四個の装飾具を全て外し、一つ一つ重ねていく。
十四個の装飾具で、ひとつの円盤の様な形になる。

アルカティア
「単一化」

この世界には無い言葉を発し、一つの指輪にその形を変える。

「ははは……最初からそうしてくれれば良いんだけど」

そのタカミチの言葉は、尤もな事である。

「“ひとつ”ならいいだろ？」

「ああ、構わないさ」

びっしりと宝石が詰め込まれた十四色の輝きを放つ指輪を左手の中指に嵌める。

この状態だと、特にこれと言った力のない、ただの指輪だ。

少々こついが。

そんな事を思いながら、タカミチの後をついていく。

3-Aの木札がかかっている教室の前に着くと、タカミチはこつちを見て言う。

「じゃあ、呼んだら入ってきて」
「はいよ」

そう答えるとタカミチが教室に入っていく、俺は待機。

女子生徒の朝の挨拶が外まで聞こえてくるが、女子校なのだから、男子の声などあるわけも無く。

これから先どんな厄介ごとに巻き込まれるのか、なんて考えると、やはり溜め息が出てしまう。

女子校に編入した男子生徒。

話題としては充分すぎるほど大きいものだ。

「……ああ、昔感じた嫌な予感って、これだったのかな……」

なんて、ちょっと呟いてみたり。

……うん、本気でそう思えてきた。

「実は今日、転校生が居るんだ」

教室の中からタカミチのそう言う声が聞こえると同時に、大音量の声があがる。

『この私がそんな特ダネを逃すとは』とか『楽しみです』とか『どんな娘かな』という声が次々に聞こえてくる。

「うん、俺はこのまま帰った方が身の安全が保障される気がする」

一人頷き、そんな事を言う。

「入って来て」

大きくはないものの、喧騒に近い声の中、はっきりとタカミチの声が教室の中から聞こえてくる。

「ああ……」

声を漏らしながら、天を仰ぐ。

いざ、死地へ。

そんな覚悟と共に、ドアに手をかけて、ガラリと開ける。
そして静まる教室。

「髪長いけど、女子じゃ……ないよね？」

誰かがそう言った。

好奇の視線、とでも言えばいいのだろう。

女子校エリアに入った時とは、また違う視線だ。

ああ、本当に選択は間違っていた。

そう思った矢先、

「『男お』……！！！！！！？」

再び大音量の驚愕の声が響き渡った。

「なんで」、「どうして」と言う声が飛び交う中、見知った顔が二つ。

「兄様!？」「戒人様!？」

木乃香と刹那だった。

まあ、一応護衛なんだし、同じクラスとは思っていたので、こちらとしては驚くことはなく。

「……兄様!!!？」「……」

驚くのはクラスの生徒たちだった。

「はい、静まりなさい。戒人君、自己紹介」

タカミチがそう言うと、シン……、と静まりかえる生徒たち。どれだけタカミチが教師としても優秀なのが窺える一面だった。

「近衛戒人。ある事情で今日からここに通う事になった。よろしく」

無難な、と言うより、正直面倒な所を丸投げしたような自己紹介をして、軽く頭を下げる。

「近衛?　じゃ、じゃあ、本当に木乃香のお兄さんなの?」

そう言ったのは、明るいオレンジの色の髪の子生徒。

ツインテールに、鈴の付いたリボン、見るからに活発そうな、そして考え無しに行動しそうな雰囲気がある。

「俺は養子だけどな」

と、事実を答える。

「はいはいはい！ この報道部の朝倉がバンバン聞いちゃうよお！」

次に声をあげたのは、赤茶の髪の生徒。

チラリ、とタカミチの方に視線を向けると、微苦笑しながら頷いた。どうやら、質問の時間を設ける、答えてあげなさい、と言った意味が含まれている様子だった。

「えっと、日本人だよね？」

「まあ……」

普通に日本人である。

まあ生徒達を見ると、外国人またはハーフらしい生徒も多いからの質問だろうか。

「出身は？」

「……不明」

この世界じゃ一応これが事実。本来の出身地は、この世界には無い。故郷の世界とは、“条華諸島”と言う地があったが、この世界に無いのは確認済み。

「今着てるのは私服だよね？ 制服は？」

「今朝方着いたばかりで、現在は私服。明日からは多分男子校の制服になると思う」

多分、明日には男子校の制服でも渡されてそれを着てくると思う。

「髪がやたら長いけど、伸ばしてるの？」

「昔からこんな感じだ」

無難な答えで返す。

ハサミなんかでは簡単には切れないし、例え切ったとしても、二日もすれば元の長さに戻る所為で、切るのは1000年以上前に諦めた。

「その眼帯について聞かせてもらっていいかな？」

「生まれつき右眼は色が違う上、傷跡もあるから、こうして眼帯をしている」

これに関しては全部嘘である。目の色は黒だし、傷跡なんぞない。眼帯を外すと目の色は変わるが、左眼も同様に色が変わるし、右頬から額にかけて捺された烙印は傷と言うほどではない。

「じゃあ、さつきアスナに答えてたけど、義理の兄妹であってるんだよね？ それはどうして？」

「六歳の頃に木乃香の父上に拾われた。それ以来、養子として面倒を見てもらっていた」

そこで僅かに空気が重くなるのを感じる。

空気と言うより、雰囲気、と言った方が正しいのだろうか。

「え、えつと……」

「別に構わない。まだ質問はあるか？」

別にこれといって問題がある質問じゃないし、答えにくいことでも

ない。

が、流石にそれ以上はまずいと思ったのか、朝倉と名乗った女子生徒は言葉に詰まる。

「じゃあ最後の質問だけど、いいかな？」

「ああ」

それでも自身が言った報道部、と言う人柄か。

……報道魂？、とでも言えばいいのか、質問していいか、と言ってくる。

逆に、俺からして見れば、まだあるのか？、と言いたい所だ。

「彼女はいますか！」

教室内が静まり返った。

そして俺は一瞬、クラツときた。

そう来たか……。

と、一瞬天の仰ぎそうになった自分を止める。

質問としての意味は、恋愛感情を抱いた相手が居るかどうか、もしくは、相思相愛になった者が居るかどうか、と言う事だろうか。

愛した者なら、何人が居た。

愛された事も、ない訳ではない。

けれど、それが叶わぬものだ知っているから、1000年以上も前に、人を愛する事をやめたんだっけ。

初めて行った異世界で、神と契約した指輪に僅か視線を落とす。

居た事には、変わらないよな。

「彼女かどうかはさておき、自分を捨ててでも守りたい人は居たよ」

やはり、そんな答えしか出なかった。

黄色い声はシャットアウト、無視する事にして。

「って事は、今はフリー……って事でいいんだよね？」

「ああ、それでいい」

無神経な台詞だが、まあ、もう誰かを愛する事なんてないから、別に構う事は無い。

「じゃあ最後の質問です！」

さっきのが最後のじゃないのか？

「このクラスの中で誰が一番好みですか！」

っ……危ない。

一瞬吹き出しそうになった。

「容姿の好みはない」

多分、これで大丈夫。

「敢えて言うなら！」

こ、こいつ……無駄に食いついてくるな、そこん所。

敢えて言うなら、と言う限定付きの時点で、とりあえず答えを出せよと言う事だろう。

「よく知りもしない相手を答えるのもな……」

しばし考える。

このクラスで知っている人物なんて、木乃香か刹那の二人しかない。

しかし、木乃香と答えたら、変に騒がれる。

だが、ここで刹那と答えたら、後が怖い。……特に木乃香が。
……。

ははっ……まさか、こんな形で窮地に入るとは。

兎に角無難な答えを……

「えっと……じゃあ、木乃香と刹那で……？」

「ややわあゝ、兄様ってば」

「……／／／」

「「「「「おおおおおおおおおお！……！」「」「」「」

……何か、途轍もない地雷を踏んだ気がした。

第二話 『女子中等部の男子生徒』（後書き）

設定とか人物紹介の頁か何かを設けたいですね。
今度序章と一章の間くらいに随時更新用の話でもひとつ加えようかな、と思っています。

第三話 『魔導師の顔合わせ』

はめられた感覚で即日編入する事になったその日。

後部の席に割り当てられ、HRで時間を取った為、タカミチによる英語の授業がすぐに始まった。

それが終わると、二限目までの休み時間になり、わらわらとクラスメイト達が寄って来る。

そして二限目が始まり、終わるとまたわらわら。

三限目も終わってわらわら。

四限目もわらわらわらわら……。

………

………

………

「……つ、疲れた……」

昼休みは昼休みで、下手に動く男子が居る事で騒がれるのも嫌で、教室に居続けたが、やはりそれでもクラスメイトという障害があるわけで。

放課後になって、やっと解放された。

「おつかれ様やなあ、兄様」

馴染みのある口調で言ったのは左隣を歩く木乃香。

「しかし、戒人様が何故女子中等部に編入を？」

そう言ったのは右隣を歩く刹那。

「西から東への使者として、な。結局、嵌められた形になったけど」

人前や立場などがある場合では、木乃香は兄様、刹那は様付けで呼ぶ。

昔は木乃香は戒人兄い、刹那はやはり様付けで呼んでいたが、近衛の家を四年ほど前に出る頃には、どちらからも、戒人、と呼び捨てにすることが多くなっていた。

だが、人前である事に加え、二年半ぶりに会うことから、そう呼んでいるのだろっ、と理解する。

「木乃香にお兄さんが居るなんて知らなかったわよ？」

そう言うのは、教室で一番最初に質問、と言うか、疑問を投げかけてきたクラスメイト・神楽坂明日菜。

木乃香の隣を歩いている。

「言っとらんかったからなあ。兄様はこれからどうするん？」

「そうだな。とりあえず……卒業まではこのまま通い続ける……んじゃないかな。不本意ではあるが」

木乃香の質問に答え、最後に僅かに不満を漏らす。

通いたくて通うわけじゃない、と言う意思表示的な意味で。

「住むところとか決まっとるん？」

「それを聞くために、学園長の所に向かってるんだよ」

「これから先、戒人様があのクラスに加わるというのが信じられませんか」

「ああ、俺は信じたくない」

刹那の言葉に対しては、はっきりとした本音を言う。

「木乃香のお兄さんって、養子って言うてたけど……」

「八年前ぐらいに、ケガをしていたらしい俺を木乃香と刹那の二人が見つ付けてくれてな。」

それから数日お世話になって、気がいたら流されて、養子になったた」

「な、流されてって……。それより前は、どこに住んでたの？ 家族とかは？」

そこで言葉に詰まる。

更に過去の事を聞いてくるか、お前は。

「あ、ごめん。軽はずみに聞いちゃいけなかったよね？」

自身で気付いて自身から謝るのは、人としてできている証拠だが、できたら聞かないほうでお願いしたい。

特にあれより過去の事は、木乃香も刹那も知らないのだから。

「そういえば、ウチもせっちゃんも、兄様の昔の事一度も聞いたことないなあ？」

「え？ ええ、確かにそうですね」

まあ、食いついてきますよね。

木乃香も刹那も、八年前の川辺の事件以来、裏の事情によく顔を突っ込むようになった。

木乃香は修行こそしてないものの、裏の世界は親が親のため、良く知っている。

父上は木乃香を関わらせたくなかったようだし、俺もそれに従って可能な限り手を施した。

結果、裏の事を知りつつも、力を身につけると言う事はなかった。

刹那は言うまでもない。

どこまで腕が上がったかは分からないが、かなり上達していると言うのが、一見ただけでも分かる。

神鳴流剣士として、十分な力についてはいるだろう。

「まあ、言いたくない事もある、と言う事で」

とりあえず、過去の事は適当に流すのが吉。

そう判断して会話を遮断する。

「えー！ 聞きたい！ セっちゃんもそう思うやろ？」

「わ、私は特に、それほどでも……」

チラリ、とこちらに視線を向ける刹那からは、会ったばかりの頃にも俺自身が感じた同族意識を、刹那から感じた。

人間との違いを持つ者同士、ある程度の理解はあるのだろう。

刹那は俺が人間ではない事を知っていて、刹那自身、人間と烏族のハーフと言うのを気にしていた事がある。

それを思っていること、なのだろう。

「ほら、学園長室に着いたから」

「兄様のケチい」

妹の言葉を無視して、学園長室のドアをノックする。

「ジジイ、来たぞ」

「開いておるぞ」

「ほいほい」

返ってきた声に答え、ドアを開けて中へ入る。

いつ見ても、何度見ても、素晴らしい頭部である。

本当に妖怪にしか見えない。

「住居の件、あと仕事の件について少しな。別に後ろの三人が居ても問題ないだろ？」

「ふむ。そうじゃな。まずは住居の件じゃが……」

スツと出された書類を受け取り、視線をその書類に落とす。

だが、俺は頬を引き攣らせて固まった。

「……女子校に、通わされるのは……まあ良いでしょう……」

全然良くないが、この際仕方のないことだと割り切ってる。

契約は契約、仕事は仕事。

麻帆良に居る木乃香の護衛強化と言う、父上たつての願いで、借りもある。

だから、我慢はできる。

だが、流石にそれ以上は無理だった。

「な・ん・で、俺が女子寮に住まわにゃならんのだ！」

つい右拳に魔力を込めてしまいが、何とか理性を保ってそれを引っ込める。

木乃香と神楽坂が居なかったら、多分確実に一発お見舞いしてた。そう言い切る自信がある。

「何分、急な事じゃったからな。部屋が取れんかったんじゃよ」
「……いや、時間はあつたはずだぞ？ 女子校に通わされる事は知らなかったが、編入するのは早くても二週間ほど前には決まっていた事だからなあ……」

左手で右手首を押さえてはいるが、流石にピクピクと振るえる。力の入れすぎだ。

「し、仕方ないんじゃよ。じゃが、最上階の個室、それも風呂とかトイレ付きの大部屋じゃから、特に問題はないはずじゃ」
「……っ……チッ！ わーったよ！」

全然理解出来ないし、問題がないはずがないが、兎も角それだけ護衛として近くに居ろって事だ。

仕事……仕事として、理解、して……おく……。

クソッ……。

「で、仕事の顔合わせは……？」
「後々高畑君経由で携帯電話のほうにメールしておく」
「……了解。必要事項はもうないな？」
「うむ」
「そうかい」

右拳から力を抜きながら、降り立つ所のない怒りを無理矢理治め、学園長室を出る。

それに続くように木乃香、刹那、神楽坂の三人も学園長室を出た。

木乃香達に案内されて女子中等部学生寮へ足を運び、最上階まで上がる。

その途中、何人かの生徒とすれ違い、全員が全員振り向くのは仕方の無い事だと割り切った。

「っ……あの二人はほんと、いつかキツイー撃をお見舞いしないとな……」

ギリッ、と噛み締めて再度、父上と学園長に仕返しをと誓う。

「まーまー。落ち着いてや、兄様」

「そうですよ。長も学園長も、お嬢様の為に……」

木乃香はいつものほにゃとした笑顔でそう言い、対して刹那は俺が麻帆良で、しかも女子中等部に通う理由が木乃香の護衛だと思っているらしい。

「ウチの為……って事は、護衛なん？」

「まあそうなるんだけどさあ」

それ以外にも依頼内容があるというのが、悩ましいところなのだ。

別に木乃香の護衛程度なら、恩も借りもあるから無償でやるし、寧ろ八年間と言う時間、その半分も一緒に過ごしていなかったが、家族と言う縁がある。

だが、3 - Aの生徒の監視や、二月頃に着任する魔法関係者らしい教育実習生のサポートは俺には関係のない話。

勿論依頼を受けた分は働くし、依頼内容を達成するが……

「ちょ、ちょっと待ってっ。木乃香の護衛って何のこと？」

もう一人居た同行者・神楽坂明日菜が割って入ってくる。

「色々あるのさ」「色々あるんや」

木乃香と息のあった台詞に、刹那が溜め息をついていたのはさておき。

「まあ色々あるんだよ、本当に」

「答えになってないわよ……」

そんなやり取りを交わしながら、着いたのは最上階フロアの一角。寮監に渡された鍵を挿し込み捻ると、ガチャリ、と鍵の開く音。ドアノブを回し、ドアを引いてみれば……

「開くのは当然の事だ」

「いきなりどうしたん？」

「いや、なんでもない」

部屋に上がって、内装を見て回る。

個室……というか、二十畳近くありそうな部屋はどうかと思う。壁をぶち抜いて二つの部屋を一部屋にした感じだろうか？

バストイレ別々に完備なのは、女子寮ゆえにありがたいのだが……

「広すぎね……」

そう言ったのは神楽坂だった。

その言葉には素直に頷いておく。

一人で住むには充分すぎる広さがある。

とは言え、最上階のフロアは部屋はたったひとつしかない。

どうやら六階までしかない寮を急ごしらえて七階を作って、まるで一部屋設けただけのようないし……？

エレベーターだって六階までしかないし、七階へ行くには階段を上る必要があった。

「九月から何か工事してたのは知ってたけど、七階なんて作ってたんだ」

そう呟いた神楽坂の言葉で、予想が外れていない事を知る。

寧ろ、それより前から、まるで俺が此処に住む事を前提に考えていたかのような……

……うん、やっぱりあの妖怪ジジイにはいつか魔法でもぶっ放してやろう。

つまりは、騙された。

元々此処に来る事を前提に、此処に住まわせる事を前提に、物事が運ばれていたんだ。

あの狸……。

「兄様一人部屋で広い部屋なんてな。ウチもここに住んでええ？」
「アホか貴様は」

妹のボケ（？）にすかさず突っ込みを入れておく。

最低限の家具があるのは、多分常備されているものだろう。

二段ベッドが二つ……まさに四人部屋を想定しての広さなのだろうか。

「私物も何一つ持ってきてないからなあ……」

それゆえに、二段ベットが二つと、机が二つ、そして足の低い大きな目の四角いテーブルがひとつ。

他、特になし。

「と言うか兄様、着替えとかも持ってきてないん？」

「そうだな。本当ならジジイのところに顔出してすぐ帰るつもりだったからな」

使者の仕事だけならそうしたかったのだが、編入する事を承知の上で手ぶらで来た。

荷物はある程度配送してあるし、ジジイが勝手に手続きしているから、今日中には届くはず。

「必要なものはジジイに頼めば用意してくれるだろうし、特に問題はないかな」

勿論、ジジイに拒否権はなく、強制である。

「あ、そうや兄様」

「ん？」

「お祝いつてほどでもないけど、夕食一緒に食べへん？」

木乃香の急なお誘いに、僅かに逡巡する。

「それは嬉しいんだが……木乃香たちのフロアは他の生徒の目もあるからなあ」

「そんな大丈夫や」

「んー……てか、一人部屋じゃないんだろ？ 木乃香のルームメイトとかには承諾はとらなくていいのか？」

「木乃香のルームメイトなら私だけど」

「別にええよな、明日菜？」

「うん、別にいいけど」

「じゃ、兄様もええよな？」

「えー、あー、うん。別にいいけど……」

「決まりやな」

そう言つて可愛らしい笑顔を浮かべた木乃香に腕を引かれ、そそくさと部屋から連れ出される。

「相変わらずな妹で……」

「ええ。本当に相変わらずです」

「ちよつとは兄の事情も知ってほしいものだが」

「……だ、大丈夫ですよ、きっと」

木乃香に引きずられて移動中、刹那とそんなやり取りを交わした。

木乃香と明日菜の部屋で刹那と自分併せて計四人で夕食を戴いたその日の夜。

刹那と共に世界樹前広場を目指し、だらだらと夜道を歩いていた。ちなみにだが、明日菜と呼ぶのは食事中に、近衛と呼ぶのは言い難いし抵抗があると言う理由から、戒人と呼ぶ代わりに明日菜と呼んでくれ、と言う事になった。

「ですので、学園結界は外側に対し強くても、内側には弱いんです」「ふん……ジジイが人材不足って言うのも、仕方のないことか……」

「はい。学園結界内に入り込む事は稀とはいえ、内側で召喚されたり、発生すると……」

世界樹前広場までの道中は、刹那に関東魔法協会の防衛上の仕組みを簡単に教えられながらだった。

「まあ、結界は両極端だからなあ」

内側に効果のあるもの、または外側に効果のあるものに分かれる。例えば、魔法使いが一般的によく使う『人避け』と『遮音』の結界、人除けの結界は、外部の人間を無意識的に結界内へ入らないよう、外へと効果を働かせるものであるのに対し、

遮音結界の場合では、結界内の音を外部へ漏らさないよう、内側に働きかけるものである。

つまりは、内部・外部のどちらかに干渉する二種類の結界があるわけだ。

だが、その結界は、効果の及ばない方から、内部なら外部からの、外部なら内部からの魔法的干渉に弱い。結界を無効化しやすいのだ。

勿論それは比較的、と言うだけで、実際に結界の解除・無効化・破壊と言った解呪は^{デイスベル}難度の高い技術が必要だ。

「……しかし、聞くだけじゃ学園結界があるからこそ、成り立っている組織のようにも思えるな」

「実際にそうでしょう。魔法先生と魔法生徒が合計でも40余名では、この麻帆良全域をカバーする事はできませんから」

そう、聞いただけでは本当に少ない。

魔法世界の連合の下にある組織とは思えないくらいに、だ。

「関係者が百名ほど居るので、学園結界に関しては余程の事がないと破られないそうなのですが、人員不足は否めません」
「そりゃそうだろうな」

まあ、決定的に魔法使いの数が足りてない、と言う事。

年端も行かない、能力も平均的……そんな学生の魔法使いが半分ほどを占めるのだから、悪魔が出てくることこそ少なくとも、下級悪魔相手ではまず無理だろう。

無論、能力の高い魔法生徒も居るだろうが、結局はその程度。

それに麻帆良に来た時、若干違和感を感じたのは、多分刹那の言う学園結界の所為だろう。

幾分か魔性を兼ね備えていると、対魔系の結界に反応してしまう。

この世界に初めて来た時、関西呪術協会の結界に引っかけたのだから、まず間違いないといってもいい。

三年前に訪れた時に反応しなかったのは多分、あの時の自分の魔の性質がそれだけ低かったからこそ。

つまりは、今は反応するだけの魔性を兼ね備えてたと言う事。

それにここは仮にも『世界樹』が存在する霊地だ。

俺からして見れば、『世界樹』の通称で呼ばれる神木・蟠桃は急速

に活性化した魔力伝導体の性質を持ったただの樹木だ。
魔力を保有しすぎたからこそ、異質で巨大すぎる大樹となり、地に魔力を供給するようになった、まさに『神木』……と言った所だろう。

勿論、あれは確かに『世界樹』だ。
局所的なもの、ではあるが……。

この霊地を守る為にも、電子精霊を使役しての学園結界が必要なのだろう。

それに……余計な術式も組んでいるようだしな。
魔性が結界に引っかけた事に加え、僅かながら魔力を奪い取られるような感覚が、麻帆良に入ってから感じている。
以前感じなかったのは、やはり同様に魔性が低かったからか。
一体、こんな所に何が“居る”んだか……。

「見えてきましたよ」

刹那の声を聞いて、目の前にある階段の上を見る。

「ははっ……壮観、とでも言えいいのか？」

ジジイを中心として、ズラリと並ぶ魔法先生と魔法生徒たち。
パツと見ても10名ほど居るのは、主要メンバーか、はたまた今日は仕事のなかった暇人か。

さすがにそう言うのは失礼だが、それなりの術者も居るらしい。

「ふうん……それなりの剣士や術者は居るんだな」

ジジイとタカミチは言うまでもない。
見た限りでは、多分あの髪の長い眼鏡の女性は恐らく刹那と同様に剣士だろうか？ そんな印象が強い。

サングラスをかけたあのいかついおっさんは、それなりにやれると思う。

「おお、時間通りじゃな、『魔導師^{ゲル}』」

そう言ったのはジジイだった。

僅かながら、麻帆良勢にざわめきが起こる。

大して有名でもない二つ名を知っているのは、ジジイの仕業か？
全く、その名で呼ぶと言っただろうに。

「その名で呼ぶのはやめてもらいたい、学園長」

「ふおっふおっふおっ。それでは、自己紹介をしてもらおうかの」

……聞いちゃいねえな。

「麻帆良の魔法使いの皆様、お初にお目にかかります。

私の名は近衛戒人。関西呪術協会の長にして我が父・近衛詠春より使者として遣わされました。

そちらに見える関東魔法協合理事長にして祖父・近衛近右衛門殿の御厚意により、本日より麻帆良学園女子中等部に編入する事になりました。

これより東西の仲介人として、この麻帆良の地にて守護の任に就きます。お見知りおきを」

適当（？）に挨拶して、仰々しく、たつぷり三秒間頭を下げる。

「うむ。よろしく頼むぞい」

ジジイの言葉を他所に、嗅覚が嗅ぎ慣れた甘い匂いを捕らえた。
その匂いがするのは、ジジイの隣に居る金髪の少女。

僅かに視線を向け、すぐに戻す。

なるほど。

すぐに理解した。

学園結界は強力だが、いくつか無駄な術式が組み込まれて綻びができていて、事に対し、理解できた。

あの少女は『吸血鬼』だ。

魔力こそ殆ど感じないが、吸血鬼独特の血の“甘い匂い”がする。血に溶け込んだ濃密な魔力の匂い。

勿論、魔力が殆ど感じられない所為か、その匂いは微弱なもの。

けれど確かに、俺の嗅覚は“彼女は吸血鬼”だと結論付けている。

多分、最低でも500年は生きた、吸血鬼。

学園結界にもしも封印、もしくは呪い関係の術式が組まれているなら、あの魔力の薄さも理解できる。

「……さて、恒例と言うのもあれじゃが、腕試しと行こうかの、^{グル}魔導師』よ」

……じ、ジジイ。余程ぶっ飛ばされたいらしいな。

「分かりました。手加減はしない方が良いでしょうか？」

「そうじゃな……お主がそう言うのなら、相手は高畑君にお願いしようかの」

「僕ですか、学園長？」

今度ははっきりと分かるざわめきが起こる。

「……了解しました。それでは高畑殿、お手合わせ願います」

「ははは。学園長も無理を言ってくれるね」

「しかしのう……」

「分かってますよ、学園長。彼の相手は、少々辛いですからね」

僅かに時間を取って移動し、タカミチと対峙する。

「あれから二年、君はまた強くなったかい？」

対峙したタカミチがそう言った。

「それはどうでしょうか？」

「口調は戻してもらっても構わないよ」

タカミチのその言葉で、口の端を吊り上げる。

「来い、『来電』『風切』」

手を交差し、腰の左右に添える様に、そして柄を握るように。
名を呼び、この世界へ招く。

抜くは、最も永い時を共に過ごした、異能の刀。

鞘は黒。柄は黒。鍔も刀身も、その切っ先も。

全て黒で統一された、二振りの刀。

「さあ、始めよう」

「準備はいいようじゃな。では、始めじゃー！」

「荒れろ、嵐の王」

ジジイの声と共に、氣を来電に、魔力を風切に流し通し、干涉し、眠れる力を呼び起こす。

しかし、相手は高畑・Ｔ・タカミチ。

流石と言うよりは、定石通りとでも言った所だろう。

無造作に二刀を振るい、放たれた二つの“拳圧”を防ぐ。

瞬動で裏を取り、雷を帯びた来電を振るう。

それに反応したタカミチが瞬動で距離を取り、お得意の『無音拳』が今度は四度。

風切で風の防壁を張って打ち消し、距離を詰めて来電と風切で切りかかる。

それは簡単に避けられ、接近戦となり、タカミチの拳が眼前に迫る。

「ほい」

「っ！」

身体をそらして拳を避けながら、至近距離から顎を狙った蹴りを放つが、ギリギリ避けられてしまう。

「タカミチってさ、反応よくなった？」

「二年前と同じにしないでもいいかな？」

「ん……それもそうか」

高揚感を覚えるが、理性で抑え付け、ただの“試合”であると言う事を頭に入れる。

タカミチほどの実力者が相手だと、つい“戦いたくなる”。

「ちゃんと防げよ、タカミチっ」

視界の隅でジジイが結界を張っているのが分かったが、まあそれはさておき。

通常供給より多目に風切に魔力を流し込み、異能の発現を促す。

（雪村流風花式《風花乱絶閃》！）

風切を振るい、軌跡からカマイタチを飛ばす。

同時にタカミチの周囲に風の異能『風花』で同時・連続生成した力マイタチをタカミチへと向ける。

驚愕で僅かに止まったタカミチに近付き、カマイタチの檻の外から技を重ねる。

「招雷劍^{しょうらいけん}」

空より一条の光が走り、カマイタチの檻へと落ちる。

そしてすぐさま離れ、呪文詠唱を開始する。

「氷の精霊101頭。集い来たりて敵を切り裂け。《魔法の射手・連弾・氷の101矢》」

放たれた氷の矢は、未だ残るカマイタチの檻へ突っ込む。

「光の精霊……」「そこまでじゃ！」

更に追撃を加えようとした所で、ジジイの制止の声がかかった。

タカミチならこれくらい余裕だとは思うが、結界の耐久度的にも、戦闘の規模的にも、止めた方が良いと判断したのだろう。

「全く……お主、加減と言うものを知らんのか？」

「いや、タカミチならこれくらい余裕だろ？」

ジジイの言葉に、現状を無視した軽い口調で返す。

事実、煙の中から出てきたタカミチは無傷とは言わないが、軽傷でその姿を見せた。

「いや、ははは……咄嗟に咸卦法を使つて良かったよ」

タカミチはそう言つて軽い笑みを見せるが、苦笑混じりなのは気のせいじゃない。

まあ、雪村流風花式の奥義を使つた上、雷迎式の技、氷の101矢を叩き込んだのだから、ただの腕試しにしてはやりすぎである。少し反省しておくでしょう。

「でもこれで一応は分かつて貰えたと思つてるよ、ジジイ」

口の端を吊り上げ、呆然と立ち尽くす者達に背を向けて寮への帰路につく。

刹那も立ち尽くしていたが、まあ大丈夫だろう。

顔合わせの翌日。

「兄様……！」

我が妹の声で目が覚めた。

「……あれ？ 兄様が居らん」
「ロフトだ、ロフト……」

部屋の西側のロフトから顔を出し、既に制服を来て準備ができている妹を見る。

ベッドも使わず、ロフトで寝たのに、特に意味は無い。

「つか鍵閉めてあったのにどうやって入った？」

「合鍵ならここにあるえ」

「……………」

いつ作った、そんなもん。

とりあえず降りて、コートを羽織る。

うん、準備完了。

「まだ時間に余裕はあるのか」

「実は八時やったりして」

「……………」

全く、この妹は……。

「兄をからかうのはやめなさい」

「妹で遊ぶのはやめなさい」

「……………」

……もう、いいや。

とりあえずケータイを取り出して、時間確認。

時刻は六時半過ぎ。まだ余裕はある。

制服は届くことなく、私服のまま登校する事になるが、まあ別に良

いだろう。

正直な所、新しい衣服に魔法の刻印術式を組み込むのは色々面倒で、既にそれを組み込んである私服の方が楽だ。ちなみに刻印術式は、防御性に優れたものを用い、材質硬化や魔力付与による肉体強化の連動性など、便利なもの。

まあ、攻撃を受けるなんてことはあまりない為、必要かどうかはさておき。

気分の問題に近いところである。

「ああ、木乃香。ここに居たんだけ？」

「おはようございます」

そう言っただけ顔を見せたのは明日菜と刹那だった。と言っただけ、無断で入って来たな。

「他人の部屋に無断で入るのはどうかと思うんだけど」

「え？ あ、ごめんごめん。木乃香が仕度したらパーツと出てっちゃったから、ここかなーって思ってたさ」

「まあ、別に良いけどさ」

朝っぱらから来客の多い一日である。

四人で寮を出て、学校へ向かう。

女子校に通う男子、と言うのはたった一日でその噂は広まっているらしく、道中いくつも視線がこちらに向くのは、やはり痛い。

登校に関しては、基本的に走るのが通例らしく、現在絶賛疾走中。

「……面倒臭い」

「あはは……」

俺の言葉に、苦笑で反応するのは刹那。
どうせなら瞬動でさっさと移動したいと言っのが本音。

「木乃香は楽そうだなあ」

「なんなら兄様も使ってみる？」

そう言って木乃香が指差すのは足のローラースケート。

少し使ってみたい……と言っか、楽をしたい気に駆られるが、それはおいておくとして。

「……ケンヴル・メーディア戦場の旋律。契約に従い来たれ、大地の聖獣……ライザス・レヴィ地を駆る獣王」

魔力供給と速度上昇の魔法をかけて、地面を一回蹴るだけで、三メートルほどの距離を稼ぐ。

まあ、楽をしたいだけである。

「白昼堂々と魔法とは……」

走りながらも溜め息をついて額に手を当てる刹那は、多分気苦労が絶えないだろう。主に俺の所為で。

そんな苦労をかける心算はさらさらないのだが。

「まほー？」

「ああいえ、なんでもないですよ、アスナさん」

「ん？ そっ？」

刹那の呟きが聞こえたらしい明日菜が言っか、刹那は軽く誤魔化す。

異国の街並みを抜けて、女子中等部の校舎まで来ると、魔法を解いて一息。

これから毎日の様に走って登校するのは、正直勘弁願いたいものだ。

第四話 『3-A』

走つての登校を終えて、学生生活・二日目。

常に騒がしいのは、多分このクラス特有の雰囲気なのだろうか。

そう思いながら、自分の席に腰を深く落ち着ける。

木乃香が近くに来ると、自然と刹那と明日菜が近くまで来て、適当に会話を交わす。

その中で初日、いくつも質問をぶつけてきた報道部所属の生徒……

「えーっと……朝倉、だったか？」

「そうだよ。出席番号3番、朝倉和美、昨日も自己紹介したと思うけど？」

「ああ、昨日はなんつうか、まるで津波だったからな……」

本音では、ただ覚えたくないだけ、面倒なだけ、と言う理由もあるが、昨日は兎に角疲れる一日だった。
そして……

「へえ…… たった八歳で一人旅なんて、尋常じゃないね。それも紛争地域ばかりって言う所がさ」

「まあそうかもな。安全かつ平和な所を見ても、醜い世界は見えないし」

「実際には何をしてたの？」

「戦災を被った人達と一緒に過ごしたり、NGO団体の中で人助けとかはしてたけど……」

「けど？」

「どっちかと言えば、“ただ見て回る”だけの方が多かったかな」

「それは何で？」

「下手に手を出せば撃たれるような地域もあつたからな。極力交流を持つ事はしなかったんだよ」

「なるほどねえ……」

と、過去の事を根掘り葉掘り聞かれる流れになった。

時々木乃香・刹那・明日菜の三人が三者三様の表情と反応を見せるが、まあそれはおいとくとして。

「おーっす、転入生クン」

次に声を掛けて来たのは、黒縁眼鏡の生徒。

「……えーっと」

「早乙女ハルナ。出席番号は14番。漫画研究会と図書館探検部に所属しています」

刹那の紹介（と言うより説明？）を受けて、頷く。

「いつや〜、男子が女子校に転校なんて、“面白い”こともあるもんだね！」

……単なる、ネタ欲しさかつ。

「まあ、ジジイ……じゃない、学園長の謀略に嵌められた様な感じだけだな」

「木乃香のお兄さんって言う話で、しかも養子なんだって？ いやーもう血の繋がらない兄妹の禁断の愛とか、もうラブ臭が……」

置いておこう。

普通に反応した俺が馬鹿だったんだと、割り切る事にしよう。
そうだ、そうしよう。

「……で、そっちは？」

「え、えと、その……」

「綾瀬夕映です。こっちは宮崎のどこです」

紺色の長い前髪で顔を隠した生徒がオタオタし、それを見かねたのが青紫色の長い髪で身長が若干（？）低い生徒が名乗り、紺色の髪の生徒の名をあげる。

「ああ、うん。よろしく」

言葉を返して、自分の周りに集まった生徒達を見る。

何で、本当に何で、俺はこんな所に居るんだろう。
つい天を仰ぎそうになる。

「木乃香と兄妹って事は刹那さんとは幼馴染になるってワケだよね。
ぬははっ、いやもう、まさに三角関係！？」

未だに言葉を続けている早乙女を見て、溜め息をつく。

その時、教室に入って来た金髪の生徒を見て、思考が固まった。

H Rが始まりタカミチの声を右から左へ流しながら、隣の席に座る生徒を横目に見る。

昨日、魔法先生や魔法生徒の顔合わせの時、ジジイの隣に居た金髪の少女。

吸血鬼独特の血の甘い匂いを僅かながらも漂わせる少女。

「……何だ？」

こっちの視線に気付いて声をかけてくる。

ああ、そうか。

顔合わせの時にはどんなヤツかと思ったら、なるほど。

これは分かりやすい人物が居たものだ。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル……『闇の福音』 600

万ドルの賞金首。

真祖の吸血鬼。

なるほどなるほど。

いや、何でこんな所に居るんだよ。

「……何だと言っている」

「ああいや、『ダイク・エヴァンジェル闇の福音』がまさかこんな所に居るとは、思わなかったんで」

って何正直に言ってた俺は。

「ふん、好きでここに居るわけではない。それに、昨日は世界樹前

広場で会っただろうが」

「……まあ一応。あの時は吸血鬼の血の匂いがただけで、あまり気にならなかったからな」

「血の匂いだと？」

「俺、一応吸血鬼の特性があるから、そう言うのは敏感なの」

「はっ。お前が吸血鬼だと？ ふざけるのも大概にしろ」

そう言われるのも仕方のないこと。

今の状態じゃ吸血鬼ではなく、人間に最も近い。

だからと言って、人間ではないのだけれど。

「信じる信じないはさておき、なるほど。確かにこのクラスは異質なヤツが多いみたいだな」

そう言いながら、視線を向けるのは窓際の最後列とその前の席の二人の生徒。

窓際最後列の生徒は、ほぼ完全に『魔』を消しているが、恐らくは魔族。

その前の席の生徒は、確か昨日刹那に聞いた龍宮真名……と言ったか。

顔合わせの時に姿はなかったものの、依頼を受けて仕事をこなすらしい。

そして俺から見れば、彼女が半魔族が明確に分かる。

視線を変えて、誰も座っていないであろう窓際最前列の席を見る。

薄らとだが、幽体の女子生徒がいる事が分かる。

「目が良いのか、鼻が利くのか……分かんヤツだな」

横で呟くマクダウエルの言葉が若干耳に痛い、それはさておき。朝倉の後ろの席に座る長身で薄茶の髪の生徒や、俺の二つ前の席に

座る褐色の肌に黄髪 of 生徒は、多分武術を知る者。

明確ではないが、明日菜の前の席の茶髪 of 生徒も……多分、そう。

他で言うなら、マクダウエルと共に登校してきて、マクダウエル of 前の席に座る生徒……といえいいのか。

どう見てもロボである。寧ろそんなに技術が進んだ世界だったのか？
そしてその前の席に座っている、ノートPCを弄る生徒はいかにも

“マッド”な感じがある。

朝倉の右隣に座る生徒は、たしか雪広財閥の令嬢だったか。

木乃香は言うまでもないが、関西呪術協会の長の娘であり、東洋最大 of 魔力保有者で、

刹那は神鳴流剣士であり、人間と鳥族のハーフ。

裏表関係なく、意外と“立場”を持った者たちが揃うクラス。

「ほんと、色々訳有いな生徒が揃ったクラスだわ」

不明確なクラスメイトや他のクラスメイトがどういう立場 of 者かなどが分かれば、もっと出てくるんじゃないかと思うくらいに。

「“監視”対象がクラスメイト全員、と言うのは流石に呆れるよ」

「私も入っているのか？」

「一応ね」

「ははっ。あのジジイ、余計なものを送り込んできた訳か」

「余計とは失礼な」

なんて言葉を交わしながら。

で。

「『『『『『ようこそ！ 乙女の園へ！！』』』』」

「帰る」

「『『『『いきなりっ！？』』』』」

二日目の放課後。

木乃香と刹那、明日菜、早乙女、宮崎、綾瀬の合計六人に連れられて、放課後の教室へカムバック。

教室に入るや否や、意味の分からん状況がそこにあり、今正に帰ろうとしているところだった。

そして説明を聞く事数分。

「つまり、単なる歓迎パーティだ、と」

一斉に頷くクラスメイト達の中には担任のタカミチや副担任であるしずな先生も居る。

一応は教師の許可も取っている、と言う事か。

多分、タカミチとしずな先生の姿が無かったら無理にでも帰ってきた気がする。

主役は真ん中だ、と連れられて色々言葉を投げかけられるが、どう

答えればいいのか不明である。

「ねえねえ、本当に何で女子校に転校なんてしてきたの？」

「学園長って御祖父さんなんだよね？ 嵌められたって聞いたけど、どういうこと？」

「昨日仰っていた自分を捨ててでも守りたい人ってどんな方なのですか？」

「ムムツ！？ その体重移動…… 武術をやっているアルネ！ 手合わせ願える力！？」

「それは聞き捨てならぬ事を聞いたでゴザル」

「朝倉から旅してたって聞いたんだけど、それってホント？」

「そう言えば、寮の七階にできた部屋に住む事になったんだよね。今度お邪魔してもいい？」

「とりあえず特製肉まん食うネ」

と、まあ方々から声が掛けられ、対応する間もなく次の言葉が投げられる。

横目にタカミチに視線を向けると、苦笑で返される。

助ける気はないんですね、分かります。

そう思った矢先、ぐいっと右腕を引かれ、囲まれていた中から解放される。

「はいはい、兄様はこっちやえ」

「ああ、木乃香。助かった」

周囲から僅かにブーイングが湧くが、聞こえなかった事にする。

「兄様は元から目立つのに、ここじゃもっと目立つんやから、気いつけなあかんよ？」

「ん…… まあ、確かにな」

ロングに眼帯、そして黒尽くめなんて確かに目立つし、女子校の中なら尚更の事。

「しかしまあ、中間試験前の時期だろうに、この緩み方はすげえなふと、そう言う時期だな、と思って口になると、一部のクラスメイト……と言うか、大半のクラスメイトが意気消沈した。」

「……なるほど、禁句だったか」

言った後にそう気付く。

土・日とはさみ、来週からは中間試験。言ってしまうば、もう時間が無い。

今日を入れても、テスト当日まではあと三日なのだから。

そんな時期に男子生徒が女子校へ転校するという異例の事態は、朝倉が言うように、まさに特ダネなのだろう。

息抜き、と言う意味も兼ねて。

その日の夜。

二次会と称して女子寮の自室……七階の大部屋に集まった。全員ではないものの、数にして18人。

クラスの生徒の三分の二近くの人数が集まった形となっていた。大部屋とは言え、流石にこの人数。動けないほどではないにしろ、狭いものである。

「他人の部屋を何だと思ってるんだか……」

一人そうぼやいて、現在は私物の整理をしている。部屋に戻るなり、届いていた荷物に、父上が送ってきた荷物も加えて整理中。

一応歓迎パーティの主役だが、どうにもあの中には入り辛い……と言うか、入りたくなくて、整理を行なっていた。

「うわっ、何これ、模造刀？」

「勝手に触るなよ……」

片してない段ボールを勝手に開き、覗き込んでいた早乙女に呆れながら、その段ボールを取り上げる。

「……って、こんなもんまで送り付けやがって……」

中を覗いてみれば、一本の太刀と、二本の小太刀、そして一本の短刀。

実家に置いてあった、鍛錬用の真剣だった。

他にも同様に実家に置いてあった筈のものがいくつか。

殆どが魔法具系のものの為、見られちゃまずいほどの物はないが、だからと言って見せびらかすようなものでもない。

「いや、そんな目を輝かされても困るんだけど」

好奇の視線でこっちを見る早乙女が、恐ろしい。

その後ろから、一体何が？、と顔を覗かせている綾瀬と宮崎は、多分早乙女とはよくつるんでいるからだろうか？

「それって模造刀なの？」

素朴（？）な疑問に加え、キラキラとした目。

「真剣だ。下手に触れるなよ」

事実を伝えたと、

「「えっ……」」

と言つて若干引いたであろう綾瀬と宮崎。
だが……

「マジ！？ ちょっと見せてくんない？」

と、更に目を輝かせたのが一名……いや、三名。
確か……いきなり手合わせをどうのと言ってきた、古菲に長瀬楓……
…だったか。

「断る。こんな狭い所じゃ危険だし、そう見せびらかすものでもない」

そう拒否すると、ササッと移動する早乙女。
その移動先は……

「ねえねえ、ちょっと聞いてよ木乃香」

「どうしたん、ハルナ？」

「木乃香のお兄さんが刀を見せてくんないのよ」

「あはは、そら無理やなあ。皆居る中で、刀なんて危なすぎるやろ？」

「うわっ、兄妹揃って同じ事を……」

まあ、木乃香の所だった。

「明日の放課後なら刀ぐらいは見せてやる」

一応譲歩（？）の形でそう言っただけ。

「ん……どうせならさ、刀振ってる所も見てみたいんだけど……
どうかな？」

「……別に良いが、何か意味があるのか？」

「ちよつと資料が欲しくてね」

「へえ……」

……と言っただけ、資料？

漫画研究会……だったか？ そのための資料だろうか。

それはさておき。

手を二回叩き、全員の注目があつまる。

「もういい時間だから部屋に戻りな」

何で俺がこんな役回りなのかはさておき、それぞれケータイやらで時間を確認して分かったのか、「確かにそろそろ」、と言って歓迎パーティの二次会と言う名目の集まりはそのテンションを徐々に下げていった。

しかしそれでも、テンションの高い半分は収まらず。

……えーっと……名前と顔を覚えるのは苦労するな。

タカミチが持ってた名簿は見させてもらったものの……えっと……
確かチアリーディング部の……

「その……チア部三人組」

思い出せなかった。

「酷いよ!？」

明日菜と同じ髪色の生徒がそう言うが、覚えるまでは仕方が無い。

「騒がしいからとりあえず一番に帰れ」

「他との扱いの差が出てる! どうするよ、クギミ」

「クギミ言うな! 騒がしいのは美砂と桜子の二人でしょ?」

「いや、誰が居ても騒がしいからとりあえず帰れ」

「あ、じゃあウチもそろそろ」

「私も」

追い出す形になりながらも、何とか五人帰らせる。

確か、後に増えた二人は……。

うん、また今度名簿でも見せてもらって覚えるでしょう。

記憶力は良い方だが、無理に覚えようとするのはよろしくない。

異常な環境で、急いで覚えようとするから頭に入らないんだ。

……そう言う事にしておこう。

そして、残り13名。

まだ、13人も居るのか。

つい膝と手を床につけてしまいそうになったが、堪えられた俺は充

分頑張ってる。

「そっちの双子とその間に居るヤツも、騒がしいからさっさと帰れー」

反応が無い。ただの木偶人形のようにだ。

「なっ、なにをするんだー！」

「あわわわっっ！」

双子の襟を掴んで持ち上げ、猫のような状態のまま強制退場。

「あ、ちょ、ちよつと!？」

ついでに釣れたもう一人も、押し出して強制退場。

確か双子は鳴滝……までは覚えてる。

双子と言うのが印象に残っただけで、下の名前は覚えていない。

釣れた方は、正直覚えてない。

これで残りの障害は、10人。

木乃香、刹那、明日菜。

あのしつこい報道部の朝倉に、木乃香の所属する図書館探検部と同じ部に所属すると言う早乙女、綾瀬、宮崎。

古菲、長瀬の武術派(?)の二人に、クラスで俺の前の席の……明石……だったよな？

「明石、だったか。お前もそろそろ帰ったらどうだ？」

「うん？ まあ確かにそうなんだけどね。この雰囲気は良いし、楽しいかなーって思うとね」

「……迷惑甚だしいんだが」

「そうは言っけど、本当は嬉しいんでしょ？」

二へへ、と意地の悪い笑みを浮かべるが、まあ本当に迷惑なだけと言っても、誤解は解けないのだろうか。

「ま、私も自分の部屋に戻るわ。じゃ、また明日」
「ん」

そう言っで、明石は「お先に」と部屋を出て行った。
先の八人と比べると、まともそうな人格者である。
友人としては、気さくで良さそうな関係が築けそうな奴だ。

「さて……残り9人」

難関（？）が残っている。

「古菲、長瀬。お前らもう帰れ」

「手合わせしてくれたら帰ってもいいアル」

「うむ」

……なに？ いわゆる戦闘狂？
バトルマニア

まあ武人なんていう類の人種は、力ある者を求める習性があるのは分からんでもないが。

「明日、早乙女に刀を見せる約束をしてる。その時になら手合わせぐらいならしてやる」

「ホントアルカ！？」

「だから帰れ」

「そう言う事なら、今日は大人しく帰るでござるよ」
「手合わせは素手で良いんだよね？」

「ぬ？ 刀と言って、得物は使わないのでござるか？」
「武器は選ばないんでな」

それに、下手に刀使って傷を負わせでもしたら厄介だ。
まあ大丈夫だろうが、どっちかと言えば俺の心配は刀のほうにあって
たりなかったり。

達人級の格闘術・体術相手に、武器を持つのはかえって危険もある。
それに、折られたりでもしたら目も当てられない。

大抵の事じゃまず折れないだろうが、氣や魔法で武器強化が出来る
とは言っても限界がある。

もしも折れたら、それはもう使い物にならない。

この世界じゃ来電や風切の刀身は作れないし、中々困ったものだ。

武器の扱いに関しては正直俺は専門じゃないし、雪村流剣術だって、
継承者とは言え刀を命にできた訳じゃない。

それにただの格闘術なら、素手でやった方が楽だし。

兎も角、これでまた二人、この部屋から減った。
残るは7人。

「早乙女達ももう帰れ。特に早乙女、さっさと帰らんと明日の約束
は無かった事にすんぞ」

「ちょ、ちよつと、それは酷いって」

「もう10時も過ぎましたし、そう言われても酷くないと思います
が」

「そうだよハルナ……」

終始緊張(?)しっ放しであるのはさておき、二人とも常識人では
よりである。

それに比べて早乙女と言うこの人物は……全く。

「大体、朝倉達はどうなのよー？ 木乃香と刹那さんは家族と幼馴染だから兎も角、明日菜はルームメイトだけどさー」

「別に、あいつが無駄にしつこいだけだ」

「いやまあそうなんだけどさ」

「そうなんだよ。だから後回し。周りを見る。残ってるのは最初の半分以上だ」

「なぬ？」

キョロキョロと周りを見て、ポン、と手を打つ。

「私たちも後回しにされたか！」

「今更気付くな！」

とりあえず追い出し、綾瀬と宮崎もそれに続いて部屋を出て行った。そして残ったのは、木乃香、刹那、明日菜、朝倉の四人。

「なーなー、兄様？」

四人に声をかけようと振り返った時、木乃香から声をかけられる。

「ん。どうした、木乃香？」

パタパタ、と軽い足取りで寄って来るのは、昔と変わらないな、と思わされる仕草。

だが、俺の思考はそこで固まらざるを得なかった。

「このカード、何なん？ タロットみたいで、昔のウチが写つとるけど」

木乃香の手に持って俺に見せるそのカードは、まだ幼き頃の木乃香

が黒い着物を着た姿が描かれているカードだった。

「なんで、こんなものまで……！」

多分、父を恨むと言うのは今でこそ使うべき言葉だと俺は思う。こんな状況で開けて、それに探られるまでの状態になってしまったのは、俺の失態。

だが、まさか《仮契約カード》まで送ってくるとは思ってもいなかった。

勿論そこまで考えが至らなかった俺の失態ではあるが……。

「ああ、そのカードな。えーっと……ほら、こっちにもあるぞ」

極めて冷静に、カードを取り出す。

その数は四枚。

木乃香の持つ幼き頃の木乃香の姿の描かれているカードと同じく、同じ時に作られた、刹那のカード。

他の三枚は、そのうちの二枚が関西呪術協会で戦力増強の為に取入れた西洋魔術の《仮契約》の試験体カード。

描かれているのは、両方とも実力が中途半端だった巫女で、残り一枚は旅先で起きた悪魔の襲撃の際、仕方なく契約を結んだ時のカード。

しかし二人の巫女のカードは他のカードとは違って、数字も色調も、何も描かれていない、“死んだカード”ではあるが。

「せつちゃんのもあるんやー」

「うっ……」

木乃香の言葉に唖ったのは刹那だった。

顔が若干赤いのは、あの時の事を思い出したからだろう。

ほぼ強制的にふざけただけの口付けは、俺の魔力の暴走と、木乃香の魔力の覚醒により、魔法陣無くして結ばれた仮契約。

その直後に刹那とのキスも強要されて……まあ、そんな感じだった。それからは父上の言葉と方針に従って、仮契約の事やカードの事も伏せたままにしていた。

刹那にはその時に事情を話してはいるが、カードを一度も使った事は無い。

しかし、父上から説明を受けたときは、相当ショックを受けたものだが、それも今は懐かしい思い出だ。

……二度と思い出したくは無かったが。

「まあ思い出の品、と言う事にでもしておいてくれ」

兎に角、話を流す事に決めた。

「ええええええと、こここれは、ですねっ」

「テンパってんじゃない」

「あたっ!？」

顔を真っ赤にし、手をブンブン振りながら何か余計な事を言おうとした刹那の頭上から拳を落として、とりあえず一息。

「もう、お前らも帰れよ。全く、いつまで居座るつもりなんだ？」

その言葉は、若干放置気味になっていた明日菜と朝倉にも向けて言う。

「え？ あゝ、もうこんな時間だしね。じゃ、あたしは部屋に戻るわ」

じゃあ、と手を挙げて颯爽と部屋から出て行った朝倉に続き、

「あ、じゃあ私達も帰ろっか」

「そうですね」

「ウチはもう少し……」

「木乃香も！」

「えゝんっ」

と、明日菜の声で三人が帰っていく。

木乃香は半ば引き摺られながらだったが、それはさておき。

シン　　、と静まり返った部屋。

そこにあるのは、二次会の成れの果て。

「……はあ」

食い散らかった部屋を一人、掃除する。

時折、まだ整理が終わっていない荷物を整理したりして、一時間経って更に夜が深まる頃には掃除と整理を終えた。

「……カードの更新、しとくか」

そう呟いて、木乃香と刹那の帰り際に採取しておいた髪の毛を媒体に、簡単な魔法陣を描いて、仮契約の更新を行なう。

我流だが、二度試し、二度成功しているから、微弱な蒼白い魔力光の発生のうち、特に問題なく更新が終わる。

カードに描かれた姿は、今現在の二人の姿となり、それぞれがアー

ティファクトと呼ばれる、従者のアイテムを装備した状態になる。実際に召喚した訳じゃないから、どんなものかは分からないが、想像はついている。

カードの木乃香が着ている着物、そして刹那の手にある刀と、その周囲に浮かぶ、抜き放たれた鞘が一つと納刀状態の九本の刀。

「全く、どうして俺の私物がアーティファクトになるのかね。はあ……」

木乃香と刹那の二枚のカードを見比べながら、溜め息をつく。

恐らく、木乃香のアーティファクトは黒い着物の“それ”自体だろう。

かむい・からすはのみこと
《神衣・鴉羽命》。

はてさて……これを『アーティファクト契約専用の魔法具』と呼んでいいものか。否、アーティファクトと呼べたものではない。

《神衣・鴉羽命》は『神器』だ。並大抵の魔力じゃ制御できないことを考えれば、膨大な魔力を秘める木乃香なら扱えるかもしれない。

けれど、人の身で、それも神器自体との契約もなく、神器など到底扱えたものではない。

それがアーティファクトとして、それも俺の“中”から、選ばれたうる覚えだが、確か『バクティオー仮契約』は仮契約協会に納品された魔法具がアーティファクトとして召喚されると記憶している。

例外もあるらしいが、こんなことでは例外中の例外だろう。

“この世界には無いはず”の“異界の神器”が、“異界となっっている俺の身体の中”から召喚される。

恐ろしいなんてものじゃない。
下手したら、空間に亀裂でも入って俺の身体が吹っ飛ぶんじゃない？
なんて、考えたりしてしまう。

冗談じゃない。

上半身と下半身がお別れするぐらいなら、今なら二三日で治るだろうが、粉々になったらそれこそ何年かかる事やら。

上下がお別れしたら痛みだってあるし、死にはしないが、粉々になったら一時的に死んだも同然だし、そんな状態でも“痛み”を感じる。

気が狂うこと間違い無しだろう。

まあ、既に狂ってるといえるのだから、それ以上狂う事はないだろうが。

ともかく、予想される……と言うか、もう見た目からして記憶の物と一致している木乃香のアーティファクトらしき“それ”。

その能力は、その防御性能にある。

『防御』『反射』『回復』の三つの能力を兼ね備えた自立軽装型の神器。

世界樹の創った防衛機能を使っているのだから、そこらの神器と比べれば段違いの性能を持った神器だ。

今の俺じゃ《鴉羽命》を召喚する事が出来ない為、使う事は出来ないが……。

一応は『絶対防御』『魔導反射』『完全治癒』の三拍子なのだから、言ってしまうれば防御・回復系統では最強の神器とも言えるだろう。

そして、刹那のアーティファクト。

正直……いや、ぶっちゃけ、考えたくない。

絵柄の刹那が握る刀は、灰色の刀身にごつごつとした骨の様な鏢と

柄は……どう考えても《流影刀・黄泉》。

《帶電刀・来電》《風生刀・風切》と同じ、異能刀だ。

異能武装の中の刀剣類である異能刀そのもの。

そして残りの九本も、刀身は見れないが、柄を見ただけで“それが何か物語っている。

つまり、刹那のアーティファクトとして選ばれたのは……

《異能武装・刀剣》

描かれている十本は、過去に俺が愛用していた異能刀達。

来電と風切は今でこそ使っているものの、正直今となっては特に必要であるとは言えない。

いつの間にか広がった異名である『風雷の剣士』は来電と風切の賜物だったが、今は……不本意だが、『魔導師^{グル}』などと呼ばれている『魔導師』は未知の魔法を使う魔法使いとして広まってしまった異名だ。

それはさておき。

絵柄に描かれている十本の異能刀は……

《帶電刀・来電》《風生刀・風切》

《白夜刀・白雷》《水揺刀・水連》

《灰燼剣・軍》《靄雲剣・巴》

《神樹刀・桜槐》《瀑砂刀・地顎》

《流光刀・神門》《流影刀・黄泉》

……この十本。

それぞれが異能を持った異能武装に類される刀剣類・異能刀であり、人工神器。

これじゃあ、俺が使う武器が無いと言ってもいい。

無論、ほかにも異能武装や神器はあるが、その殆どが召喚する事も

間々ならないのだから、今後は基本的に素手で戦う事になるかもしれない。

木乃香と刹那のカードを見て、溜め息をつく。

契約解除には、契約主と従者の同意が必要だが、木乃香同様に事故的に仮契約を結んだ刹那と契約解除を試みたが、合えなく失敗。

その後も何度か試し、契約解除はできず、果てには神族契約の解除儀式も改良して行なってみたが、結果は失敗。解除できない仮契約。

……… どんنادよ、本当に。

今思い出しても本気で落ち込んでしまう。

「はぁ………」

本日何度目かの溜め息。

朝から数えて十数回ほど……… いや、もしかしたらそれ以上。

記憶を辿れば数えられるが、そんな事を考えても余計に溜め息が出るだけ。

「はぁ………」

言ってるそばから、再度溜め息。

「……… 風呂入って寝よう」

そう決めると、さっさと風呂に入った後、すぐに布団で眠りに付いた。

第四話 『3・A』（後書き）

ヒロイン関係はどうしましょうか。

とりあえず始まりが始まりなので、木乃香・刹那の両名は入れるとして……

キャラ的な扱い易さ（？）から何人が候補が一応居るんですが、ネギパーティの構成上、下手に抜き取る事もできず……

一応ですが、作中で未だ名前が出てきていない3・A生徒が居ますが、人間関係からしてどの台詞が誰なのか分かるでしょうか？

後々、多少は、多分、きっと、出てくると思いますので（？）その際にはちゃんと名前が出てくるはず（？）。

不確定？ そんなものは上等だぜ。

今回で木乃香・刹那の仮契約カードと、他三枚が一応出てきましたが、次回はそれについての話を入れる予定です。

第五話 『五枚のカードと依頼』

目を覚ませば、ここでの三日目の生活が始まる。

幸い、昨日とは違って我が妹の襲来はなく、平和な朝を迎える事ができた。

まだ六時を過ぎたばかりだし、休日ゆえ来ていないだけなのだろうが。

「はあ……」

しかし溜め息がでる。

本日一回目の溜め息は、特に意味も無く口から漏れた。

手元にある五枚の仮契約カード。

言ってしまうばどれも曰く付きのカードだ。

木乃香と刹那のカードは、木乃香の悪戯と不運が重なった為に無作為に結ばれてしまった仮契約。

今から六年半ほどだったか、それくらい前、木乃香が七歳の頃の事

になる。

刹那が総本山に帰ってくると同時に、俺は旅に出る事を既に決めていて、その時のことだ。

悪戯か、それとも別れを惜しんでかはさておき、強制的に行なわれた口付けは、不意の事で起きた魔力の暴走と、それに感化された木乃香の魔力の覚醒に伴って行なわれた。

その後に木乃香は、動けないでいた俺と刹那を無理矢理に口付けをさせた。

あのときの事は、今でも後悔しているし、未だ尚契約解除、もしくは破棄が可能か模索していたりするが……。

兎に角、その際にできてしまったのが、二枚のカード。

木乃香のカードは

数字は“MMCMXCIX”……すなわち、“3999”。確か、ローマ数字では表記上では最大の数字だったはず。

色調は“白”と“金”。二色であり、一応希少種らしい“金”のカード。

星辰性は“木星”。これは別段、不思議な事ではない。

徳性は“慈愛”。^{慈愛}“pietas”。異例なものだ。

方位は“北”。徳性などと比べれば、普通なもの。

称号は多分“癒しの女神”で合っているはず。

アーティファクトは不明だが、ほぼ確実に《神衣・鴉羽命》で間違いない。

刹那のカードは

数字は“MMCMXC?”。つまりは木乃香の3999の前の数字である“3998”。

色調は“黒”と“白”。白が色調に選ばれたのは予想がつくが、黒は不明。

星辰性は“太陽”。刹那らしいといえば、そうなのだろう。

徳性はやはり異質だった。“judicium”……“審判”だろうか？ どちらにせよ、異質なものだ。方位は木乃香と同じく“北”を指している。称号は“翼を持つ守護者”……で良いんだろう。アーティファクトは同じく不明だが、こちらもほぼ確定的に《異能武装・刀剣類》で間違いない。

確か仮契約カードなどで用いられる徳性は西洋哲学史における『ヨロツパ七元徳』の『知恵』『勇氣』『節制』『正義』『信仰』『希望』『愛』の七つのはず。

徳性や数字、二色の色調、そしてアーティファクト。

おかしい点があるのは多分、俺と言うイレギュラーとの契約ゆえだろうか？

数字や色調はありえない訳ではないためしておくが、徳性とアーティファクトの異常性は拭いきれない。それ以外に考えられる要素はない。

“死んだカード”である二枚のカードには、関西呪術協会の暗部に所属していた頃に契約した二人の巫女が描かれている。確か契約したのは木乃香と刹那の件の後のことだから、六年ほど前の事になる。

しかしもう、彼女達はこの世には居ない。

五年前、九州の神道教相手に大規模な戦闘があり、その際に二人とも命を落としてしまった。

数字は“3997”と“3996”。

“3997”のカードに写るのは、燃えるような紅い髪と、同じく紅い瞳の女性。

“3996”のカードに写るのは、透き通った蒼い髪と、同じく蒼い瞳の女性。

二人とももう、この世には生きていない。

もしあの時、彼女達と行動ができていたら、俺はきっと彼女達を救う事ができただろう。

けれど、そう考えても、もう……意味の無い事だ。

最後の一枚のカードは、金色の長い髪が特徴的な、女性の姿が写ったカード。

二人の巫女が死んだ五年前、旅先で起きた悪魔の戦闘で、助けた女性との仮契約カードだ。

助けたはいいものの、大規模な魔法に巻き込まれそうになったから焦ったものだが、まあそれはさておき。

五枚目の試験カードは正常に機能しているが、やはり普通のカードとはちよつと異なるようだ。

“3995”のこのカードは、現在も生きている。

仮契約と言うのは、なかなか面倒臭いものだと、これまでで理解できている。

仮契約や本契約と言われる魔法使いの契約は、いわゆる主従契約だ。魔法使いと、魔法使いの従者。

この契約によって、魔法使いは自らの従者へ魔力を供給する事ができ、従者はその魔力供給を受けて自身を強化したり、魔法行使に足りていない魔力を補う事ができる。

二人の巫女との契約によって、氣を供給する事も可能である事は確認済みで、いわゆる“そういう類のもの”であれば供給する事ができるようだ。

氣も魔力も、元を辿れば万物に宿るエネルギー……生命力。その生命力の供給が可能ということだ。

勿論、生命力そのものを操る存在など世界樹のような存在じゃない限りではしない。

……かといって、この世界にある世界樹……神木・蟠桃が、俺の知っているような世界樹では無い事はもう分かっている事だが……。

ああ、話がややこしくなる。

兎に角、言いたかった事は、この『仮契約』や『本契約』と言った契約は、生命力に宿る『性質』をも供給する事が可能であると言う事。

例を挙げる事はできないが、俺の場合では『不老』『不死』『不滅』と言った三つの性質がある。

厳密に言えば、もっと多くに分かれるが、つまりはそのひと個人の特性が表れ出る事がある、と言う事。

契約した五人の内、巫女の二人の場合では、精霊の加護が与えられたし、五人目の契約者は高速治癒の性質が与えられた。

従者にとって有意なものであり、その上で魔法使いがその性質を持つていれば、それが優先されるようだが……まあ、これ以上はまだまだ分らない。

カードの機能も、マスターカードやコピーカード、従者召喚や念話には分かっているが、それ以上はまだ何も分かっていない。

まあ、結局は、この仮契約の契約解除を最終的に求めるものとして仮定し、色々と探っていく事になるだろう。

長い思考から意識を戻すと、時計の針は七時を回っていた。

誰一人として襲来する影はなく、そんな平和的な一日の始まりに満足しながら、所持していく物を確認する。

と言っても、特にいつもと変わりはなく、大抵がコートの各ポケットに入っている所為で、確認する必要もあまりないのだが……。

「ん」

とりあえず財布、携帯電話がある事を確認する。

着信などはないか確かめながら、時間を見て、その次は財布を見る。中身は八万ちよつとと、中学生にしては随分な金が入っているのはさておき、カード類もちゃんとある事を確かめる。

勿論、無い訳などなく、ただ見てみただけでしかない。

そろそろ時間とは言っても、まだ余裕はあるのだ。多少無駄な事もしてみるものである。

「他は……別にいいか」

コートを見回しながらそう言って、一息つく。

このコートは、俺がこの世界に来た時に来ていたコートだ。シャツもジーンズも、この世界に来た時の物。

魔法 主に刻印魔法と言われる物体強化系の魔法 でコーティングされたもので、大抵はほぼ毎日の様に着ている服装である。

まあ、ずっと同じものを着ていると流石にアレなので、火・水・風のみつつの属性の魔法で清潔さは保っているが、服が一着しかないと言つのは別問題。

だから同じ様な服が何着かあるし、別の服として黒以外の服もあるが……まあ、着る事はそうそう無いんじゃないだろうか？

それはさておき、髪を低い所で束ねて、コートの中に隠す。

これはただ長い髪が邪魔で、良くやっている事だ。

生きてきた時間の殆どをこの長い髪と共に過ごしてきたが、邪魔になる時は本当に邪魔になる。

運動する時なんかはバサバサと邪魔だし、そう言うときは束ねて括るのが常となっている。

特に戦闘の時は、死に直面しかねない。

勿論、慣れている今となつてはそんな事はまずありえないだろうが、こうして髪を束ねるのが普通になつたのは、慣れるまでの間についてしまつた癖の様なものだろうか？

真の意味で『死』の無い者とは言え、やはり変化は訪れると言う事なのだろう。

例えそれが、些細な事であろうとも。

「そろそろ出るか」

ケータイの時計を見れば、時間はあれから五分ほど経つてる。

もうそろそろ出た方がいいだろう。

今出ると予定より随分早く着く事になるが、休日のこの時間だとこの寮はまだ静けさのある時間だ。

もう少しすると騒がしくなったり、慌しくなったりして、そんな中で部屋を出るのも、ただ疲れるだけ。

だから今日は少し出してみようと決めていた。

昨日みたいに絡まれ続けられたら困るしな。

ふとそんな事を考えながらも、部屋を出る。

「おはよ、カイ兄い」

「……………」

すぐそこに、ほにやつと笑う我が妹の姿があつた。

呼称からして、誰もいないからこその台詞だ。

一応呼称としては、大抵は「兄様」と呼び、「戒人兄い」「カイ兄い」「兄い」と呼び、極稀に呼び捨てにされる事もある。

「……ああ、おはよう。刹那と明日菜は一緒じゃないんだな？」

努めて冷静に、そして平常心をもってそう聞いてみる。

「アスナはバイトから戻ってきて二度寝しとるよ。せつちゃんは分
からへんな。部屋は違うし」

木乃香の答えに一度頷く。

しかし……ふむ。明日菜はバイト、ね。

この時間とかを考えると、新聞配達か何かだろう。
中学生でバイトとは、いやはや……。

「で、木乃香は何で部屋の前に？」

「起こそう思て来たら、ちょうど出てきた所やったん」
「ん」

頭を掻きながらすぐそこにある階段を降り始める。

すぐ隣を付いて歩くのは木乃香で、まるでそこが定位置のような感
覚だ。

「何でついて来るんだ？」

「ついてっちゃんあかんの？」

……全く、こいつと言っやつは……。

「どこ行くん？」

「ジジイのとこだよ。仕事の件でな」

「仕事っちゃん事は、せつちゃんみたいな？」

「ああ。そう言っことだよ」

分からないだろうと思ってそう言つと、どうやら木乃香は、刹那が何かしら仕事があるのを知っているようだった。

何をしているか、何をするかと言つた事は知らないのだろうが、木乃香は魔法関係に関しては若干理解のある。

東西の対立や、呪術師や呪符使い、そして魔法使いなどが存在している事。

知識はあるが、深くは無い。

父上の方針に従い、下手に教える事はしなかった。

だが、それでもばれてしまうものもある。

だからこそ、最低限の知識だけは、父上の了承のもとで教え、木乃香はある程度の知識を与えられている。

例えば、刹那のこと。

あの時はまだ木乃香には魔法などと言つたものが存在する事を知らず、言つてしまえば、そう言つた事を知つた初めての日だった。

刹那が人間と鳥族のハーフであること。

これが木乃香が初めて知つた、裏のこと。

それ以降は下手に教えることはせぬよう、色々考えたものだ。

ちなみに、木乃香が魔法関係の事を知っている、と言つ事を知っているのは、この麻帆良では俺と刹那、そしてジジイにタカミチの合計四人。

信頼できる者達（ジジイは除くが）のみだ。

「ついて来るのか？」

「あかん？」

「別に構わんが……」

短い会話をしながら階段を降りて、六階。

吹き抜けになつていて向こう側の廊下を見て、そして左右を見る。

見渡しながら、無人である事に若干ホツとしながらも、僅かに活気

があることが分かる。

それだけここに住む生徒たちが起きたと言う事だろう。

エレベーターを呼び、一階まで降りて、そして寮を出る。

行き先は女子中等部の学園長室。

その道中、木乃香が俺の腕を狙って何度かアプローチしてくるが、無難にかわしておく。

「いけずう」

「知らん」

そんな短い会話があったりなかったり。
それにしても、何と言うか……

「木乃香は地味だなー」

木乃香の姿を見て、そう呟かずには居られなかった。

「何気にヒドイこと言うんやね」

「いや、ヒドイと言うか、事実だろ？」

そう、事実。

似合うと言えば似合うのだが、それは俺の視点から出しかない。
傍から見れば、やはり地味な服装になるんじゃないだろうか？

木乃香の服装は、黒一色。

……ん？

「俺と同じ？」

「今更そこに気付くん？」

今更と申すか。

でもまあ、確かにそうだ。

木乃香の服装は黒一色。

真っ黒、という訳ではなく、上着には白いラインが三本入っていたり、膝上くらいまでの丈のスカートにも白のラインが入っている。

反対に、俺はと言うといつも通り黒一色の、本当に真っ黒な訳だが……。

「色を合わせる必要とかあるのか？」

ついそう聞くと

「特に無いなあ」

なんて返ってくる。

まあそれは別にいいんだが、もう少し可愛い服とかないんだろうか。

木乃香は昔の俺の影響か、好きな色が黒であるのは知っていたが、俺の様に常に黒のみと言った偏りは無かった。

服だって、小学校時代には普通……と言えいいのかは良く分からないが、他の子供たちと大して服装の違いはなかった。

今日が今日ゆえにか、事前に合わせたような感覚を覚える。

「今日は久々に兄いとデートやる？ だから、黒がええんやないかなーと思うて」

やっぱり意味があるんじゃないか。
ってそうじゃなく。

「誰が誰とデートをするのか、俺には分からないな」

久しぶりに再会する木乃香は、昔の木乃香とは違うらしい。

一昨日と昨日でも充分実感できる事があった。

そつ……「兄をからかうのはやめなさい」と言った時は、「妹で遊ぶのはやめなさい」と返されたり。

若干、理不尽な返しをされているような、そんな感じ。

その反面、刹那は少々真面目に成長し過ぎているかもしれないな。

そんな考えを他所に、女子中等部に到着する。

「失礼しまー」

そんな軽い声と共に、ボタン、と勢い良く扉を開ける。

「ふおつ。漸く来たわい」

「ああ、ちよつと厄介なものに付きまとわれてな」

「なにそれ？ ウチの事？」

そんなやりとり。

ちなみに、学園長室に居たのは俺に木乃香、ジジイの他は、タカミチと、顔合わせの時にも居た魔法先生。

……えつと、誰だっけ？

サングラスに髭の……略してグラヒゲとでも言った所だろうか？

グラヒゲってどっかで聞いたような気がしないでもない。

「木乃香が居ても大丈夫な話？」

「ふむ……。まあ大丈夫じゃろ」

そう言ったジジイに、もう少し孫を丁重に扱って欲しいと思うが、まあこの妖怪に何言っても仕方が無い。

孫、と言っても、自分自身はさておくが。

「実は東北の私立協会のついてなんじゃがな」

「いや、それは木乃香が居ちゃまずいだろうが」

協会関係……所謂魔法組織関係の事柄なら、大抵汚れ仕事の話だ。なら、木乃香がこの場に居てもいい訳が無い。

「大丈夫じゃよ。今回はの、そう言う仕事じゃないんじゃ」

それを聞いて、理解できた。

つまりは、汚れ仕事じゃないと言う事なんだろう。

となると、仕事と言うからには派遣か何かだろうか。

「とりあえず内容を聞こう」

「うむ。高畑君、頼むぞい」

ジジイが頷いてそう言うのと、タカミチが一步前に出て説明を始め出す。

「今回の依頼内容は、はっきり言うと、護衛だよ。」

仙台に本山を構える西洋系協会の協会長の娘さんを迎えに行つてほしいんだ。

その後はこの麻帆良で保護する心算だから、その辺りを理解しておいて欲しい」

簡単な内容説明を受けて、俺は首を傾げる。

「西洋系協会？　こことは別って事で良いのか？」

「そうなるね。本国直下の協会じゃないんだよ。協会長は日本人だけど、ルーツは西洋。」

その娘さんは何でも、珍しいものを扱うらしくて、色々いざこざがあるみたいなんだ」

タカミチの説明は、変に意味を含んだ説明だった。

……が、分からないわけでもない。

タカミチなりに木乃香が居る事に気を遣ってくれているのだが、それなら木乃香に外で待ってもらえばいいだけのことだろうに。

要するに、こことは異なる西洋魔術の協会があつて、その長の娘とやらが珍しいもの……つまり、知らない魔法を使える。

それを保護し、麻帆良に連れて帰ってこればいい……と言う事が。迎えに行く、と言ったのは、相手に娘をこちらに送る意思がある、と言う事だろうか。

その辺りはまた後日聞きに来るか、メールで情報でも送ってもらえばいい。

「バックアップはあるのか？」

「人手不足だからね……その辺りは何もできない」

視線を落としてタカミチが言った。

「……ジジイ。報酬は高くつくぞ」

「分かっておる。何も無ければそれでいいんじゃないが……」

「もういい。いつ行けばいいんだ？」

「11月の半ばからじゃ。今は向こうへ行っても無駄じゃろうからなあ」

……それって、何も無いわけがないんじゃないか？

どう考えても抗争か何かありそうな雰囲気が出まくってるだろうが。

「分かった。それまでは別にやる事もないんだよな？」

「うむ。あー、交通費ぐらいなら出せるぞい？」

……。

「帰るぞ、木乃香」

「んえ？」

話の意味が分からず若干呆け気味だった木乃香の手を引いて、学園長室を後にした。

これからは、少し忙しくなりそう……そんな雰囲気がある。

この世界に来てから、既に非日常に居たからこそ、その忙しくなりそうな雰囲気は歓迎できるものだった。

女子中等部に通うなんて事自分が非日常になっていくのだろうが、それはただの日常になっていつてしまう。

自分は、戦いを望んで、自分がこの世界に来た理由として、いつか来るであろう大きな戦いをただ待つのみ。

それまでは、このむず痒い日常に身を置いておこう。

……ああ、あのジジイに魔法を一発お見舞いするの忘れてたな。まあ木乃香も居たから仕方が無い。

「兄い、ちょっと付きおうてくれへん？」

「断る。大体、中間試験の対策はできてんのか？」

「む……」

とりあえず、女子中等部と女子寮の生活には、慣れそうにない。

第六話 『テスト勉強と手合わせ』

結局、学園長室からは一直線に帰ってきて、現在女子寮の自室。
今やるべきことは、いくつもある。

それは、この麻帆良の地で生活するにあたって、俺個人へ与えられた依頼や、その後に増えたもの。

- 1・麻帆良の守護。
- 2・木乃香の護衛。
- 3・3-Aの監視。
- 4・東北の西洋協会・協会長の娘の保護。

そして

「いや、そこはさっきの公式を当て嵌めて……」

「おゝ、なるほど。流石兄様やなあゝ」

週明けの月曜日に待つ、中間試験のテスト勉強だった。

「ねえ戒人、この英文なんだけどさ、ちょっとわかんないんだけど」

「あ？ 明日菜お前……それ以前に前の問題が間違ってるぞ」

「へっ？」

部屋に戻ってきた時には、刹那と明日菜がちょうど部屋の前に来ていた。

何をしにきたのか、と聞けば、木乃香の所在を聞いたかっただけのようだったのだが、成り行きで何故かテスト勉強をする羽目になってしまった。

「ねね、転校生クン、ちょっとこっち来て〜」

「……いい加減人の名前は覚える。つーか覚えてるのに敢えて呼ぶのは嫌がらせか!？」

最初こそ、木乃香に刹那、明日菜の三人だった。

「うつわっ……何このアクセサリーの数っ」

「朝倉テメエ、他人の部屋漁るなら出てけ!!」

何故か、時間が経つにつれて人が増え始めていた。

「まだアルカー？」

「いや、お前も少しは中間試験の準備しろよ。ちゃんと後で相手になってやるから」

「ふむ。なら拙者は大人しく待つとしよう」

「いや、待つとかじゃなくてな？」

簡単に言つと、朝九時ごろ、女子寮に帰ってきた。

刹那と明日菜が居ました。

何故か中間試験の話題が木乃香と明日菜の間から出て、勉強なら兄様が、と言う木乃香の発言で勉強会が開かれる事になりました。

必要なものを取りに、三人が部屋を出て行きました。戻ってきました。

何故か早乙女と綾瀬と宮崎がオマケでついてきました。

……行き成り増えてるじゃねえか。

その後、昼になるまで勉強会が続きました。
使っているロフトを見ました。
朝倉が居ました。

……。

昼食をとりました。

昼食は木乃香が適当に用意してくれたので、助かりました。
人数分揃えるのに苦労しただろうに。

昼が過ぎました。

ドアが蹴破られるような音を響かせて、侵入者が二名。
どう見ても武道派な二人が居ました。

古菲と長瀬でした。

そして、現在に至る。

そういえば、クラスではバカレンジャーと呼ばれる五人組が居るらしい。

そんな奴等の名前など覚えたくないが、そういう噂に関しては、どうしても耳に残って覚えてしまうのが哀しい所だろうか。

この部屋に、そのうちの四人が集まっていると言うのも、かなり哀しい所である。

黙々（？）と勉強会が進み、午後二時を過ぎた辺りになると、脱落者が出てきた。

木乃香や刹那は勉強が出来ない訳ではなく、成績も悪くない。

飲み込みも悪くなく、ひどい成績を残すことはまずないだろう。

逆を言えば、いい成績も残さないと言った所なのだが、中の上なら充分だと思う。

しかし、明日菜はそういうのはちよつと駄目のようで、特に英語に
関してはひどいものだった。

しっかりと教えていけば、飲み込みは悪くなく、次第にできるよう
にはなっているのだが……

集中力がない……とでも言えばいいのだろう。

兎に角、一番最初に脱落した。

「もうだめ……知恵熱がでる」

「……でねえよ」

「英語なんて必要ないわよ」

「かなりぶつちやけたな。確かに必要ないかもしれんが、できて損
は無いぞ？」

ちなみに自分は、日本語以外の言語は何十も使える。

無論、その殆どがこの世界には無い異界の言語ではあるが……。

兎も角、自分がまだ人間だった頃、アメリカに住んでいた事もあつ
た為、英語なら慣れたものだ。

この世界に来てからも、紛争などのある異国を見て回っていた為、
言葉はかなり重要なものだった。

まあそれはさておき。

次に脱落したのは、綾瀬だった。

綾瀬は脱落と言うよりも、やる気がないと言った方がいいのだろう。
多分、そこらの勉学などには、興味がでない。

興味があれば、すぐに覚えてしまうような、そんな雰囲気を出して
いた。

興味があり、必要があれば覚え、蓄積する。

それは誰しもが持っている才能だが、綾瀬はそんな感じが特に大き
く感じられた。

手元に持っている、美味しいのか分からないパックのジュースは、何

やら異様な臭いを漂わせているのだが、本当に飲み物なのだろうか……。

その後、三時が過ぎるまで勉強会は続き、流石に疲れたと言う事でお開きになる。

待ち受けているのは、先日約束をしていた、早乙女に刀を見せることと、古菲・長瀬の両名と手合わせすることの二つ。それはすぐに始められ、女子寮の裏手にある、開けた場所で行なわれた。

「昨日も言ったが、これは真剣だからな？」

そう言つて、俺は手に持った一本の日本刀を鞘から抜く。業物、と言つほどでもないが、それなりの一品だ。

「おおっっ」

やっと見られた、と言つた感じて声を漏らしたのは、やはり早乙女だった。

俺は俺で刀を軽く振り、久しぶりに持つこの刀の感触を身体で思い出す。

何年か使っていなかったが、手入れがされている。

誰かがやってきていたのだろう。

刀身は九十センチ弱、反りは四センチほど。

来電や風切を少し大きくした感じの、普通の刀。

分類としては大太刀（野太刀）近い刀身の長さがあるが、通常サイズの太刀と言える。

まあ、来電と風切はその刀身が六十センチほどしかない為、小太刀クラスの大きさでしかない。

「準備はいいか、刹那？」

「いつでも構いません」

そう聞くと、すぐに返事が返って来る。

俺はそれに頷き、刀を鞘に戻す。

鞘を左手に持ち、右手で柄を掴む。

抜刀術……と言えば格好がつくだろうか。

そこまで大したものじゃないが、雪村流剣術は抜刀術に長けた剣術であるがゆえ、“確実”を求めるのであれば、抜刀からの一撃が最も強い。

左脚を引き、腰を落とし、見据えるのは相対する刹那。

刹那の手には、父上から与えられた夕凧がある。

夕凧は素体刀と言うべき姿のままの刀だ。

鞘も柄も木製で、鐔などは付けられていない。

刀身は長く、そして折れてしまいそうなほどの細さを持った刀。

分類するなら、大太刀と言うべき長さだろう。

その夕凧のその切れ味は、まさに業物と言つに相応しい。

そこに神鳴流お得意の氣による強化が混じれば、すさまじい切れ味を持つ事だろう。

神鳴流の斬岩剣なんて、本当に必要なのか分からないくらいに。

言ってしまうば、俺が使うこのただの刀と刹那の夕凧では、刀としての格が違う。

そして、剣術としても、こちらは『異能刀』に頼っている節がある。

『異能刀』ゆえの、“異能の剣術”……。

無論、雪村流剣術の全てが使えない訳ではないが……。

俺も、相対する刹那も、己の刀を納刀した状態のまま、鞘と柄にそれぞれ手を添えながら……

ピリッと、空気が張り詰めた。

「始め」

木乃香の伸びた開始の声に、早乙女、綾瀬、宮崎、古菲、長瀬の五名を観客とした、真剣を扱う試合が始められた。

「シッ!」「ハッ!」

七メートルほどの距離が一瞬で縮まり、それぞれ刀を振り抜いた。刀と刀がぶつかり合った時、刀を握る右手に嫌な感触が走る。刹那もそれに気づいたのか、視線で合図を送ってきた。

「（氣を使っていないのですか？）」

合図と言うより、疑問か質問か。

そう取れた視線に答えるように、刀を氣で強化する。

初撃の居合いの後は、幾度と剣戟が響き渡った。

真剣であると言つのに互いに手は抜かず、それでも手を抜いた“戦い”。

刀を扱う者同士で行なわれる、剣術ではなく、純粹な剣技での“戦い”。

技術は均衡を保ち、どちらも引けを取らない。

「流石に強いな……」

そう呟くだけでも苦しい。

それだけ、刹那の剣技は上達していた。

最後に刹那と手合わせしたのは七年前のこと。
腕が上がっていて当然の時間が流れている。

「戒人様は変わらないようで」

「悪かったな……」

神鳴流の剣士と比べれば、いくら継承者とは言えその大半が我流である俺なんかじゃ、剣士相手には技は劣る。

それでもついていけるのは、素のままで強化された反射神経と身体能力ゆえ。

もしも俺がただの人間であれば、初撃の居合いで斬り捨てられていてもおかしくはなかった。

勿論、一般の視点から見えてしまえば、俺は充分な強さがあるように見えるだろう。

剣を扱うのも、槍を扱うのも、弓を扱うのも。

戦い、勝つ為に身につけた戦闘技術は、生半可なものではない。

だが、やはり本職には劣ってしまう。

「それでもッ」

刹那の一閃を紙一重で避け、身体を捻りながら最下段から真上へ一閃。

「っ　　！」

こちらの剣筋は確実に刹那を捉えたが、すぐに飛び退いた事でその一閃はかわされる。

勿論、避けてくれることを分かっていたの一撃だった。

「場数は、俺の方が多いさ」

口の端を歪めてそう言い、一時間に渡った試合は終わりを告げた。

「……へあ？」

一息ついて刀を鞘に収め、落ち着いたところで周囲を見渡すと、変な声が自分の口から漏れた。

情けないというよりは、アホらしいというに相応しい声。

だが、それよりも周囲の状況に思考が追いついていなかった。

刹那との七年ぶりになる手合わせと、刹那の強さに、目の前にある戦いにのみ思考が寄っていたらしい。

そう理解すると同時に、周囲から声が挙がった。

「……「おおおおおお……！！！！！！」」「」「」

いつの間にか、観客が増えて……いや、急増していたらしく、クラスメイトの顔が一角に集まり、他の生徒たちも集まっていた。

「なんというかつ、まじでっ、剣士ッ……って感じね!!」

一々言葉に力を入れながら言ったのは、刀を見たいと望んだ早乙女本人だった。

「あ、ああ……父上の実家が剣術道場だったからな……」

嘘は言っていないが、実際に父上……詠春に剣術を教わった事はない。

完全には追いついていない思考が出したその返答は、特別変な気を起こさせる事なく、早乙女はウンウンと頷いて理解してくれたようだった。

周囲から黄色い声があがり続けているが、それは俺と刹那に半々と言った所。

……うん。刹那はくれてやるから、俺にそんな声と視線を向けないでくれ。

しかし、問題は続く。

「腕が鳴るアルナッ!」

「ただの体術じゃ勝てる気はしないでござる」

言うまでもなく、武道派のお二方。

次は、彼女達とも手合わせをしなければならぬ。

「くーふえと楓さんとも勝負するんだよね? 当然見てつても構わないよね!？」

ガシッ、と両肩を掴まれ、若干ハアハアと息遣いが荒くなっている早乙女に気圧され、つい二度うなずいてしまう。

「よっしゃー！ー！！」

ガッツポーズと共に天を仰いだ早乙女は、忙しい奴だと思う。主に感情的に。

1600年生きているというのに、相変わらずこういう人物は苦手だ。

女、と言うだけでも僅かに苦手意識はあるから、結構困る。

特に積極的な、母上や木乃香のような人である場合は、本当に困る。こっちの意思など全く関係なく、事情も知ったこっちゃない。

麻帆良に母上が居ない事は救いだが、変に熱い早乙女が居たり、古菲や長瀬みたいな強者と戦ってみたいという感情を強く持つ武道派は困る。

「はぁ……じゃあ、長瀬からでいいか？」

「ム……。そう言うなら仕方ないアル」

先に選ばれなかった古菲が若干落ち込むが、いい気味だ、と言う事にしておく。

ギャラリーが増えたまま、第二戦として長瀬との試合が始められる。正直、変に有名になっているから、それ以上は変なレッテルを貼り付けないで欲しい。

けれどそれは願いであって、全てが願い通りに行くわけじゃない。実際、朝倉と言う人物が近くに居る所為で、朝倉に知られたことは全て女子中等部の生徒に知れ渡っていると思うてもいい。報道部とは、厄介なものである。

「一応、本気で行くでござるからな？」

長瀬は、いわゆる糸目のまま僅かに笑ってそう言った。

「一応、と言ったのは、体術では本気を出す……」と言う事なのだろう。俺も俺で覚悟をしながら、両腕を下ろして、僅かに腰を落とす。

「じゃー、始めや〜」

やはり軽すぎる木乃香の合図に若干ずつこけそうになる。

「ッ……！」

急に襲い掛かってきた影に反応して飛び退いた。

危なかった。

ただ頭の中にその言葉が走る。

たった一瞬気を抜いただけで、その隙に振られた拳が顎に命中する所だった。

“入り”や“抜き”などと言われる初動や硬直をほぼ完成形までもっていかれた、瞬動術

その歳で、ここまでの技術を、一体どうすれば身につけられるんだ？
何？ 最近の中学生ってそこまで恐ろしいモンなの？

などと、ついつい俺らしくもない軽い、しかし内容は重い疑問が脳裏を過ぎる。

「あ、危ねえな……」

……ぶっちゃけ、かなり焦った。
しかし、本当に恐ろしいものだ。
刹那の成長ぶりにも驚かされた所が多々あったが、この長瀬と言う少女……

と言うにはちよつと身長が高すぎるが……
いやまあ、実際に俺より身長は高いわけだし……
……兎に角、長瀬には本当に驚かされる。

氣を使った縮地法……確かこの世界じゃ瞬動術に纏められていたか。
縮地は縮地で歩法として存在しているが……いやいや、それはさておき。

氣を使った瞬動術は、本当に完成形に近かった。

ギャラリーのどよめきは、一般人の眼から見て瞬間移動したように見えた所為だろう。

……確かに、瞬間移動に近いものと言えば、そうかもしれないな。
本当に完成形となった瞬動術は、クイック・ムーブ極度に気配を隠す事ができる。

生きているのだから、完全に気配を絶つ事はできないが、それを補えるほどの完璧な“入り”と“抜き”。

本当に、恐ろしいものだ。

「今のを避けるとは、古の眼は確かでござるなあ」

飄々と感じられるのは、きっと長瀬の性格からなのだろうか。
しかし、油断はできない相手である事は分かった。
なら、俺も全力で相手をしなければならぬ。

「フウ……」

肺に溜めた空気を、ゆっくりと吐く。

驚きと焦りで揺れた自分を落ち着かせて、戦う事だけを意識する。
相手を殺さず、傷つける事無く勝利する。

それは難しい事で、相手より数倍勝った技術がなければ無理である。
う。

けれど、それを実行する。

真に戦う事だけを意識すれば、相手を傷つけずには居られない性分
だ。

だから、相手の事を考えて、全力で挑もう。

足に魔力を込めて、この世界の瞬動術とは異なる、俺の知る瞬動術
を使う。

この世界の瞬動術は、足に氣や魔力を込めて、一瞬だけ強化された
脚力で高速移動を可能とする技術。

対して俺の瞬動術は、足に氣や魔力を込めるまでは同じだが、それ
を爆発・拡散させて加速する技術。

「ぬ……！」

瞬時に長瀬の後方へ移動し、振り向き様に右腕を振るう。
狙いは首だったが、やはり避けられた。

反応した長瀬は避けると同時に足払いを出してくるが、それを敢えて気で強化して受け止める。

逃がさぬよう振るった右腕で長瀬の左腕を絡めとり、左拳を顔に向かって放つ。

周囲のギャラリーから悲鳴が聞こえる。

当たったと、そう思ったのだろう。

それで終わるなら、寸止めで決着がついただろう。

しかし、そう簡単には終わってくれない。

放った拳は開いている右手で受け止められていた。

その反応速度は、ただ武術を知るだけのような人物とは異なっていた。

無論、長瀬が武術の達人の様な技術を持っているかいないかは知らないが、動きからして単なる武術とは違う。

氣を明確に理解し、操っている。

まるで、この世界で言う、魔法関係者のような……

忍者。

不意に日本独自の文化に居たとされる者達の名称が思い浮かんだ。

まあ、言葉遣いが若干古臭く、「ござる」なんて語尾につけるくらいだ。

そんな感じなのかもしれない。

「甘いでござるよ？」

「甘いのはそつちだよ」

長瀬の言葉に間を置かずに左膝を突き出し、左拳が狙ったように顔を狙う。

流石にそれには反応しきれなかったのか、寸止めで試合は終わった。

そして、第三戦。

見た目……と言うよりは、口調通りと言うか、とりあえず中国武術……いわゆる中国拳法を扱う少女との試合。

古菲。

確か、十月下旬……俺が来る少し前に開かれたらしい格闘大会……ウルティマホラとか言ったか？

その優勝者だって言う話だ。

長瀬の体術は中々だったが、本当に体術や格闘術なら多分、古菲の方が上だろう。

だが、それだけならば気をつけて対処すれば問題はない。

「始め」

そう、思っていた。

「なっ……」

木乃香の開始の合図と共に、懷まで移動してきた古菲に驚愕した。

勿論ただの武道家だとは思っていなかった。

それが分かるくらいに構えは様になっていたし、様々な人々が集まる麻帆良には、言ってしまうえば科学の最先端技術や格闘技と言ったもののスペシャリストだって集まっている。

そう考えるだけでも、古菲はその格闘家や武道家が集まる格闘大会で優勝している。

表の世界だけで言うなら、本当に達人の域。

「ちっ……」

古菲の攻撃を防ぎ、止め、流し……。

途中に入る様々なフェイントは、いかにも中国拳法らしさを漂わせる。

初動は、活歩だったはず。

確か、太極拳。ただの、武術。

勿論武術は対人で使われるもので、戦闘には最適ではあるけれど……

早すぎる。

そう思った瞬間、人間だった頃の自分を思い出してしまっ

あの頃の自分は、本当にただの人間だった。

家柄は普通とは言えない大富豪で、出来損ないの愚息だった自分。認めない父親に自分を認めさせようと、勉学も運動も一から頑張った。

もう1600年以上も前の、そんな古い記憶。

そして、まだ何も、“力”と言うものを知らなかった頃の記憶。

あのころは、なにもできなかった。ヒトだった自分には……

「……強いな」

「楓がやられたカラネ。油断はしないアルヨ？」

どうやらつい呟いた言葉が聞こえてしまったようだ。

その間にも拳や肘が繰り出され、特有の動きでフェイントを多くかけてきながらも着実にヒットを狙ってくる。

常に防戦一方。

そう言ってもいいぐらいに押されているが、全てを捌ききっているのは、人間の頃にはなかった反射神経と動体視力の賜物。

きつとこの古菲と言う少女は、自覚こそはしていないが、氣を操れている。

……いや、違うか。

こつという世界では大抵、“氣”と言うのは古代中国の発祥だ。

それに通じる鍛練はいくらでもあるし、現に戦っている感想としては、ただ太極拳ばかりが古菲の扱う武術じゃ無い事は良く分かる。

それに中国発祥の武術は有名なものでも400種類以上なんて言われる位だ。

対人戦闘技術は豊富であつて当然。

武術を極めようなんて考えを持った奴はひとつの武術には拘らないのが多いしな。

自覚と無自覚の境界線、とでも言うべきか。

「まあ、“粹”を考えれば最強の部類か」

「ム……意外と余裕っぽいアルネ」

俺の言葉に、俺が余裕そうに見えてしまったようだ。

正直、戦い辛い上に若干の焦りもある。更に言えば観衆の目もある所為で、下手には動けない。

強化こそしているが、それだけの所為で余裕なんか全く以て無いに等しい。

実戦経験は人間だった最後の一年からこの1600年の間、ずっと積んできている為、そう簡単に負けるとは思っていない。

……事実、俺が攻勢に入れば、現状は大きく変わる。

古菲の右肘が狙う腹を犠牲に、俺は俺で掌底を繰り出す。

全身を上手く使い、犠牲となる腹は強化を集中させ、それ以外を全て右手に。

「又ッ!？」

瞬間的に古菲の顔色が変化した。

俺の意図が分かったのか、すぐに距離を取ろうとしたのが分かったが、最早止まれる状況じゃない。

そして

両者の攻撃は、寸止めたかのように止まった。

いや、実際には俺だけが命中する前に右手を止め、古菲の肘は氣で受けきった。

直撃はどちらもなく、ギャラリーは一体何が起こったのか分からない様子だ。

その中に居る刹那や長瀬は分かっているようだったが。

「これは一本取られたアル」

「それはどーも」

互いに離れると、古菲の言葉を褒め言葉と受け取っておく。

勝ったのは、俺。

直撃を完全に逸らした上、こちらは止めなければ確実に古菲の胸に当たっていた。

それが分かっていたからこそその古菲の言葉だった。

「けど、アレは実戦じゃ使えないアルナ」

「分かってるよ。手合わせだからやったんだろうが」

「それもそうネ」

最後の一撃に、若干不満があるようだ。

こっちの最初で最後の一撃が決め手にはなったが、確かにあれは戴けない。

捨て身、なんてのは、命を捨てている。

強化に使う氣の半分ほどを腹に込めて完全に逸らす事ができたとは言え、本当に古菲が本気だったなら、あんな氣の防壁は破られていただろうし。

「とりあえず、お疲れ」

「ウム。またお願いするアル」

えー……。

「どうか勘弁してください」

頭を下げる他、何も無かった。

ギャラリーは、まあ放置しておくでしょう。

第七話 『テストなんてなかった』

翌日……と言っても、もう空は暗くなり、月が出ている。

今日は一日色々と面倒な事ばかりが押し寄せてきて疲れた。

昨日の勉強会や手合わせがあった所為で、クラスメイトには勉強を教えてくれる親切な人として、ここの寮生たちからは何か凄く強い人として、若干おかしな状態で有名になりつつあった。

ただでさえ、女子校に編入した男子生徒として麻帆良のどこを歩いても興味の視線を向けられるというのに、この寮内では一層、拍車がかかってしまったようだった。

もう少し場所を選ぶべきだっただろうか。

「……………」

今はただ、無言で夜空を見上げるだけ。

頭の中じゃ、色々面倒な事になっていて、後悔やらこれからの事やらを考えている。

でも夜の中の自分は、いつもと比べて冷静さを保っていられた。自分らしい、自分らしさを保っていられた。

俺は、夜が好きだ。

それは勿論、黒色が好きだという理由もあるし、夜は深ければ深いほど闇が増す。

音も無く、光も無く、ただ月と星の明かりに照らされるだけの闇。

「牢獄の世界では、俺なんかを『月の様な存在』って言ってくれた

奴が居たな……」

不意に思い出して、そう呟いてみる。

この世界に落ちる前に居た世界。

その世界では、人々が生きる日常は、常に危ういものだった。

いつ死んでもおかしくない……とでも言えはいいのだろう。

戦争や賊の被害にいつあってもおかしくない世界だった。

それぞれの勢力が自身の信念に従って戦を起こし、その度に幾千幾万の命は絶えていった。

俺は、そんな世界に三百年ほど、囚われ続けた。

最初は二年間の時を経て結末を迎え、いつもの様にその世界から去った。

けれど、目覚めればそこは、見覚えのある風景が広がっていて。

物語の序章が始まる前の時間、全く同じだけど、似て非なる世界。

二度目の物語は始まり、再び戦いに身を投じていく。

味方だった者が敵となり、敵だった者が味方となり……

それを幾度と繰り返しただろう。

数年から十数年の周期で世界の物語は結末を迎えて、それを繰り返す事三百年余り。

その牢獄の世界で、最初の物語。

常に側に居続けてくれた“アイツ”は、俺を『月の様な存在』だと言った。

そして、それを支え、同じ様に地を照らす星になりたいと、言ってくれた。

俺を『太陽の様な存在』だと言ったやつも居たっけ。

「……でも」

俺は、月でも太陽でもない。
もしも『一日』と言う枠で例えるならば、俺は夜の闇そのものだった。

全てを覆う、夜の闇。

光など、そこにはなく。

先も見えない闇が広がる、暗い暗い夜の闇。
ただ光を嫌う様に、闇を下ろすだけの存在。

「ま、その闇にすら、嫌われたけどな」

そう言つて、自嘲気味に笑う。

光にも闇にもなれなかった。

俺には、なにもなかった。

ただのからっぽ。

「俺の手は、こんなにも汚れているのに」

右の掌を月の明かりに翳して、幾万幾億では数え切れないほどの命の血を吸った、その手を見る。

俺は今まで、どれほどの者の命を奪ってきただろうか。

百までは数えた。それから、数える事をやめてしまった。

それはもう、1600年以上も前の事。

まだ人間で、異世界など知らず、ただ迫り来る脅威から大切な人達を守る為に戦っていた時のことで。

たった一年と言う間の戦いの中でも、何千と言う命を奪った様に思う。

ある世界では、世界を救う為に幾万と言う命を絶った。
けれど、それで英雄視されて、喜べるほどの自分は居なかった。

ある世界では、世界の崩壊を齎してしまい、そこに住まう者達を異世界へ逃がす為に力を尽くした。
けれど、救えなかった者達の方が多く、結果的に何千万と言う命を殺した事に変わりはない。

ある世界では、絶望した世界を滅ぼし、何十億と言う命が住まう世界を滅ぼした。
愛してしまった少女を救う為に奔走し、けれど救うことは叶わず、初めて自らの意思で世界を滅ぼした。

ただの殺人狂、殺人鬼。

……そう、言われてしまっても仕方が無い。

本当は誰も殺したくなかった。
こんな運命を背負わせた奴だって。
俺を殺そうとした奴だって。
誰一人、殺したくはなかった。

それは甘い考えで、綺麗事で、ふざけた思考だ。
殺すしかなかった。

殺さなければ、殺される。
殺すことで、救える者が居た。
殺さなければ、全てが終わっていた。

俺は酷く、いびつに、歪んでいるだろう。
最早人間などではなく、ヒトの心さえもそこにはない。

何者にもなれない、ただの成り損ないの存在。

それが、『異形』と呼ばれる者達なのだから。

「……………こんな事を考えるのも、何時ぶりの事だろうな」

感情を模造し、心さえも模造した。

からっぽの器に、四人の自分を作り上げることで、俺は“俺”と言う理性を保っている。

放漫な自分。

冷静な自分。

残虐な自分。

空ろな自分。

四つの側面を作ること、 “俺” は簡単には壊れない、“俺” を作り上げた。

俺の唯一の弱点と言えば、そこだと理解していたから。精神の、心の脆さ。

その側面たちは必要な時に使って、本当の“俺” と言うのを押し込めて。

そうすると、今の“自分” は、どの性格の“自分” なのだろう？ それを全部併せて、四で割ったような“自分” ？

「意味が分からんな」

馬鹿な考えを一掃し、ただ寮の屋上で佇むだけ。

明日からは中間試験らしいが、俺には関係ない。

11月に予定されている、依頼の完遂を目的としなければいけない。

まだ時間の猶予はある。

それまでに、俺は可能な限り、力を取り戻さなくては。

依頼内容の詳細が未だに不明な依頼だ。

バックアップもない。

当面の目的はそれと固定して、準備をしなくてはいけない。

その翌日。

月曜日は、中間試験の初日。

バカレンジャーと呼ばれている五人（明日菜、綾瀬、古菲、長瀬、佐々木）は、それなりには出来るようになったと思う。

日曜日はクラスメイトの殆どが勉強会と称して部屋に集まったものだから、たまったものではない。

が、まあ戦う為の準備をしている時よりは、模造品の心は安らぐものだ。

「……………これと、これ……………後は……………」

各種装備を召喚したり、召喚状態で固定した装備などを確認して、長い間使っていなかったものは身につけて身体に馴染ませる。

服装はいつもの刻印術式でマジックコーティングを施した黒のロングコート。

シャツもジーンズも同じで、いつもと違う所と言えば、アクセサリ

「類。」

その全てが、魔法具マジックアイテムなどの類のもの。

身につければ重く感じたり邪魔に感じたりするが、それは仕方の無い事。

今の俺は、14歳頃の肉体。それがネックとなっている。

この身体で全盛期と比べて四割程度の出力しかない。

多分、この“世界”と言う枠に収める為に、世界の制約がかけられているのだろう。

制約がなければこの状態で八割ほどが解放されるはず。

その半分と言うのだから、以前の牢獄の世界と比べれば十分に制約は緩い方だ。

「今は、これで充分か……」

手を見ればその全ての指にリングが嵌っていて、一本の指にひとつだけが嵌っているわけではない。

ブレスレットに関しては右腕に二つ、左腕に三つ。

ピアスに、ネックレスに、アンクレットに……

服にも、ブローチの類やチェーン……アクセサリーではないが、ベルトまで、全てが何かしらの力を持った装備。

魔力増幅器ブースターだったり、術式演算補助器だったり、神格の高い存在からの加護を賜っているものだったりと、様々。

それらを全て身に付けて、馴染ませる。

まあ、殆どが服の内側だったり殆ど見えない様に隠しているが、ジャラジャラとうるさかったりする。

けれど、そこまでしなければ、俺は弱い。

もしも精霊召喚などができれば、戦力としてはかなり変わるのだが……

「この世界の精霊じゃ役不足だしな……」

そう、この世界の精霊は全体的な能力が低い。

高い能力を擁した精霊も居るには居るそうだが、現界するには少々難がある。

この世界の魔法体系は、その殆どが精霊使役による魔法である事は、この世界で生活を始めて分かったことだ。

そして、精霊召喚に関しても、あまり高い階位の精霊を召喚するところがない。

サギタ・マギカ

《魔法の射手》は精霊使役の中でも代表的な、精霊を矢として射る魔法だし、魔法によつては上位精霊を召喚すると言うものもある。実際に、中位精霊を召喚して使役するなどの召喚系の魔法などもあるくらいだ。

だが、それでは足りない。

この世界では、下位、中位、上位と精霊は区別されている。

精霊の呼称も異なっていたりしているし、精霊に関しての見解や知識も違う。

電子精霊は別としておくが、兎に角、俺とは全く異なる視点から精霊を見ている事は確かだ。

もしも戦力を補うのならば、異界の精霊を召喚すればいいだけのこと。

だが、それは余りにも危険だ。

俺はこの世界での立ち位置は微妙な位置にある。

異様な剣を扱う剣士であり、不明な魔法を扱う魔法使い。
ゆえに様々な異名があつて、その代表的なのは『魔導師^{グル}』だった。

無論、今の状態でも異界から精霊を召喚する事も可能だ。

それ以前に物体を依代として常に行動を共にしている異界の精霊を
現界させるだけでもいい。

だが、もしそれが外部に知られれば、俺は禁忌に触れたお尋ね者か
なにかのレッテルを貼られて、追われる立場になりかねない。

この世界の魔法社会と言うのは、そついうもの。

危険と感じられたものは、追われる立場になる。

吸血鬼……特に真祖と言われる『闇の福音^{ダークエヴァンジェル}』の様に、基本的に追わ
れる立場だ。

まあ、一言で言えば、過ぎた力は排除される、と言う事。

今の俺の立場は東西の仲介人となっているが、言つてしまえば父上
やジジイが仕掛けた抑止力のようなもの。

下手に動けば、息子や孫とは言え東西から追われる立場になる。
それはよろしくない。

情報を得たり、力ある組織の許可あつてこそその自由があつたり、色
々の利点はある。

勿論、それに併せて多くの足枷がついている事には変わらないが……

ふと時計に目を向ける。

時刻は、六時。

「……とりあえず、サボるか」

思い立ったが吉日かはさておき、中間試験はばつくれることにしよう。

数日寮を空けるとして、何処へ行つたものかな……。

……

……

……

「で？」

「で？、とは何だ、で？、とは」

俺は何故か、ログハウスに居て、目の前の少女……基、年齢詐欺師とご対面していた。

「……誰が年齢詐欺師だつて？」

「勝手に心を読むなよ……」

飛んできた人形をキャッチしながら、言葉を返す。

「まあとりあえず、だ……。俺に何か用？」

そう聞いておいて、僅かばかりの回想を挟むとしよう。

俺は早朝、寮生たちが起きて登校する準備をし出す前に寮を抜け出した。

行く当てもないため、ぶらぶらとしていた。

まあだからと言って適当にぶらついてるのは面白くない。

それ以前にぶらついて何が面白いのかと問われると答えに困るが、それはさておき。

女子寮から充分に離れ、女子校エリアからそろそろ出る辺りで、大きな森があり、其処に足を踏み入れた。

近くに森があるのは知っていたが、意外と広い。

麻帆良学園はかなりでかい学術機関の集合体ではあるが、その実、自然などは意外と残っていたりする。

周囲の森も麻帆良学園の敷地となっていて、外部からは手が加えられない。

まあ兎に角森を見て歩いていた最中に、意外なものを見つけた。

無論、それは意外なものではない。

麻帆良は霊地としての格が高く、それを狙う外部の魔法組織などは居るし、魔物なども存在している。

麻帆良の魔法関係者は麻帆良を守ることを義務付けられているし、俺もそのひとりだ。

俺は実際に出動したこともなければ、他の関係者の様に麻帆良や其処に住まう生徒たちなどの住人の守護だけを任としている訳ではない。

だが、麻帆良でそれを見るのは初めてだった。

簡単な話、魔法などによる戦闘の残痕だ。
異様な氣が感じられることから、つい最近麻帆良に進入した魔物の類との残痕だろう。

周囲に対して大きな残痕が無い事から、あまり大きな戦闘ではないのが見受けられた。

そしてその時に感じた魔力の残滓は、僅かに甘い香りが残る。

それは以前にも匂った、血の匂い。

ここで戦っていたのはマクダウエルだろう。

そんなことに思考を張り巡らせていたら、変わった気配を感じ取った。

後ろを振り返ってみれば、そこには
絡繰茶々丸と言う、あの
どう見ても機械です的存在が……。

で、何故か今に至ると言うわけだ。

「いやなに、茶々丸からお前を見つけたと言う事を聞いて、少しばかりお前の事を知りたくなっただけ」

素晴らしいくらいに、唐突でした。

「俺のことを知ってどうするつもりなんだかな」

「とりあえず聞きたいことはひとつだ」

何も聞いちゃいねえ。

「あの妖怪ジジイに集められて顔合わせをしただろう。」

あの時何故貴様は私の事に気付かず、吸血鬼だと分かった？」

しかもそこからか。

「それは教室で言っただろ。“血の甘い匂い”がしたってな」

「その匂いはどうやって判別した」

「簡単なことだ。俺が吸血鬼と言う存在を体内に取り込んだからだ」

「……なに？」

俺が答えた瞬間、意味不明だと言わんばかりの表情でマクダウエルが固まった。

「俺は過去、吸血鬼の姉妹と行動を共にしていた事があった。

その姉妹の妹の方が、吸血鬼特有の禁断症状を発症させ、暴走を止める時、半殺しにして無理矢理止めたんだ」

それは、二つ目の世界。

二度目に行った異世界での事。

最早それも、1600年ほどの時を遡らなければならないほど遠い過去の事だ。

様々な種族が住まうその世界では、人間の他には多くの獣人や妖怪の類、エルフや吸血鬼、半魔族などが多く生きていた。

そしてその世界で最初に出会ったのが、吸血鬼の姉妹だった。

その世界の吸血鬼は個体数が少なく、そして同時に、人間や獣人などに追われる立場にあった。

この世界と同様に、吸血鬼たちは危険視され、迫害を受けていた。それに対するように吸血鬼は人間や獣人たちに報復をし、人間と獣人の連合と、吸血鬼の戦いがあった。

俺が初めてその吸血鬼の姉妹に会ったのは、彼女たちが行なった使い魔の召喚に引き寄せられ、世界間移動の際に招かれた為だった。

けれど、この世界の吸血鬼は、人造種と言ってもいい存在。
あの世界の吸血鬼は、吸血種の人型として元から存在していた種族だった。

だから、僅かにこの世界の吸血鬼とあの世界の吸血鬼では種として違いが存在する。

ただこれと言って、今日の前に居るマクダウエルのような吸血鬼の事を良く知らない為、この世界の吸血鬼とやらがどんな存在かは不明。

しかし、あの世界の吸血鬼は、血を吸わなければ生きられない種族だった。

可能なら、生命力溢れる人間や獣人と言った種の血が好ましい。

ゆえに吸血鬼は、支配する側の存在だった。

領主の様な形で人々を支配し、統治する種族。

それがあの世界での吸血鬼。

俺が出会った彼女たちは、両親を殺され、追われていた身。

未熟だった彼女たちは自らを守る為に使い魔の召喚を行い、そこに俺が引き寄せられ、彼女たちに出会った。

「俺は吸血鬼の姉妹と共に行動し、彼女たちの敵を全て殺した。

勿論、殺さなければ彼女たちが殺されると分かっていたのこと。

人々の血を吸わない代わりに、動物などの血を吸って生き永らえていた」

けれど、それには限界があった。

どれほど動物の血を吸ったところで、得られる生命力は微量。

竜族の血を吸っても純粋な生命力の溢れる人間には及ばず、個体数の少ない竜族を手にかけることも抵抗があった。

「そしてある時、ついに姉妹の妹のほうは禁断症状……いわゆる暴

走を起こし、自滅しかけた。

俺はその時、彼女をまるで殺すように、腕を跳ね飛ばし、足を千切りとり、

人間であつたら死は免れないほどの重傷を与えて暴走を止めた。

けれどそれで全てが治まる訳ではない。

姉妹の姉から止められていた、血の契約を行ない、俺は血を与え、妹の血を代わりに与えられた」

そう、俺はその時、吸血鬼となった。

勿論、半吸血鬼として。

俺は初めて、人間と言う枠から外れた。

「けどまあ、俺に流れる血は特殊だな。

吸血鬼の血に侵食されて吸血鬼化はしたけど、それを完全に取り込んでしまったのさ」

話の九割以上をはしょって、軽く説明してやる。

「意味が分からんわ！」

そういわれるのも已む無しで、ついでに飛んできた人形はキャッチして隣に並べておく事にする。

俺が、旧世界と呼ばれるこちら側と、魔法世界と呼ばれるあちら側とは違う、完全に外側から来た存在と言うのは可能な限り秘匿しておく必要がある。

だからこそ、あまり深くは言わない。何も伝えない。

ただ起きた事を話すだけ。

「俺の身体には、人間として、そして吸血鬼としての“存在”が混濁しているんだよ」

言うなれば、最早その時点で、人間でもなければ、吸血鬼でもない。どちらにも成り切れなかった。ただそれだけのことだ。

「……牙はあるのか？」

不意の質問だった。

「今はない。マクダウエルだってそうだろう？」

「それはそうだが……」

俺の言った事にマクダウエルは苦々しく答える。

マクダウエルはこの麻帆良の地に封印され、結界で魔力の大半が封印状態にあるらしい。

だからこそ、この世界の吸血鬼特有の強大な魔力は感じられない。

「機会があれば、俺が吸血鬼だった証拠を見せてやるよ」

ただ今は、そう言っておく事にしよう。

俺は俺で在ることだけは、変わらない。

たとえ本当の自分が見えなくなっていたとしても、俺は“今”ここに居る。

「そうか。その機会とやらを待つとするよ」

そう言ったマクダウエルに少し呆気にとられたが、まあそれで良しとしてくれたなら、俺としては助かる。

「それで、だ。貴様はどれだけ生きている？」

急に変わった質問。

「……そう、その眼だ。その眼はたかが14年生きた程度でその眼は作れん」

そう言われて、目に力が入っていた事を悟る。

「顔合わせの時、貴様は一度だけその眼をして全員を見渡したな？」

こいつの観察眼は並じゃない、と思った。

勿論、相手が吸血鬼だと言うことは分かっているし、最高額の賞金首なのも知っている。

まあ吸血鬼だと知ったのは顔合わせの時だし、そいつが『闇の福音』だって事を知ったのは後のことだが……

観察眼に、長い時間を生きた経験則もあるんだろう。

「マクダウエル。お前の真意は何処にある？」

口を開いた時、俺はそう聞いていた。

「なに、単純なことだ。私はお前が知りたいだけだ」

……。

聞き取り方によっちゃ変な意味に聞こえます。

いや、そんな事はどうだっていい。

「何故？」

「この生活には飽きてな」

……。

まあ、十数年もここに閉じ込められてちゃ飽きるわな。
だが、それとこれとじゃ話は全く異なる。

「お前に教えるほどの人生は歩んじやいないよ。俺は近衛詠春の息子。ただそれだけだ」

それを聞いたマクダウエルは、ふん、と鼻を鳴らす。

「養子、だろ？ それ以前の事は全く不明だとジジイから聞いているが？」

あのジジイ、余計な事を……。

「なあ、『魔導師^{グル}』よ。貴様の過去には何が隠されている？」

そう言うマクダウエルの後ろで、話が始まる前からずっと待機している絡繰が若干オロオロしている。

一応機械なのだから、人工知能……なのか？

ソッチ方面の知識もあるにはあるが、アンドロイドとか人工知能とかそう言うのは専門ではない為、良く分からない。

専門と言うほどではないが、知識があるのは二足歩行型対人戦略兵器……いわゆる、搭乗型の戦闘兵器の方。

うん、そんな世界もあったな。

いや、そんなことはどうでもよくて。

「俺の過去を知ったところで、何の得がある？」

「ただ私の知識欲が満たされるだけだ。それ以外のなにがある？」

まあ、そうですね。

「ただそんな理由で、俺が過去を話すと？」

「無論、タダでは言わんさ」

「報酬があれば俺が動く？」

「普通の報酬じゃ貴様は動かんだろう？　だから、私は普通とは違う報酬を用意した」

……コイツ、本当にどこまで知ってやがるんだ。

確かに、俺は普通の報酬じゃ動く気はない。

例えそれが恩のある相手……父上だったとしても、それは例外ではない。

報酬と言えば、大抵は金だ。

だが、それで動く俺ではない。

俺が報酬として望むもの。

それは情報や、魔法書、魔法具などと多くあげられる。

基本的には魔法関係。

無論、金銭も受け取るが、それはあくまでオマケのようなもの。

だからと言って、そこらにあるようなモノを報酬として受け取るわけじゃない。

例えば魔法書や魔法具なら曰くつきのものであったり、希少価値の高いものを。

情報なら機密情報などの深い位置に存在する情報。

この世界に来て得たものの中で、俺に一番利があつた報酬と言えば、単なる旅行として立ち寄ったフランスで受けた依頼で、報酬として受け取った様々な言語の文字で記されている古びた一冊の書物だった。

魔力を内包した、真正正銘の、『魔導書』。

約八割以上が未知の文字で記されていて、内容は言うまでもなく、『魔導書』と言うに相応しいものだ。

それは俺の異名として知られるようになった、『魔導師^{グル}』にも由来するが、そんな事はさておき。

ある意味、俺は一種のコレクターのようなものなんだと思う。

知らぬものを集め、そしてそれを自分で扱い、“知り”、複製する。無論、全てを複製するわけではない。それは魔法具に限ったこと。魔法書などの類であれば、俺は来電などと同じ様に保管する。

本来ならば、魔法などあっていいようなものではない。

傷を癒すことはできる。病も癒す事ができるだろう。

だが、魔法は助ける為だけに存在するものではない。

癒す事よりも、殺す事の方が容易だからだ。

勿論、魔法のみに限ったことではないし、その為に“法”と言うものが存在している。

いや、また話が逸れ始めてるよ。

兎に角、俺は俺が欲しいと思ったモノを得る。

金が必要ない訳ではない。

あつて困るものでもないが、無駄にあつても俺には必要ななんて無い。だから、金など要らない。最低限の金銭があれば生活には困らない。食事だって、俺にはそこまで重要なことではない。

けれど、それを知っているのは、ごく一部に限られる。

基本的には、仕事の依頼を受けたときの依頼先のみだ。

噂で「魔導師は金以外を要求する」なんてのも流れているから、ある程度知っている奴はいる。

それでも深い部分では、俺が何を求めているのかを知っているのは少ない。

そして今、マクダウエルが要求するものは、俺の過去。それを知っているのは、たった四人だけ。

父上と母上、そしてジジイとタカミチだけだ。

俺はそれほど、過去を隠したがつているんだろう。

隠したがっていると言っただけではないが、知らなくて良いものと言っただけは、世の中にたくさんあるのだから。

「俺の過去を要求して、お前に何が出せるといつんだ？」

結局は、そこ。

俺の過去話をする事を依頼とするなら、その報集は一体何なのだ？
勿論、たとえ魔法関係の貴重品であっても、容易く教えるつもりはない。

そのはずだった。

答えるように提示された報酬に、俺はつい飛びついてしまった。
欲が出たと言え、ある意味“ヒト”らしい反応だったかもしれない。

「よし、依頼は受ける」

その言葉に、俺は二度目のマクダウエルの呆気に取られたような表情を見た。

「……いや、意外とあっさりだったな」

ぐつの音もないです。でも、それだけ俺には魅力的な報酬なんです。

「……いやまあ、俺にも色々あってな……」

俺にはそれしか答えることはできなかった。

だが、機会というのはきつと、現在を指していた。

今でこそ近衛戒人と名乗る俺と、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルと言う吸血鬼の出会い。

実際に顔を合わせるのは三度目だったが、三度目にして互いを知る。

「俺にも困ったものだな」

ヒトの過去を知りたがるのは、俺も変わらない。
特にそう。

永く生きていれば生きている者ほど、その者の記憶を見たいと思う。

永い時間は、それだけの物語を描いてきている。

それが例え、俺の記憶の様な、血に塗れた時間が続くうとも

第八話 『ダイオラマ魔法球』

マクダウェルから提示された報酬は、ダイオラマ魔法球と言う魔法具だった。

魔法具とは道具を指すものなのだから、このダイオラマ魔法球はどこちらかと言うと、家具の様なものだろうか。

ダイオラマ魔法球とは、時間と空間の制御をして、容器（基本的には瓶など）の内部に異空間を造り出す超高等技術の結集である魔法具だ。

上位にはスクロール型のものがあり、通常のダイオラマ魔法球とは比べ物にならないほどに高価な物。

無論、ダイオラマ魔法球自体がかなり高価な品ではある。

魔法世界の方で製造される希少価値の高い魔法具で、旧世界であるこちら側では滅多に手に入るものではない。

まあ、要するにレア物だ。

かといって、希少価値があるから、欲しいという訳ではない。

希少価値、と言うだけで何かを求めるほど貪欲ではないつもりだ。

明確な理由はある。

勿論、その理由が貪欲であると言うのなら、俺は貪欲なのかもしれないが。

ひとつ、俺には使用不可能なジャンルが製作工程で最も重要な位置にあること。

ひとつ、ダイオラマ魔法球には外部の風景を取り込んだり、内部の

風景を作り出すことで空間内での創造が可能である事。

ひとつ、そこでしか見られないものを俺は望んでいるということ。

以上の三つの理由があった。

最初の使用不可能なジャンルが製作工程にあるというのは、魔法具の製作に関してはそれなりの知識がある上、特別な魔法具ではない限りはほぼ完全に複製が可能だからだ。

だが、俺にはこれまで生きてきて、自分には不可能であるものが二つある。

無論、探せば色々なものが自分にはできないだろうが、特に挙げられるのがこれから言う二つ。

まずは治療系の術。

治療系の術はある程度使えるが、上位のものとなると俺に使う事は出来なかった。

治癒速度の速さがあつたし、使うことも少なかった為で、さらに元を言えば治療系統の術に対して適性がすこぶる悪かった。

その三拍子のお陰で、ある程度の傷なら治せるものの、深すぎる傷を治すまでには至らず、上位の治療系の術は発動すらしない。

これに関しては今回こそ関係ないものの、意外と大きい問題ではある。

二つ目が今回挙げた理由のひとつ。

それが、時間系統の術だ。

世界が生まれし時から刻まれる時間と、与えられた空間……二つの要素は、俺にとって不安定なものだった。

時間操作などの術は全く使えないのに対し、空間系に関しては術式などで考えると天と地の差と言った所だろう。

最上位の技術になる時間跳躍など俺にはまず不可能だし、もしも科学などの結晶として生み出された時間跳躍を可能としたもの……所

謂タイムマシンがあつたとしても、決して俺は使う事ができないだろう。

とは言つても、過去に二度だけ時間跳躍を行った事がある。それはタイムマシンで、自分ではない他者が発動させたものだった上に、その時の俺は限りなく人間に近い存在だった。

だが、今となつては時間操作などと言うものは全く以て扱えない。もしかすると、他者が起こした時間操作だとしても、俺は受け付けないだろう。

これが大きな理由だ。

ダイオラマ魔法球の製作法は知らないが、どのみち時間操作の術式が確実に必要となる。

内部での時間を引き延ばすことでやつと意味があるのだから、俺に造れたとしても外部と内部の時間の流れは全く同じになるだろう。

対して空間系統の術は術の中でも一番にお得意な手だが、空間と空間を繋げることを可能とする術式に関しては、世界移動にのみ適応するといっておく。

つまりは、ひとつの“世界”に空間の亀裂を入れることが出来るのはたったひとつに限られる、と言う事。

二個同時に開こうとすると、術式が反転して機能しなくなってしまう。

ゆえに、時間設定されたダイオラマ魔法球が欲しいのだ。

そして、ダイオラマ魔法球の内部では好きな風景を作り出せる事にも理由がある。

三つ目の理由と重なるが、俺はかつてこの目で見て、記憶してきた世界の風景を再現させたい。

かつて俺が行った事のある世界には、無数と点在する世界の中のひとつと言う確率しかないのだ。

無論、俺は故郷の世界に帰ることは出来るし、何もない完全に人工的に造られた世界の二つに行く事ができる。

けれど、それはその二つの世界でのみだ。
無数の中で望む世界へいけるかは別であり、いつどんな世界に行くのかさえも分からない。

だからこそ、俺がこの目で見てきた世界の風景を再現してみたいと思っていた。

もしかするともう二度と見られないであろうかつての世界。
記憶で思い返すことは出来る。

だが、この目で見て、手で触れ、感じる事ができるだろうか。
だから、俺はそこで過去に見た風景を再現させたかった。

「絡繰茶々丸。お前は、もう一度見てみたいと思った風景はあるか？」

マクダウエルが退席中である中、ずっと待機したままのクラスメイトに話しかける。

「もう一度見てみたいと思った風景ですか？」

聞き返してきた絡繰に俺は頷く。

「……………」

しばしの沈黙。

「マスターの笑っている風景、ですかね」

なんと云うチョイス。

「ははっ……………人工知能でも積んでいるのか？」

専門的な知識はないが、ある程度の知識はある。

「はい。私は科学と魔法を融合させて造られた、ガイノイドです」

そうか、と俺は頷く。

絡繰茶々丸の第一印象は、本当に“ロボ”と言っただけの感想だったが、僅かに変化した表情ですぐに分かった。

今ではこの絡繰茶々丸を、俺は魔力で動く自動人形である、と言う事を理解した。

日本の信仰に付喪神と言った様なものがある。

あれは物体に魔力が過分に宿るからこそ生まれるものだと思っている。

魔力が宿り、長い年月を経て生まれる一種の精霊。

「絡繰は、ちゃんと“生きている”んだな」

答えはない。

俺の声が絡繰本人に届いたかは分からない。

だがこの先、彼女に良い変化があることを期待しよう。

僅かに笑う絡繰茶々丸と言う存在が、いつか自分を知るその時に、少しばかりの期待を寄せておこう。

「っはあゝ……………」

何もない真っさらな地で、果てにも見える地平線を眺める。
どこまでも続くようにも思える地平線は、勿論ただの幻だ。
空間の大きさとしては、転移魔法陣を中心とした半径50キロメートル。

「中身は好きに造っちまってもいいんだよな？」

そう言つて俺は振り返る。

「ああ。これはお前にくれてやった物だ。転移魔法陣で私の別荘に繋がっているが、ここはお前の場所だ」

マクダウエルはそう言つて、横に並んだ。

「お前はここに何を造るんだ？」

「造るものは決まつてる。俺にはもう一度この目で見てみたい風景がいくつもあるからな」

躊躇いなくそう答えて、術式の展開を始める。

「悪い、少し戻つててくれないか？　ここから先は余り見せたくないでな」

「分かったよ。完成したら私に見せるよ？」

「分かつてる。ここをくれたマクダウエルが驚くくらいのものを造つて見せるさ」

久々に、心が躍った。

かつて見たあの世界達の風景を記憶から引き摺り出して、この空間

に定着させる。

簡単な事ではないが、俺にはそれを容易に可能とする“力”がある。千年と数百年ぶりに見る景色の為に、俺はそれを使おう。

「エヴァで構わん。今後は呼びにくい名で呼ぶなよ」

転移魔法陣に乗ったマクダウェルはそう言って、転移魔法陣を起動させた。

「ふうん……？」

流石に長生き同士、良い関係は作れそうな気がする。

まあ、数百年を生きるような種族には、別れと言うものが付き物だし、そう言うところで共感がない訳じゃないしな。

常に孤独で、誰かと寄り添えたとしても、いつかは別れが来て……

「空間管制の情報を展開、領域拡大……魔力供給率は……今の状態じゃ少ないか」

……今は目の前にあることだけを見よう。

あまり考えても、意味が無い。

「さて、始めようか……この世界の創造を」

そう呟いて、俺は俺が所有する、最高峰の拘束具を外す。

蒼い瞳と紅い瞳。

顔を覆うのは白黒の二色の模様。

この世界に来てから、二度目の解放の感触を味わいながら、小さく
呟く。

機械的な感じのある音声認識の術式をいくつも展開し、術式に使用する魔力とは異なる力も利用してゆつくりと、今でも鮮明に思い出せるかつて見た風景たちを抽出する。

その風景を構成している全ての物質を分解し、始めから構成しなおす。

砂の一粒一粒を積み上げていくような精密作業だが、結局は記憶を頼りに術式を介して自動的に構成するため、あまり苦労はない。勿論、魔力の過剰消費や“異能”を使う所為で疲労は大きいものになる。

「配置は適当だけど、其処まで考えてられないから……」

そう呟きながらも、何十と積み重ねられた魔法陣達を横目で見て、操作盤となる主体の魔法陣を常書き換え続ける。

不要なものを右手で掻き消し、必要となるものを左手で書き足す。

俺が生まれながらにして持っていた、最初の“力”。

創造と破壊の二つの異能を以て、魔法陣を書き換え続け、同時に物質の分解と構成も同じく異能でこなしていく。

術式の展開も、展開し続けているだけで異常な量の魔力が消費されていく。

一定の間隔で十七枚に重ねられた魔法陣が、全部で二十八。

世界を渡る為の門を開く為の生命術式よりは、全然マシと言える量。

機械的に手を動かして、口では次に必要となる魔法陣を展開させる為に詠唱をし、足踏みと言う小さなアクションで魔法陣の切り替えをする。

それから小一時間すると、周囲の平面が続く風景は塗り替えられて、新しい風景に変化する。

やっとひとつの風景ができあがり、けれどそれに視線は送らない。まだ調整も必要だし、空間の固定化ができているかも確かめなければいけない。

「……循環不足か。できればそうなってほしくなかったんだが……」

操作盤にいくつものエラーが出たのを確認すると、俺はそう呟いた。ただ風景を造り上げるだけでは、形成した心象風景を空間として固定化することは難しいらしい。

「命の輪を加えるしかないかな」

間を置かずにそう結論を出すと、生命の創造に取り掛かる。

生命を生み出すなどと、まさに神の御業だが、別に本当に生命を作り出す必要はない。

風景と同じく幻想として表現すればいい。

この空間……ダイオラマ魔法球の内部が仮想現実なら、そこに造る生命は仮想生命とも言えいいのだろうか。

まあ、そんな感じ。

第一、風景を作り出すイコール、草木と言った生命を生み出す事には変わりない。

それは言うまでもなく、“意思”と言うものが極めて小さい為、動物などと比べれば数段も創造することがマシだ。

それでも、俺がまたあの風景を見られるなら、やって見せよう。

こうして“世界”を“形作っていく”のは何も初めての事ではない。初めてではないが、こうして限定された空間で造り上げるのは初めてのこと。

マジックアイテム
魔法具であるお陰でいくつもの制限はかかっているし、勝手も違う。それでも“創る”と言う事には慣れている。

「流石に人間とか知性の高い生物は無理だけど」

自分に言い聞かせるような感じで呟く。

そう言いながらも、仮想生命で構成する生命の循環の頂点に人間などよりも数段も存在としての格が高い竜種を置こう、などと考えている所、自分勝手に創造するにも程がある。

勿論、風景は忠実に、そしてそこに棲息させる仮想生命も忠実に再現する。

いや……。

単に、俺が“ヒト”と言う存在を生み出したくないだけだ。

たとえヒトから逸脱した存在とは言え、基本的にコミュニケーションを取る相手といえば、それはヒトだから。

幻想とは分かりつつも、言葉を交わし、情をかけようなど、馬鹿げている。

それがこの、ダイオラマ魔法球と言う魔法具の中であれば、尚更だ。

「……アンイルヴァーナ、セプテムニス、イルフェニア、ソリユー
トス……」

かつて俺が行った事のある世界の名を呟く。

世界の名と言っても、別にそれが正しい固有名詞であるかは別。
世界にはまず名前がない。

其処に住まう人々がつけた名であったり、神がつけたものだったり、
世界樹がつけたものだったり……

ひとつの世界にも、幾つかの名が存在する事だつてある。

それでもその名が定着し、この俺が記憶している固有名詞として、
その名で呼び、再現する。

「ッ……！」

ズキン、と頭が痛む。魔力の残りが少ない。

記憶から選別して抽出。それに加えて異能与古代錬金術（元素の分
解や結合、魔術に近い古代錬金術。薬物調合などの場合は近代錬金
術）の併用。

術式の複雑さもあれば、多重操作で肉体的にも精神的にも負荷が大
きい。

これくらいで済むなら、安いほうだろう。

「あと少し……」

この“創造”と言う作業が始まって、もう三日ほどの時間が流れた
だろうか。

それでも延々と術式の展開や操作盤の書き換えを続け、創造と破壊
の異能を使い続けた。

これだけ解放状態が続き、異能を使っていれば、きっと次の暴走の周期は早くなるだろう。

「あと少しで、……」

懐かしいあの場所が見られる。

「ふう……」

最後の生命いのちの創造を終えて、一息つく。
流石に広範囲に及ぶ創造を行うのは骨が折れる。

「……………」

きつと、次の暴走までの時間は短くなっただろう。
七日に及ぶ創造の異能の発現。

“血”は使っていないから、極端に縮めることはない。
それでもかなりの時間を失った。
でも……

「この景色は、本当に懐かしい……」

千年以上も見られなかった景色たちがある。

この世界でも、故郷の世界でも見られない、あの懐かしい風景。

魔力を空間に行き渡らせて、地形の把握を行なう。

元々自分で造った風景で、その配置も理解はしている。

そこに息づく、仮の生命たちも、理解はしている。

それでも、今一度この風景たちを目に焼き付けよう。

まだ時間はある。

「あの屋敷を見るのも、もう1600年ぶりくらいになるな……」

大樹の生い茂る森の中、似合わぬ姿を見せるのは大きな洋館。

故郷の世界と、初めて行つた異世界に存在する、俺の住んでいた家。

……まあ、故郷の世界じゃ学生寮になってしまったのは、アレだけど……。

「……とりあえず、報告しないとな」

俺はそう呟いて、転移魔法陣のある場所に戻る。

屋敷から僅かに離れた、木の生えていない開けた場所。

転移魔法陣を起動すれば、風景はすぐに変わった。

レーベンスシュルト城。

ドイツ語で直訳して、人生の罪だかの意味を持つ。

故郷の世界にも、伝説で登場する城砦であると言われている建造物。この世界でもそれは伝説として語られているが、どうやら実際に存在したものであると言つのが、エヴァから聞いた話だった。

どうして伝説になっているのか、と言つのは、当時存在していた場

所が暗黒大陸の中でも辺境であり、外部との関わりが薄かった所為なのだろう。

そしてこの世界では、きっとエヴァがダイオラマ魔法球に取り込んだ事で、地上から無くなった為でもあるんだと思う。故郷の世界でどうして伝説とされるかは知らないが、この世界で伝説と言われるのは頷けた。

「おい。エヴァ、居るかー？」

城に入って、そう声をあげる。

まあ、応答はない。

「……めんどくせ」

“血の匂い”がするから、一応中には居るんだろう。

探すのも面倒で、砂浜にでも向かおうと決める。

とりあえず、今は少しでも休息を取る事の方が優先としておく。

七日も寝ずに術式を展開して、異能までも使ったんだ。流石に疲れている。

「たまにはゆっくりするのも、悪くないしな」

魔法関係に足を踏み込む事はなるべく避けていたが、まあ何故か踏み込んでしまう。

麻帆良の地で生活する事になったのは、踏み込んだというより、踏み外したというか、突き落とされた感があるが……

「……この風景全体が、罪の城の風景なのかねえ」

砂浜で城を見上げてそう呟く。

ただ、城と言うには少し物足りない気がするのは、気のせいではない。
もしかすると、この城は一部だけなのかもしれないな。

眠っていて夢を見ると、時折自分が“何時の自分”なのか分からなくなる時がある。

それはただ単に、“現在の自分”^{いま}を思い出したくないだけなのかもしれないけれど、分からなくなってしまう時がある。

1600年と言う時間は、それほどに長かった。

長かったからこそ、刻まれた記憶は、膨大で、

長すぎる時間は、夢と言う形で苦しみを与えてくる。

そう、例えばそれは、俺がまだ“人間”だった頃の記憶。

父に認められたいと足掻きに足掻いて、結局は認められる事無く俺は諦めて、

ただやらねばならないことだけをこなして、眠るだけの日々が過ぎていく。

叔父からの一本の電話と共に、両親の死を知り、故郷へと帰る。

父の死には、哀しむという感情など無く、母の死に嘆く義妹を慰めるだけ。

そして訪れた、新たな日常は、古き友と、新たな友との時間。

そこには活気が溢れ、あのときの俺は、両親の死をきつと心のどこかで歓迎していたのかもしれない。

けれど、俺は“異能者”としての覚醒を遂げて、戦いの中へと身を投じ、友を守る為に力を奮った。

その果ては、友を自らの手で殺すという結末が待っている。

そんな夢を、まるで追体験でもするかのように、味わっていく。

それが俺にとつての苦痛だった。

記憶は、苦痛しか生まなかった。

歪み狂った不死の心は、幾度壊れてもまた戻り、ただ延々と、夢を見る度に苦痛を味わう。

だから俺は、眠ると言う事を嫌った。

“ヒト”ではなくなつて以来、眠れなくなつた当時は自身の変化に恐ろしさを感じていたものの、今ではもう、それが羨ましく思えるくらいになっている。

世界を渡るたびにかけられる“制約”と共に、俺は限りなくヒトに近付く。

だから睡眠も食事も摂る。

そうしなければ、力は取り戻せないから。

「……けれど、その結果が苦痛を生み出す事になるんだよな」

波の音を聞きながら、瞼を開く。

数日と使い続けた魔力の補給の為に小一時間眠ったが、夢と言うのは案外、短い間でも長く感じるものなのだろうか。

長い間、夢を見ていた気がする。

「こんな所で寝ているのか、貴様は」

不意にかけられる僅かに棘のある台詞。

「ああ、マクダ……じゃない、エヴァ。探したぞ」
「寝ていた貴様が言う台詞か」

まあ、それもそうだが。

「いや、広いし。探すの面倒だったし」

これが本音。

「それにしても随分時間がかかったようだな？」

「ああ。一週間ぶっ続けになったな」

聞かれた事に簡単に返す。

「で、私に見せてくれるんだろう？」

「勿論だ。さて、行くか」

砂浜から立ち上がり、エヴァの隣に並んで城へと入る。

最上階まで登れば、俺が譲り受けたダイオラマ魔法球に繋がる転移魔法陣に足を踏み入れ、起動させる。

視界がぶれて、そのぶれが治まれば、目に映る世界は、もう異世界だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7288y/>

世界の漂流者 in ネギま

2012年1月14日15時51分発行